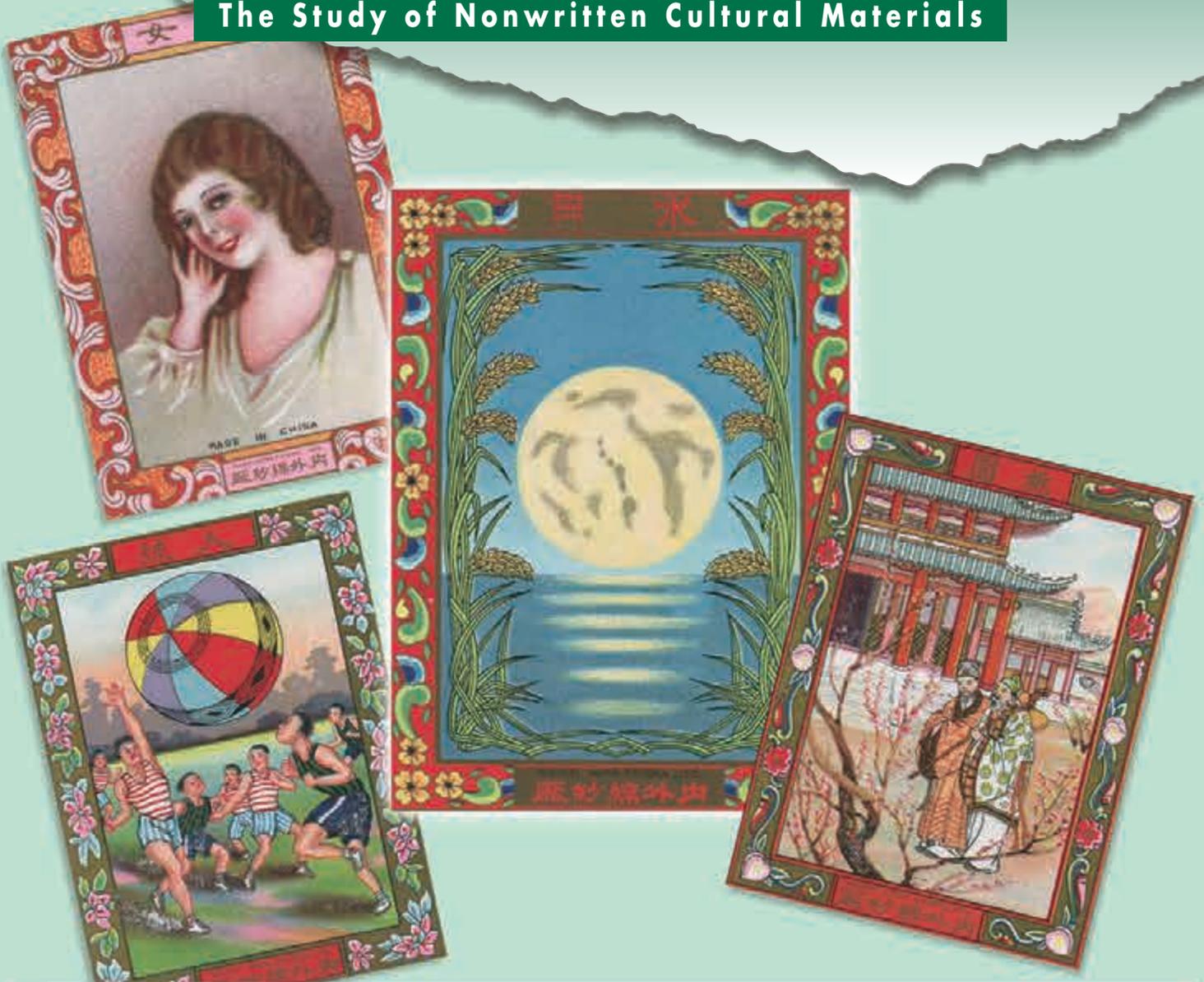


非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



CONTENTS

2014年度 非文字資料研究センター 第5回公開研究会		
『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界	2	
研究調査報告		
海外神社跡地のその後		
侵略神社・香港	辻子 実 6	
ホノルルの神社跡地の景観変容について	前田孝和 10	
中国・韓国の神社跡地報告	稲宮康人 14	
戦時下日本の大衆メディア研究		
台湾・福岡調査報告	安田常雄 20	
上海の在華紡研究のための基礎調査	孫安石・内田青蔵・須崎代 24	
研究会報告		
漢陽大学校東アジア文化研究所主催国際学術会議		
「グローバル時代と東アジアの文化表象」参加記	富澤達三 28	
招聘研究員レポート		
非文字で繋がる文化交流-神奈川大学非文字資料研究センターでの研究感想-	陳小法 31	
アントニン・レーモンドによる戦前の住宅設計-東西文化統合の一例	Yola Gloaguen 32	
日本における現代の民間叙事の新しい発展-神奈川県及び周辺のパワースポットを中心として-	楊 陽 33	
日本滞在記	長崎藝 34	
日本における口承文芸のデータベース化に関する調査の旅	包媛媛 35	
思い出の21日間		咸瓊恩 36
若手研究者レポート		
浙江工商大学東亜文化研究院訪問研究後記	張子平 37	
フランス国立高等研究院での絵画研究	小泉優莉菜 38	
広東省広州市中山大学への派遣調査	鍋田尚子 39	
サンパウロの熱と日系社会の温もりを感じたブラジル調査	松下里織 40	
セントラル・ユビックの狐仮面と狐伝承について-UBC図書館と人類学博物館の調査報告	程 亮 41	
清末の陸軍貴冑学堂と八旗学堂に関する調査報告	胡 穎 43	
「献上された海と奪われた海-韓国蔚山広域市北区江東洞板只のワカメ漁場に関する歴史と語りから-	新垣夢乃 44	
研究エッセイ		
首里城明け渡しと御獄		後田多敦 46
連載 戦時下メディア研究報告		
戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語-「用語編」その2	原田 広 48	
■研究班紹介 日本近世生活絵引・南九州編		56
■2015年度センター研究員研究協力者・奨励		56
■年報『非文字資料研究』への寄稿について		58
■主な研究活動		59
■Information		60

2014年度 非文字資料研究センター 第5回公開研究会

『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界

日時：2015年3月21日（土）10：00～17：00

会場：神奈川大学 横浜キャンパス 3号館 405室

開会挨拶：内田青蔵（非文字資料研究センター長）

趣旨説明：小熊誠（非文字資料研究センター研究員）

報告：富澤達三（非文字資料研究センター客員研究員）

豊見山和行（琉球大学 教授）

得能壽美（法政大学沖縄文化研究所 兼任所員）

川野和昭（南方民俗文化研究所 主宰）

コメンテーター：

安里進（沖縄県立博物館・美術館長）

田名真之（沖縄国際大学 教授）

真栄平房昭（琉球大学 教授）

本村育恵（青山学院大学大学院文学研究史学専攻 博士後期課程）

コーディネーター：

小熊誠（神奈川大学大学院 教授）

渡辺美季（東京大学大学院 准教授）

弓削政己（奄美市文化財保護審議会長）

公開研究のあらまし

小熊 誠

このテーマの公開研究会は、2014年10月26日に沖縄県立博物館・美術館で既に開催されている。この絵引きの内容は、まさに沖縄に関連するものであり、どうしても地元の方々にご報告したいというメンバー一同の強い気持ちがあり、沖縄で第3回公開研究会として開催した。その時は、150人入りの会場が満杯になるほどの方々が参集してくださり、大盛況であった。この事からも、沖縄の人々が、琉球の歴史に興味を深く持っていることがよくわかる。

しかし、このまま非文字資料研究センターでの報告なしにこのプロジェクトの仕事を終わらせるわけにはいかないだろうという意見があり、神奈川大学での公開研究会を開催することとなった。報告とコメンテ

ーターは、沖縄での公開研究会とほぼ同じではあったが、沖縄県立博物館・美術館の安里進館長にコメンテーターとして新たに参加いただいた。さらに、奄美史研究者の弓削政己さんからも研究に基づく貴重なご意見が寄せられた。このお二人の文章は、後半に掲載していただく。

発表の内容は、ニューズレターの前号（第33号）に渡辺美季先生が書かれているので、ここでは神奈川大学での公開研究会で議論されたことについて若干紹介したい。

奄美・沖縄の生活絵引については、すでに非文字資料研究センターの前身である21世紀COEプログラム「人間文化研究のための非文字資料の体系化」の時代に、当時の拠点リーダーであった福田アジオ先生が事前調査を始められ、沖縄で『琉球寫真景』などの資料を実見・検討されていた。それを受けて、渡辺美季

先生と私がこのプロジェクトを始めた。

このような経緯があるので、公開研究会では福田アジオ先生に質問の口火を切っていただいた。福田先生は、近世絵引を日本だけでなく、東アジアを対象を広げて研究を推進されたので、近世絵画に関する地域の違いに疑問を持たれていた。つまり、日本においては、庶民の生活を描いた近世絵画が多いが、中国や韓国ではそれが少ない。沖縄では、その状況はどうであるかという質問があった。

中国の絵画は、知識人を中心に「花鳥風月」や「山水」の自然を描く文人画が主流であり、人物画も高貴な人を描いていて、「清明上河図」のように庶民の生活を描くことは少なかったと思われる。琉球の時代、画家は中国に留学をしてその画風を学んできたため、琉球の絵師たちも山水画や歴代の琉球国王の御後絵などを描いていた。

このような近世琉球の絵画の中で、「琉球交易港図屏風」など一連の那覇港を描いた屏風図は、18～19世紀頃に描かれたもので、中国向けに描かれたものではなく、むしろ琉球に来た薩摩の在番奉行衆や商人の土産として買い求められて、その後薩摩や日本各地に流布したと考えられる。したがって、日本とは異なる琉球の風景を描き出しており、当時の那覇港に集まる中国船や薩摩船、那覇港周辺にいる琉球の人々や薩摩の人も描かれている。

また、「八重山蔵元絵師画稿」は、当時の行政府であった蔵元に勤める絵師のメモや習作集である。蔵元絵師の仕事は、異国船が漂着したとき現場に行き難破船や異国人を実写し、報告書資料を作成することで、現在の写真師のような機能があった。この画稿集にも異国人が描かれている。あるいは、八重山の年中行事や祭りなど人々の生活を描いて、それを巻物などにして薩摩藩や首里からの役人の土産や献上品にした。そのため、当時（19世紀頃）の八重山の庶民の生活が描かれており、絵引に最適な題材となった。

「琉球寫真景」は、京都在住の絵師岡本豊彦によって19世紀に描かれた、11景からなる奄美大島の絵画である。風景だけでなく八月踊りや大和相撲なども描かれているし、そこに描かれている有形民俗資料は、薩摩と琉球との比較も可能な題材となっている。

今回の『日本近世生活絵引奄美・沖縄編』では、那覇、八重山、奄美大島と、琉球諸島の中心と南北の絵画を

選んで、そこに描かれた人々の歴史や民俗を専門家による共同作業で基本的な分析作業ができたと思われる。しかしながら、県立広島大学の岡本弘道氏からも指摘があったように、そこに「描かれていないもの」を取り上げると、さらに深い分析が可能となったように思われる。

例えば、田名真之氏は、那覇の各地にあった墓地が描かれていない、あるいはハーリーや馬競争の行事が描かれているのに綱引きが描かれていないことを指摘した。真栄平房昭氏も、女性が描かれているが、女性の手にほどこされたハジチ（刺青）が描かれていないことを指摘している。これらを考えると、この屏風図を描いた目的をより深く読み取ることが可能であろう。

さらに、豊見山和行氏の報告では、文献資料と付き合わせていくと、そこに描かれた物が文献資料の記述と対応するものが見えてくるので、図像からだけでなく、図像の外にある文献資料と組み合わせる必要があることが指摘された。

今回の公開研究会では、絵引作業で担当者が議論してきたことからさらに広範な問題点の指摘が行われた。絵引を刊行しただけではなく、それをテキストとしてさらなる研究プロジェクトを組織して奄美・沖縄の絵引研究を展開する必要があることを痛感した。

王府の絵図調製事業からみた首里城那覇港鳥瞰図

安里 進

首里城那覇港鳥瞰図と「首里古地図」

琉球王国時代の18世紀から明治にかけて、那覇港や首里城を主題にした鳥瞰図が多数制作された。近景に那覇港、遠景には首里城を配置した大パノラマ鳥瞰図や、首里城や那覇港の鳥瞰図などだ。これら鳥瞰図の制作時期については、絵師が「当時の首里那覇」を描いているという前提で、描かれた諸施設の造営年代を手掛かりに制作年代の上限と下限が絞り込まれてきた。しかし、この「前提」には問題がある。

これらの鳥瞰図が制作された当時、すでに王府によって首里城や寺社、聖域などの「重要施設絵図」や「首里古地図」のような広域図が作製されていた。重要施設絵図は、王府の祭祀や儀式あるいは行政上の各種イベントを行う重要施設の会場図だ。施設の改築や

重要なイベントの際に作製されたようで、図帳にして管理されていた（安里 2013）。

これまで、「首里古地図」の製作年代については、首里全域を一斉測量して作製した城下図に当時の居住者名を注記したという前提で、描かれた施設の造営年代や居住者名から製作時期を押さえる議論が交わされてきた。しかし、「首里古地図」は、町方屋敷図調製事業で作製されていた各村屋敷図を接合した図に、首里城や寺社などの部分を既存の重要施設絵図から書き写した編集図と考えられる（安里 2014）。そして、各屋敷の居住者名については宗門改めなどの情報を利用した可能性がある。「首里古地図」のような編集図の場合、各情報源の年代とこれらを編集して1枚の図に仕上げたプロセスの解明が必要だ。

首里城那覇港の鳥瞰図にも、「首里古地図」のような編集図としての側面があるのではないか。たとえば、絵師の身分では容易に立ち入ることができない首里城のような空間については、重要施設絵図の首里城図などを参考にした可能性がある。鳥瞰図を制作した絵師には、王府の絵図調製を担当した具摺奉行所の絵師がいたが（鎌倉 1982）、彼らは王府の重要施設絵図を閲覧できる立場にあったと考えられる。

鳥瞰図の首里城正殿と重要施設絵図

具体的に検証してみよう。1715年再建の首里城正殿は、『中山伝信録』の図のように「1間唐破風」に「直線階段」の石段がとりつき、奉神門は「3棟3門」で中央門が高く左右門が低かった。1728年に正殿が大破したため翌年再建。唐破風と正面石段が「改規」（改修）された。「首里古地図」にみるような「3間唐破風」と「末広階段」に改められたと考えられる。その後、1754年に奉神門が「1棟3門」に改修され、首里城は琉球処分を迎えた。

しかし、鳥瞰図の首里城はこの変遷どおりには描かれていない。1770年代に描かれた呉著仁（屋慶名政賢）の鳥瞰図「首里那覇全景図屏風」では、奉神門は当時の1棟3門だが、正殿には40年以上前の1間唐破風と直線階段が描かれている。1879年頃の友寄喜恒の鳥瞰図「首里城図」は、呉著仁鳥瞰図の首里城をそのまま踏襲しており150年以上も昔の正殿を描いていることになる。

1830年代後半～1844年に制作された滋賀大学蔵

の鳥瞰図「琉球貿易図屏風」では、正殿は当時の3間唐破風と末広階段だが、奉神門は80年以上前の中央門が高い3棟3門で描かれている。1808年～1887年の間に制作された浦添市美術館蔵の鳥瞰図「琉球交易港図屏風」には、滋賀大鳥瞰図の首里城をそのまま踏襲しているために、50年～130年以上も昔の奉神門が描かれている。

以上の事例は、絵師が鳥瞰図の制作に際して、重要施設絵図を参照したことを示唆している。古い首里城図を写したために40年や80年以上も昔の正殿や奉神門を描いたのではないか。そして、後輩絵師が、既存の鳥瞰図の首里城部分を踏襲したために、さらに昔の首里城を描いていることも指摘できる。

首里城那覇港を主題にした鳥瞰図には、いくつかの「瞬間」だけでなく「遠い昔」も埋め込まれている。

【引用文献】

安里 進 2013 「首里王府の重要施設絵図調製事業」『首里城研究』No.15、首里城研究会。

安里 進 2014 「琉球王国の測量事業と印部石」『近世測量絵図のGIS分析 その地域的展開』古今書院。

鎌倉芳太郎 1982 『沖縄文化の遺宝』岩波書店。

「琉球寫真景」のこれまでとこれから

弓削政己

一、第1図、シマ（集落）と藩の「麓」

奄美市では、シンポジウム「『琉球寫真景』と奄美」（2002）以降、全11図のうち第1図を基に、「薩摩藩代官が滞在した鹿児島景のシマ—奄美群島における仮屋所在地集落の比較検討会—」（2012）が開催された。山頂から代官所を眺めた情景をあらわした『大正3年10月下浣 重信印刷所編著 鹿児島県名瀬港』（林蘇喜男氏蔵）が契機となった。

坂道が一部描かれている（岩多雅明氏）が、「朝仁びら登てい／^{かりや}仮屋ながめいれいば／^{やまと}大和仮屋人ぬ／^{きよ}弓射り清らさ」とうたわれた「弓射り」や周辺の島役人居住地構成などから、馬場、筋、射場、代官所周辺の集落形態など薩摩藩外城「麓」との比較の必要性が石上英一氏から指摘された。その結果、喜界島、奄美市赤木名、名瀬、徳之島、沖永良部島全地域の5か所からの報告があり、伝統的シマ（集落）の存在と共に麓という藩の影響の空間が明らかになった。武具の訓練

場などについて、1862年、琉球への異国船対策で大和浜に駐留した時の日記『鹿児島県史料集（26）桂久武日記』（鹿児島県立図書館蔵）に、「鉄砲稽古」「弓射場」等の記載がある。つまり、同様に各島代官所には武具の稽古場が設置されていたことを読み取ることは可能であろう。

二、特徴のあるシマを対象

さらに、全11図中、第1図は代官所、最後の第11図は名瀬湊沖の立神、第6図代官所周辺と考えられる場での大島北部の影響を示した八月踊り、第8図船漕ぎ競争、藩の影響による琉球相撲から大和相撲への変容を示す第10図（津波高志氏）、以上5点が代官所周辺と考えられ、重視されている。また、この第6図は、女性が太鼓（チジン）を打っている。これは大島北部では一般的である。このことから、代官所周辺の踊りは北部の影響を受けていると言える。一方、徳之島、沖永良部島の風俗と考えられ、1895（明治28）年頃と言われる「鹿児島県大島郡風俗」（笹森家蔵）の太鼓の打ち手は男性である。

産物の図として、第3図売買可能な現物税上納の芭蕉布の糸（低品質は代砂糖）と第5図専売制商品の黒糖生産が描かれている。奄美諸島の二大産物であるためと考えられる。

シマの宇検は、湾の奥が「イセン唐船繫場」（「大島古図」と、異国船と関係が強い地域という特徴がある。琉球寫真景は、奄美大島の西側の特徴的なシマを対象に描いたと考えられる。



「鹿児島県大島郡風俗」の一部、「踊りの図」（笹森家蔵）

三、人物の環及び今後の課題

奄美大島に来島していない京都四条派岡本豊彦と薩摩藩四条派及び奄美大島を結ぶ人物は、作成背景を含め明確でない。

岡本豊彦と薩摩藩四条派の人物には、京都見聞役であった税所文豹（～1852）や親交のあった沖永良部島出自絵師の木脇啓四郎（1817～1899）、京都留守居役の田尻種実（1794～1855）らがいる（下原美保「『琉球寫真景』考」・『近世薩摩における大名文化の総合的研究』、原口泉、丹羽謙治『薩摩藩文化官僚の幕末・明治』）。しかし、京都藩邸関係史料は少ないと言う（松尾千歳氏）。

他資料との比較も必要である。琉球寫真景は名瀬、名音、宇検を描いている。近代ではあるが、作者不明、1881年の「大島郡島植物図稿」（国立国会図書館蔵）、前述「鹿児島県大島郡風俗」は、目的は違うが、琉球寫真景以外のシマを描いている（宇検のみ重複）。そのことは、彼らに琉球寫真景の知見があり、それ以外の地域を描いたとも考えられる。

この絵図作成の目的について、石上英一氏は、①「島津氏の南島支配誇示のための宣伝」、「婚姻関係上の上級の貴族か武家への贈答品」②「精緻な名瀬の描画など、統治の保安上の情報に関わるので、藩権力の了解が必要ではないか」という検討も必要だと言う。さらに、絵図作成過程について、①「朝仁越からの名瀬の俯瞰画は、名瀬・名瀬湾の平面図・街区図（たとえば白尾の赤木名図のような）」が前提②それを三次元の俯瞰図に展開させている③「そのため、名瀬の代官所の積極的な関与・了解が前提、絵師の巡行路との関わり」の視点も要すると指摘する。以上、若干の状況や課題を明らかにした。

研究調査報告

海外神社跡地のその後
侵略神社・香港

調査：2015年1月25日～2月1日

辻子 実

(非文字資料研究センター 研究協力者)

香港

香港の観光パンフを見ると、あこがれのホテルの筆頭として挙げられるのが、ザ・ペニンシュラ香港（香港半島酒店）だが、ザ・ペニンシュラ香港本館3階336号室には、泊まることはできない。1941年12月25日、日本軍が司令部を置いたのがこの部屋で、イギリス側との降伏条件交渉が行われた歴史があるからである。

1941年12月13日、日本軍は香港・九龍半島の要塞地帯ジン・ドリンカーズ・ラインを突破し、九龍半島を制圧。そして、12月25日、イギリス軍は降伏し日本軍の軍政下に入る。香港では、「暗黒のメリークリスマス（黒色聖誕節）」と呼ばれている。

イギリス領香港総督が日本に降伏した1941年12月25日から、日本がポツダム宣言受諾によって降伏する1945年8月15日までの3年8ヶ月間にわたる日本統治時期を、香港では「三年零八個月」と呼んでいる。

占領後、日本軍政府は、直ちに香港ドルに代わる貨幣として、悪名高い「軍票」を大量に発行した。そして、なんら保障ない軍票と交換された「香港ドル」は、ポルトガル領マカオでマネー・ロンダリングされ軍用資材などの購入などに使われたのである。【写真1】

ヨーロッパ植民地からのアジア解放を旗印に掲げた「大東亜（植民地解放）戦争」にも関わらず、マカオが解放されなかったからくりがここにある。



写真1 香港軍票

侵略神社・香港

香港にあった神社に関しては、日帝下香港の歴史に関する先駆者である和仁廉夫氏の『香港—旅行ガイドにならぬアジアを歩く』（梨の木舎・96）などで語り尽くされていると考えていた。

アジア各国に軍靴を進めると同時に、各地に侵略神社が創建されていくが、有名な神社（神宮）としては、台湾神社（神宮）、樺太神社、朝鮮神宮、南洋神社（パオラ）、昭南神社（シンガポール）、そして戦時中最後に発行された鎮座記念切手で有名な関東神宮などがある。これらの神社は、当時の絵葉書や雑誌などで、概ねその規模などを知ることができる。

南海神社

絵葉書や雑誌などに載っていないのに、南海神社が有名なのは、靖国神社附属博物館である遊就館に社号碑が展示されているからである。しかし、神社の鎮座地に関しては、不明だった。【写真2】

遊就館展示解説では一この「碑」は大東亜戦争中、第二遣支艦隊香港攻略戦以後の麾下戦死者を祀るため、1942年に香港島にあった艦隊司令部構内に造営した「南海神社」の境内入口に建っていたものである。戦後その司令部庁舎は元の英国陸軍兵舎（ビクトリアバックス）に戻ったが、英国陸軍はこの碑を破棄することなく三十余年を経た1978年夏、兵舎移転に際して、旧日本海軍関係者が希望するならば返してもよいとの好意を示した。大東亜戦争中に海外戦地に建てられた、この種の建造物で、現存するものは殆ど無い。香港攻略戦当時



写真2 南海神社社号碑



写真3 『VICTORIA BARRACKS 1842-1979』 P99・105

の海軍最高指令官であった新見政一元中将以下、旧海軍の関係者有志が協力して、1980年6月18日香港から移設し、靖国神社に奉納されたのである。碑面揮毫の原清中将は新見司令長官の後任者である。—と記されているが、ビクトリアバックスが、どこにあったのかは記されていない。

『VICTORIA BARRACKS 1842-1979』（HEADQUARTERS BRITISH FORCES HONG KONG・1979）を紹介したサイトに出会い、南海神社跡地調査を行った⁽¹⁾。【写真3】



写真4 1977年当時のビクトリアバックス



写真5 ビクトリアバックス跡地（2014年）

南海神社は、「管内神社」と呼ばれる神社である⁽²⁾。軍管内は、軍事機密として地図上でも白紙であることが多く、絵葉書や雑誌などに載ることもなく、軍隊日誌などにその存在が散見されるに止まっている。

そのような事情であっても、南海神社に関しては『VICTORIA BARRACKS 1842-1979』に階段が写っているため、位置の特定は容易と考えていたが、ビクトリアバックス跡地は、香港公園などに造成され、軍営だった面影は残っていない。

今回の調査に協力して頂いた高添強氏⁽³⁾から、階段が描かれている地図を提供して頂き、鎮座地の特定はできたが、跡地には英国領事館・英国文化協会が建てられており、今回の調査では神社遺物は確認できなかった。【写真4、5】

国民学校内神社（香港神社）

香港国民学校にあった校内神社「香港神社」も確認されている⁽⁴⁾。

旧香港国民学校の校舎及び跡地は、聖保羅男女中学校として転用されてきたが、現在は政府管理建物になっており、中庭にある神社遺物の確認はできなかった。歴史的建造物ということで、建物は保存されるようである。（香港国民学校跡地・堅尼地道 Kennedy R 26）

香港国民学校にあった神社狛犬（L=400.H=650.W=250）は、日本人学校小学部に1997年頃に寄贈され、



写真6 旧香港国民学校



写真7 日本人学校

玄関に設置されている。(藍塘道 Bule Pool R.57)【写真6、7、8】

狛犬の基壇には「昭和十六年六月献之・京都市西山観一」と刻まれる。



写真8 国民学校狛犬
L=400.H=650.
W=250 (2)

香港神社

香港では、未鎮座に終わっているが「香港神社」の創建が計画されていた。

香港神社は、「大東亜共栄圏の大親神として、また香港の守護神として、廣大無辺なる御神徳を讃え奉り、香港香ヶ峰の中腹眺望絶景清明の地域をトして天祖天照大御神の永遠の御鎮座を仰ぎ奉りたる神社である。目下鋭意建設が急がれている⁽⁵⁾。」

香港国民学校内神社も「香港神社」という名称だったこともあり、紛らわしいが、官社として創設計画がなされている。

香港神社(計画)社殿鳥瞰図⁽⁶⁾を「満州国」建国忠霊廟と比較してみたい⁽⁷⁾。

内苑神門及び廻廊は、建国忠霊廟様式と仮称したい建築様式であるが、帝冠様式を採用したのであろう。拝殿・



写真9 香港神社鳥瞰図



写真10 建国忠霊廟

本殿は、木造建築で計画されたものと思われる。鳥居は、侵略神社に多く見られる「靖国鳥居」ではなく、「明神鳥居」のようである。ともかく、台湾の建功神社と並んで、従来の神社建築様式と大きく異なる社殿群が計画されていたようである。【写真9、10】

上亜厘畢道 Upper Albert R. に建立という記録があり、香港動植物公園(旧・大正公園)は、神社の内苑計画だったようである。

香港動植物公園と総督府の間の上亜厘畢道 Upper Albert R は、1945年後の造成によって地形が変わっているため、鎮座地の特定は困難になっている。

セント・アンドリュース教会

九龍のセント・アンドリュース教会(彌敦道 Nathan R.138)は、HPで「第二次世界大戦中は、日本の占領軍が司令室そして神道神社として使用していました⁽⁸⁾。」と、記しているが、『教会100年誌』では「1945年に開放された際、セント・アンドリュース教会は神社として使われていました。神主と憲兵隊長が旧牧師館に住んでいました⁽⁹⁾。」「教会は仏堂に変えられてあり、祭壇や旗が飾られてあり、火葬された兵隊の灰も棚に並べられていました⁽¹⁰⁾。」と表現に差異がある。

「骨壺」を神棚に置くことは考えられないので、神社



写真11 セント・アンドリュース教会



写真12 セント・アンドリュース教会・牧師館

があった説に関しては、不明な点が多い。今後、写真などによる検証が必要であらう。【写真11、12】

忠霊塔

巨大な「忠霊塔」も建設されていた。

「香港九龍全地域は勿論、港内に出入する船舶、並に遠く南方海上を航行する艦船よりも、直ちに敬仰し得る香港島要部の略々中央、金馬倫山西側二軒屋高地上(将来忠霊塔の高地と命名される予定。標高約335m)に、陸海軍協同して各方面有志の寄附金をも加へ公費百四万円を投じ、支那事変、大東亜戦争を通ずる南支作戦地域唯一の忠霊塔を建設し、同作戦間死没せる軍人軍属の全遺骨を納めて、永く其遺烈を顕彰すると共に、聖戦の意義を明確にせんとするもので、目下工事中である。」⁽¹¹⁾

その基礎石積みは、現在も超高級マンション嘉樂苑の外縁部石積みとして残っており、忠霊塔の計画規模が想起できる。【写真13】



写真13 香港・忠霊塔完成予定図

(現・馬己仙峽道 Magazine Gap R.)
引用文中の元号は西暦に改変

【参考文献】

- 『VICTORIA BARRACKS 1842-1979』(HEADQUARTERS BRITISH FORCES HONG KONG・1979)
- 『香港—旅行ガイドにないアジアを歩く』(和仁廉夫・梨の木舎・96)
- 『香港日本人学校の歴史』(櫻村富士夫編著・香港日本人小学校・2006)
- 香港都市案内集成第10巻・「軍政下の香港—新生した大東亜の中核」(濱下武志・李培徳・監修解説、ゆまに書房、2014年12月25日)原典、斎藤幸治著・香港東洋経済社・1944年2月20日
- 『celebrating St.Andrew's church-100 years of history, life and personal faith』(St.Andrew's church・2004)

【注】

- (1) Nankai Jinja, Hong Kong (South Sea Shrine), 1942-1945
<http://www.louis-chor.ca/nankaiji.htm>
- (2) 管内神社に関しては、坂井久能の「管内神社の創建」『国立歴史民俗博物館研究報告』147(2008年)などが詳しい。
- (3) 『香港今昔』(三聯書店(香港)有限公司・2013年)『香港戦地指南・1941』(三聯書店(香港)有限公司・1995年)などの編著書がある。
- (4) 『香港日本人学校の歴史』櫻村富士夫編著・香港日本人小学校・2006
- (5) 『香港都市案内集成第10巻・「軍政下の香港—新生した大東亜の中核」』(濱下武志・李培徳・監修解説、ゆまに書房、2014年12月25日)原典、斎藤幸治著・香港東洋経済社・1944年2月20日
- (6) 『香港都市案内集成第10巻・「軍政下の香港—新生した大東亜の中核」』(濱下武志・李培徳・監修解説、ゆまに書房、2014年12月25日)
- (7) 建国忠霊廟建築様式については、『「満洲国」建国忠霊廟と建国神廟の建築について—両廟の造営決定から竣工にいたる経過とその様相—』(津田良樹・神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議・2008年)に詳しい。
- (8) 1945: St Andrew's Church was used as a Shinto shrine and the old vicarage used as a Japanese
<http://www.standrews.org.hk/about-us/our-history/>
- (9) 『celebrating St.Andrew's church-100 years of history, life and personal faith』St.Andrew's church 2004・P17
in time to be interned during the Japanese occupation. When he was released in 1945, he found St. Andrew's had been made into a Shinto shrine. A Shinto priest and the local chief of the Japanese Secret Police had been living in the Old Vicarage.
- (10) 『celebrating St.Andrew's church-100 years of history, life and personal faith』St.Andrew's church 2004・P18
which had been transformed into a Buddhist temple, complete with altars, banners, etc. and with the ashes of dead soldiers in racks.
- (11) 『香港都市案内集成第10巻・「軍政下の香港—新生した大東亜の中核」』(濱下武志・李培徳・監修解説、ゆまに書房、2014年12月25日)

研究調査報告

ホノルルの神社跡地の景観変容について

前田 孝和
(非文字資料研究センター 客員研究員)

はじめに (調査研究の主旨)

海外神社の跡地 (境内地) の景観「変容」について中島三千男は、改変、放置、再建、復活の4つに分類、その要因 (背景) を政治的要因、社会の変容、経済発展の度合い、文化伝統、支配交替の刻印の5つに類型化しそれぞれが独立しているのではなく融合しているとする⁽¹⁾。

この変容の分類及び類型化は、所謂、海外神社の狭義の定義である、

一つは、近代以降、対外戦争の勝利により、日本の領土 (植民地、台湾・樺太・朝鮮) や租借地 (関東州)、あるいは委任統治領 (南洋群島) となった地域 (これらは「外地」と呼ばれた)、さらには、「満州国」や日本の占領地 (中国・東南アジア) 等に日本国政府や居留民によって建てられた神社である⁽¹⁾。

を前提にしている。一方、海外神社の広義の定義である、

日本の統治権の及ばないハワイや、南北アメリカ大陸等において、日本人の移民によって建てられた神社である⁽¹⁾。

は、今日まで跡地の調査対象になっていなかったため変容の分類及び要因の類型化がどのような意味を持つかは不明だった。

本論は研究ノートの中間調査報告となるが、未調査対象の「日本の統治権の及ばないハワイや南北アメリカ大陸等」の内、ホノルルの現存神社に限定した場合、変容の分類及び要因の類型化がどのように展開されるかを述べることを目的とする。

ハワイの神社

アメリカ合衆国ハワイ州は、日本と関係深い特別な地域である。明治元年の一回限りの移民を経て明治18年 (1885) から大正13年 (1924) までの間に約20万人がハワイに移住し、当初は砂糖黍畑の労働者が中心で

あり、その後次第に都市部へ進出して日系社会を築いた。先の大戦前には、日系アメリカ人 (ハワイ生まれ) 及び日本人の人口は膨れあがり、昭和14年 (1939) の日系アメリカ人が119,361人 (77%)、日本人が35,681人 (23%) で、合計が155,042人であり、日系社会はハワイ総人口414,991人の37.3%を占めるまでになっていた⁽²⁾ (一時期は40%を超えた)。2010年4月1日のハワイの総人口は1,360,301人で、日系人はフィリピン系の342,095人に次ぐ312,292人、総人口の22.9%である⁽³⁾。

そのようなハワイ日系社会には、日本の宗教も持ち込まれた。ハワイに渡った日本人が初めて接した宗教は、当然キリスト教である。明治22年 (1889) には浄土真宗本願寺派の仮分教所ができたが、本格的に移民が伝統宗教を欲するようになるのは、出稼ぎから定住へ推移していく過渡期、1890年代前後からである。浄土宗 (明治27年)、西本願寺 (明治30年)、東本願寺 (明治32年)、日蓮宗 (明治33年)、曹洞宗 (明治36年)、真言宗 (大正3年) が開教、明治中期から大正初期までにほとんどの既成仏教が活動を開始している。仏教も白人社会からの誤解を受けながら、先の大戦が始まるまでには大きな勢力となり、日本語学校、婦人会、青年会、各種学校も経営、日系人は「お寺」を中心に生活するとまでいわれるようになった。その他に金光教、天理教、生長の家、諸宗教も戦前に入っていた。

当然、神社も仏教の実質的かつ継続的布教とほぼ同時期に創立されている⁽⁴⁾。最も古いのは、明治31年11月3日鎮座のハワイ島ヒロの大和神社 (現在のヒロ大神宮) とカワイ島ラワイのラワイ大神宮 (戦時中に廃絶) である。ハワイに存在した神社は、少なくとも59社を超えている。それらの神社の中には職員を置く大きな規模の神社もあれば、砂糖黍耕地や日本居住地の小祠、借家に祭壇を設けて参拝を受け入れる神社もあった。

大戦勃発によって、ハワイでは神職を含む日系社会の指導者のみが抑留され、多くはアメリカ本土に移送抑留された。神社は必然的に全て活動を停止、資産の没収、さらには解散をして残余財産を赤十字や慈善団体に寄付をしたりもした。

このようなことから、戦後、本土からハワイに戻って来た神職 (一部は戦時中に日本に帰国) を中心に民家などの一室を借りての再開となった神社や、その後廃絶した神社もあり、現存しているのは、ハワイ島ヒロのヒロ大神宮 (明治31年11月3日鎮座)、オアフ島ホノルルのハワイ大神宮 (明治36年創祀)、ハワイ出雲大社 (明治39年布教開始)、ハワイ石鐘神社 (大正2年創祀)、ハワイ金刀比羅神社ハワイ太宰府天満宮 (大正9年創祀) マウイ島マラエアのマラエア恵比須金刀比羅神社 (大正3年鎮座)、同島ワイルクのマウイ神社 (大正6年鎮座) の7社、宮司が在住しているのはホノルルとヒロの5社のみである。

廃絶神社は52社でオアフ島23社、ハワイ島17社、マウイ島5社、カワイ島7社である。ここに廃絶神社跡地の景観変容について研究課題が存在している。

神社移転の理由

ハワイに奉祀・創建された神社はまず借家の一室に祭壇を設けたか、借地に建てたかである。財政的に確立されていない当初は一定期間の契約による借家・借地であり、その後移転を繰り返すか新境内地を神社又は個人が購入し神社を新築、移築するものである。アメリカの法律に基づいて非営利法人として認可されていくのは、活動を開始してから早くも数年後であり、財政的組織的に確立するのも後年である。

一方、旧版図地にあった神社の境内地は寄付や募金での買収による神社所有地の場合が多く、神社の廃絶までに改築して規模が大きくなることはあっても移転するのは稀である。それらの神社は敗戦による日本人引揚に伴い廃絶し、跡地の景観変容が起こった。

ハワイでは移転による跡地の景観変容と廃絶による最終跡地の景観変容という2類型が考えられる。本論は前者の移転による現存神社の跡地の景観変容がテーマとなる。

又、景観変容の要因 (背景) はアメリカでは政体に変化のない統一国家であるため戦時中及び終戦直後の異なる状況を除き跡地の改変のあり方のみが主題となる。

移転による旧境内地の景観変容

ホノルルに現存する神社は、ハワイ大神宮、ハワイ出雲大社、ハワイ石鐘神社、ハワイ金刀比羅神社ハワイ太宰府天満宮 (一法人) の4社である。その跡地は様々に変容し有効転用されている。ハワイの中でもホノルルに現存している4社の跡地の変容について述べる。

①ハワイ大神宮 (DAIJINGU TEMPLE OF HAWAII)

ハワイ大神宮は、ホノルルの人気観光スポットであるヌアヌ・パリ展望台 (裏オアフ島を眺望出来る展望台) に行く途中の緑豊かな地域にあり、ヌアヌ渓谷公園 (Nuuanu Valley Park) の奥にある住宅を改造した神社である。鎮座地はプイワ街61番地 (61 Puiwa Rd.) である。

配神として米国国祖ジョージ・ワシントン、カメハメハ大王 (ハワイ統一者) を祀るのは珍しい。

境内地の移転の変容は次のようになる。

1、明治36年 (1903) ~明治39年 (1906) アアラ・レーン (Aala Ln.) の借家に奉祀。跡地はベレタニア地区公園 (Beretania Community Park)。

一帯はワエネア・アパートメント (Waenea Apartments) とクワイ・ガーデンズ (Kukui Gardens) のアパート群と駐車場。

2、明治39年 (1906) ~大正7年 (1918) 同地 (借地) に社殿を創建。跡地は前述の通り。アアラ・レーンは戦後の開発で一部痕跡を残して廃道となっている。

3、大正7年 (1918) ~昭和16年 (1941) リリハ街1517番地 (1517 Liliha St.) を購入し移転遷座。跡地は図書館 (Liliha Public Library) と高層アパートに挟まれた一画で、奥に二階建てアパート、前面が駐車場でリリハ街沿いには The Bus の停留所がある (写真1)。



ハワイ大神宮跡地
写真1 リリハ街にあったハワイ大神宮の跡地。奥が2階建てアパート、前面が駐車場、バス停がある。

4、1941年～1944年 戦時中は活動を停止、1944年に境内地とワヒアワ分院は接収・売却された。跡地はアイスクリーム売店と貸家になった。

5、1946年 北ベニヤード街(N Vineyard Blvd.)のオールド・レーン (Auld Ln.) 横のウォン・レーン 1049番地 (1049 Won Ln.) の借家で再開。跡地は現在も住宅。

6、1946年～1957年 ヤング街 2307番地 (2307 Young St.) の借地に仮社殿を建設移転。跡地は2階建てのアパート。

7、1957年～現在 ヌアヌ渓谷公園 (Nuuanu Valley Park) に隣接するプイワ街 61番地 (61 Puiwa Rd.) の住宅を戦時中の接収売却の補償金や寄付金で購入改築して移転、現在に至る。

ハワイ大神宮の跡地は、州都であるホノルルにあるため、州の発展、人口増による土地価格の高騰により引き続き住宅地、商業ビルとして有効活用されている。

②ハワイ出雲大社 (IZUMO TAISHAKYO MISSION OF HAWAII)

ハワイ出雲大社は、正式には出雲大社教ハワイ分院という。ダウンタウンに隣接して鎮座し、近年は日本のテレビで定期的に取り上げられ、観光バスが毎日数回定時に訪れている人気「観光スポット」となっている。

1、明治39年(1906) アアラ・レーンの借家で大社教旗を掲げて布教開始。跡地のアアラ・レーン一帯は、ベレタニア地区公園、二つのアパート群 (Waenea Apartments と Kukui Gardens) と駐車場である。

2、明治40年(1907)～昭和16年(1941) 北キング街 (N King St.) と北ベレタニア街 (N Beretania St.) の三角地点のパラマ (Plama)、レレオ・レーン (Leleo Ln.) の奥の借地、北キング街 410番地 D (410-D N King St.) に社殿を建立、後に敷地を購入。跡地はクワイ・ガーデンズという2階建てのアパート 20棟が建っている (写真2)。

3、1941年～1945年 戦時中は活動を停止、1944年に全ての財産を半強制的にホノルル市郡政府に寄付した。公園局と衛生局が神殿と階下ホール、社宅を公立学校の教師の社宅、貸家として使用した。社殿は荒廃し現在地に移動するまで放置されていた。

4、1946年～1968年 ヤング街 1916番地(マカレー McCully St. と南キング街 S King St. の角、1916 Young St.) のホテル倉庫を改造し社殿として再開した。跡地は2階建て商業ビルである。社殿返還訴訟期間



ハワイ出雲大社跡地
写真2 北キング街と北ベレタニア街が交わった三角地のパラマにあった出雲大社跡地は、2階建てのアパート群で、通路の奥が境内地で社殿があった。

9年を経て勝訴、返還された。

5、1968年～現在 旧境内地は再開発のため荒廃した社殿を現在地まで約400メートル移動させ、修理の上、1968年12月に遷座し、今日に至る。現在地は北クワイ街 215番地 (215 N Kukui St.)。

③ハワイ石鎚神社 (HAWAII ISHIZUCHI JINJA)

ハワイ石鎚神社は、ワイキキとハワイ大学のほぼ中間の位置に鎮座している。

1、大正2年(1913)～大正6年(1917) 南キング街 (S King St.) アラパイ通り (Alapai St.) 突き当たりワイキキ (Waikiki) 側の借家に奉斎。跡地は商業ビルと駐車場一帯と思われる。

2、大正6年(1917)～昭和16年(1941) 南キング街 2020番地(2020 S King St.)を購入して社殿新築。境内地は存続。

3、1941年～1954年 戦時中は活動を停止、境内地と社殿は閉鎖。戦後の1949年に没収、1954年に返還された。1945年～1954年の間は社務所の自室で活動。4、1954年～現在 社殿の返還を受けて再開し、現在に至る。2階建ての2階に社務所と社殿があり、1階を建築事務所に賃貸している。

④ハワイ金刀比羅神社ハワイ太宰府天満宮 (HAWAII KOTOHIRA JINSHA HAWAII DAZAIFU TENMANGU)

ホノルル空港からH1フリーウェイ (Free Way H1) をワイキキに向かう途中のダウンタウン入口の右側に望むことができる。元はハワイ金刀比羅神社と称していたが、1952年太宰府天満宮を勧請し1990年に現社名のハワイ金刀比羅神社ハワイ太宰府天満宮に改めた。

1、大正9年(1920)～昭和7年(1932) 北キング

街ウォルター・レーン (Wolter Ln.) の借家 (又はプア・レーン Pua Ln. の初代宮司広田斎の自宅か?) に鎮祭、翌大正10年(1921) ウォルター・レーンに社殿を建立。跡地は住宅地域である。

2、昭和7年(1932)～昭和16年(1941) 近接の北ベニヤード街 1307番地 (1307 N Vineyard Blvd.) に移転。北キング街カマ・レーン 1121番地 (1121 Kama Ln.) 突き当たりでもある。フリーウェイ通過のため境内地の3分の2が接収され、その跡地は道路である。

3、1941年～1951年 戦時中は閉鎖、戦後の1948年に没収、1949年に返還訴訟、1950年勝訴、1951年に返還された。跡地は前述の通り。

4、1951年～1962年 同地にて活動を再開。跡地は前述の通り。武道場もありハワイで最大規模を誇った。

5、1962年～現在 フリーウェイ通過のため敷地の3分の2接収されたが、社殿は未接収地にあり、社務所を新築した。その後社殿を新築した (写真3)。現地番はカマ・レーン 1045番地 (1045 Kama Ln.)。



ハワイ金刀比羅神社
写真3 今はハワイ金刀比羅神社ハワイ太宰府天満宮と称、右奥がフリーウェイで、道路通過のため境内地の3分の2が接収された。

おわりに

ホノルル現存4社の跡地の景観変容要因(背景)を中島三千男の視点で見ると次のようにいえる。①政治的要因=国家体制は連続して民主主義であり、戦時中のアメリカのヒステリックな日系人に対する政策及び行為によって実質的に活動を停止させられ、財産没収、競売、さらには終戦直後にも財産を没収されたが、没収財産の

返還又は賠償・謝罪する施策をとったアメリカであった。信仰の自由を標榜するアメリカでも政治的要因によって不幸な結果を生んだが、それは人間の自由を求める力で回復された。②社会の変容=アメリカや日本の社会の変容とは関係がないが、政治的要因が強く関連した。③経済発展の度合い=ハワイは経済発展の度合いが高く、移民として入った日本人にとって旧版図とは違い境内地を自由に選択する資本力はなく、まずは日本人が集合しやすい便利な市街区域の住宅地や商業地の借地の平地に建てられた。④文化伝統=跡地の景観変容の多様性は、その地域の文化伝統との違いと関連しているというが、大戦前後のキリスト教文化を背景とする圧迫のほかには、境内地の所有権の有無など経済的根拠と都市計画が原因となり変容するのみである。⑤支配交替の刻印=政体は不変のため支配・勢力が交代した事の『刻印』は跡地には全くない。

この景観変容要因は、ハワイ全体の神社に共通するものと思われる。

跡地の景観変容は改変、放置、再建、復活の4分類であるが、ホノルルの現存4社の全てが「改変」であり、それは住宅、商業ビルに変容しており、変わったところでは公園、駐車場、道路である。

今後、ホノルルの廃絶神社、ハワイ島、マウイ島、カワイ島の神社跡地を調査することで、改変の姿は多様にわたる可能性があり、また旧版図との比較で海外神社の捉え方にも変化をもたらす可能性があるかもしれない。

【注】

年号表記について、大戦前までは元号(西暦)、戦時中及び戦後は西暦表記とした。これはハワイの日系社会の実態に即していると思われるためである。

- (1) 中島三千男『海外神社跡地の景観変容—さまざまな現在』(神奈川大学21世紀COE研究成果叢書 神奈川大学評論ブックレット37 御茶の水書房 2013年4月)
- (2) ハワイ日本人移民史刊行委員会『ハワイ日本人移民史』(布哇日系人連合協会 1964年4月)
- (3) 「2013 State of Hawaii Data Book Individual Tables」(http://dbedt.hawaii.gov/economic/databook/2012-individual/_01/)より引用した。
- (4) 本論のハワイの神社については前田孝和『ハワイの神社史』(平成11年 大明堂)を引用した。

研究調査報告

中国・韓国の神社跡地報告

稲宮 康人

(非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

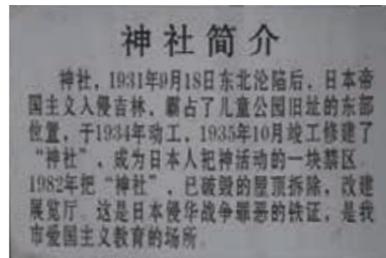
大日本帝国の地理的な広がり、それぞれの跡地が戦後たどってきた時間を写しだし、各国の戦後の歩みを比較検討することを目指し、神社跡地の撮影・調査を行っている。その一環として、2015年上半期に中国・韓国の神社跡地を訪れた。ここでは、各跡地についての簡単な報告を行う。また、中国にあった神社の位置がわかる資料は非常に少ないので、調査に使用した資料も併せて報告する。

中国（吉林省・黒龍江省）の神社跡地

2015年1月28日から2月7日まで中国の吉林省・黒龍江省で神社跡地調査を行い、吉林省の吉林・延吉・四平、黒龍江省の牡丹江・哈爾濱・哈爾濱市平房（東郷神社）を訪れた。以下報告を行う。

吉林神社跡

吉林神社跡地は児童公園となっている。神社遺構が多く残っており、旧拝殿などの建物がある。改装され4D影院児童大世界となっている建物と、ほぼ放置されている建物がある（写真1）。石灯籠（写真2、A）は歴史遺跡



写真A 吉林神社跡。



写真1. 吉林神社跡。神社建物がそのまま使われている。正面の拝殿跡と思われる建物の中はゴミ置き場?となっていた。



写真2. 吉林神社跡。保存されている石灯籠。柵に取り付けられている解説は写真A参照。



写真3. 牡丹江神社跡。烈士紀念碑。塔の上には胸を刺された兵士の像。

として保存されている。本殿?は取り壊され、跡地は吉林市児童公園管理所が入る建物となっている。

牡丹江神社跡

牡丹江は濱綏線（哈爾濱—綏芬河）と圖佳線（圖們—佳木斯）が交差する、満洲北東部の中心都市だった。現在も黒龍江省の有力都市である。神社跡地は北山公園となっている⁽¹⁾。公園中央には抗日戦争暨愛国自衛戦争烈士紀念碑が建っている（写真3）。池宮城隍『写真集旧満洲』には「塔がある場所は忠霊塔跡地で、この背後の山に牡丹江神社があった」とある。神社遺構は何も残っていない。

延吉神社跡

延吉は朝鮮との国境地帯に位置する延辺朝鮮族自治州の中心の街である。神社跡地は人民公園となっている。何かの礎石（写真4）だったと思われる五角形の石と、高台に上る階段（写真5）は、神社のものと推測される。延吉神社についての史料は発見できず、遠藤誉『卡子』所収「延吉市街図」や複数のネット記事を参照した⁽²⁾。

四平街神社跡

四平にあった四平街神社跡は軍の基地となっている（写真6）。基地は立入禁止で、入口には撮影禁止の看板が掲げられている。2006年に調査が行われており、『旧満州国の「満鉄付属地」跡地調査からみた神社の様相』に調査結果が掲載されている。



写真7. 哈爾濱神社跡。



写真8. 東郷神社跡付近。



写真9. 鉄嶺神社跡。人民公園。

哈爾濱神社跡

哈爾濱は19世紀末、カルイムスカヤから満洲を通過してウラジオストクに向かう、シベリア鉄道の短絡線、東清鉄道の敷設拠点として松花江河岸に誕生した街である。現在は黒龍江省の省都になっている。哈爾濱神社は昭和10（1935）年の陸軍記念日三十周年を記念して、日本人居留民会が哈爾濱駐屯軍の後援を得て創建した神社だった。哈爾濱駅を背に紅軍街を5分程進んだ場所にある紅傳広場に面して、ツインタワーが建っている場所が哈爾濱神社跡である（写真7）。通りの反対側にはロシア時代から続く黒龍江省博物館がある。神社遺構は何も残っていない。

東郷神社跡

東郷神社は、哈爾濱郊外の平房地区にあった関東軍防疫給水部（通称七三一部隊）の基地内に作られていた構内神社。史料が無く、詳細は不明。神社名は七三一部隊が正式に認可される前に東郷部隊という名（部隊長石井四郎の偽名東郷一が由来か?）で活動していた⁽³⁾ことから名づけられたと思われる。森村誠一『悪魔



写真B 七三一部隊基地復元図



写真4. 延吉神社跡。何かの礎石か?



写真5. 延吉神社跡。神社の階段。



写真6. 四平街神社跡。木が茂っている場所が神社跡地。

の飽食』所収の「部隊要図」を頼りに現地に行ったが、詳細な地図が七三一部隊の博物館である侵華日軍第七三一部隊旧跡の入口に掲示してあり（写真B）、それを元に大体の位置を推定した（写真8）。一帯には、今も使用されている七三一部隊の建物も多数あったが、神社遺構は何も残っていない。

中国（遼寧省・吉林省）の神社跡地

2015年4月24日から5月4日まで中国で神社跡地調査を行い、遼寧省の鉄嶺・營口・遼陽・大石橋・瀋陽（文官屯）・錦州、吉林省の通化を訪れた。

鉄嶺神社跡

鉄嶺神社があった鉄嶺公園は現在も公園である（写真9）。神社の痕跡は無い。2006年度に詳しい調査がなされており、結果は『旧満州国の「満鉄付属地」跡地調査からみた神社の様相』に掲載されている。

營口神社跡

遼河河口の街營口は、天津条約によって上流の牛荘が開港場となったことで南満洲最大の貿易港となったが、東清鉄道南満洲支線（後の満鉄）敷設と大連の建設によって、その地位を低下させた。満鉄本線の大石橋駅から營口駅までは支線が延びており、營口神社は營口駅前の公園内にあった。現在その場所は人民公園となっている。神社跡地には革命烈士紀念碑が建つ（写真10）。公園の案内板には神社があったという記載（写



写真 10. 營口神社跡。烈士紀念碑。



写真 11. 遼陽神社跡。白塔公園。写真右が白塔。左奥に圓通禪院（神社跡地）。



写真 12. 遼陽神社跡。本殿跡地に建つ圓通禪院。この建物裏に石柱（写真 D）がある。

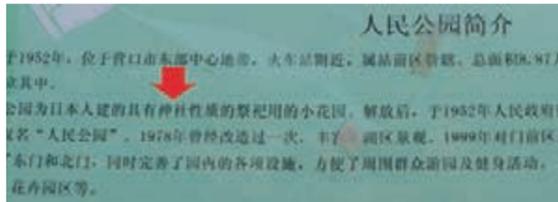


写真 C 營口人民公園案内版

真 C) がある。

遼陽神社跡

遼陽神社は、明治 42 (1909) 年、12 世紀に建てられた仏塔の傍らに創建された。現在は白塔公園(写真 11) となっており、神社跡地には 2002 年に建てられた圓通禪院がある(写真 12)。禪院の裏手には「昭和六年十一月三日」と刻まれた石柱が一つだけ遺されている(写真 D)。公園事務所は、社務所を改装したものと思われる(写真 13)。



写真 D 遼陽神社跡。石柱。

大石橋神社跡

大石橋神社は大石橋駅からすぐの場所にあり、この街の象徴ともいえる幡龍山の麓に建てられていた。現在、山全体が幡龍山公園となっており、遊園地などがある。



写真 16. 通化神社跡。楊靖宇陵園。建物前には楊の銅像。



写真 17. 通化神社跡。階段の上が陵園。下には東北抗日聯軍記念館。



写真 18. 文官屯神社跡？。大学構内の鳥居。

龍潭祠がある場所が本殿跡と推測される(写真 14)。また、祠へと上る階段の一部は昭和三年御大典事業によって造られたものと思われる(写真 15)。祠の傍らにある岩には奉獻と刻まれていたが(写真 E)、これは満洲時代のものかもしれない。第 12 回ばんりゅうの集い横浜大会事務所『旧満洲大石橋尋常高等小学校 ばんりゅうの集い』には、1981 年に神社跡地を訪問した記事がのっており、それによれば、この時点では神社遺構はかなり残っていたようである。



写真 E 大石橋神社跡。「奉獻」と刻まれた岩肌。左下にも碑文が刻まれている。

通化神社跡

通化はソ連軍侵攻後、関東軍総司令部が新京(現・長春)から移転した街である。また、1946 年 2 月 3 日に通化事件(旧日本軍の軍人を中心としたグループが共産軍を攻撃し、多数の日本人避難民が逮捕・殺害された事件)が起きた街でもある。通化神社跡地は、関東軍と



写真 13. 遼陽神社跡。神社社務所か？



写真 14. 大石橋神社跡。龍潭祠。本殿跡地か？左側岩肌に写真 E がある。



写真 15. 大石橋神社跡。奥にある階段が当時のものか？階段を上った先に龍潭祠がある。

戦い 1940 年に戦死した東北抗日聯軍の指導者楊靖宇が祀られた靖宇陵園となっている(写真 16)。一段高くなった陵園の下部には東北抗日聯軍記念館がある。陵園の裏手には石材が無造作に積んであったが、それらは神社に使われた石材なのかもしれない。神社の場所は日本通化会『遙かなる通化 旧満州通化省から引揚げた人々の思い』による。

文官屯神社跡？

瀋陽郊外、バスで 30 分程行った場所に 2 基の鳥居が残されている。遼寧兵器工業大学・瀋陽工業経済大学の構内に 1 基(写真 18)。大学裏門の外にもう 1 基がある(写真 19)。中国のネット記事⁽⁴⁾を基に、馬興國先生が調査を行い、場所を特定した。最寄りのバス停の名前が文官屯であったので、文官屯神社だと推定されるが、資料がなく確定できていない。文官屯地区には関東軍の兵器工場があったので、工場周辺に住んだ従業員の為の神社だったかもしれない⁽⁵⁾。

錦州神社跡

錦州は満洲境界と満洲中心地を結ぶ奉天線(北奉天—山海関)と、錦州から熱河省へと向かう錦古線(錦縣—古北口)が分岐する鉄道の要衝であった。満州事変後、関東軍によって爆撃された街でもある。錦州神社は駅の北東方向にあり、忠霊塔と並んで建っていた。神社跡地は遼瀋戦役記念館となっている(写真 20)。遺構は何もない。本殿があった場所は烈士像が立つ位置か⁽⁶⁾。神



写真 19. 文官屯神社跡？。門の外にある鳥居。



写真 20. 錦州神社跡。中央の像が烈士紀念碑。両側の黒い石碑には戦死者の名が刻まれている。



写真 21. 浦項神社跡。トクス聖堂。

社の場所は錦州会『最後の満洲 錦州終戦前後』所収「錦州市街図」により確認した。

韓国の神社跡地

2015 年 3 月 25 日から 4 月 1 日まで韓国南部で神社跡地調査を行い、慶尚北道の浦項・九龍浦、慶尚南道の馬山・鎮海、全羅北道の群山、全羅南道の木浦(松島神社)・光州(松汀神社)を訪れた。なお、今回の跡地調査にあたって瀧元望氏作成のリストを参照している。

浦項神社跡

迎日郡浦項邑(現・浦項市)にあった浦項神社。神社跡地はカトリック教会のトクス聖堂となっている(写真 21)。周辺は住宅地である。神社遺構は何も残っていない。

浦項の祠跡

1936 年作成の地図には、神后山の稜線上に鳥居マークが描いてあり、祠があったようである。丘の上に登ってみたが、何も見つけることはできなかった(写真 22)。

九龍浦神社跡

浦項から市内バスで 40 分程行った場所にある漁村・九龍浦には、保存された日本家屋が立ち並ぶ九龍浦近代文化歴史通りがある。その通り沿いの海を望む丘の上に九龍浦神社が建てられていた。境内の構造が完全に残っ



写真 22. 浦項の祠跡。丘の頂上にあった。



写真 23. 九龍浦神社跡。境内地へと続く階段。階段両側には狛犬。



写真 24. 九龍浦神社跡。本殿跡。現在は龍王堂。右の建物は忠魂閣。



写真 F. 忠魂塔基壇の石版

ており、当時の様子をうかがうことができる韓国では珍しい場所である。階段、玉垣、狛犬、石碑など多数の遺構がある。本殿跡には龍王堂が建ち(写真 24)、その隣には忠魂閣が建てられている。再整備の際に掘り出された手水鉢や、砲弾型の石が忠魂塔基壇の隣に並べてある(写真 25)。忠魂塔基壇に刻まれた昭和年号は消され、檀紀年号が上から彫られていた(写真 F)。鳥居も埋まっているらしいが、発見できなかった⁽⁷⁾。



写真 G. 民俗館として使われている旧社務所?の写真

馬山神社跡

馬山神社は明治 42 (1909) 年に馬山港を一望する馬山公園の中に創立された。現在、馬山神社跡地には馬山第一女子中学校が建っている。神社は高台に作られ、学校入口から海へと



写真 28. 松島神社跡。石碑は階段上り口の右側に建つ。



写真 29. 松汀神社跡。灯籠。右下階段にも「奉」の字が刻まれている。



写真 30. 松汀神社跡。拝殿?がそのまま使われている金仙寺の大雄殿。

一直線に下りていく道は、神社の参道で(写真 26)、途中には鳥居もあった。学校入口に残っている階段はそのまま使用され、灯籠の笠が一つだけ植え込みの囲いとして使われている(写真 27)。戦後社務所?を民俗館として使っていたが(写真 G)現在は取り壊されている。取り壊した旧社務所の屋根瓦は学校内の歴史館に保存されている(写真 H)。部外者が学校内に入ることは、どこの国でも難しくなっているが、構内での撮影許可だけでなく、日本語ができる教師による構内案内までしていただいた。



写真 H. 歴史館に保存されている瓦

松島神社跡

木浦の松島神社跡地(写真 28)は、詳細な調査が 2005 年になされている。『旧朝鮮の神社跡地調査とその検討』(2006)を参照されたい。2005 年時点から変わったところは、神社へと上る階段が「東明洞七七階段」と名づけられ、歴史が書かれた石碑が建てられたことである(写真 I)。



写真 I. 「東明洞七七階段」石碑説明文



写真 25. 九龍浦神社跡。忠魂塔基壇。再整備の際に掘り出された手水鉢、砲弾型の石、礎石が並ぶ。左側にある建物は志魂閣。



写真 26. 馬山神社跡。参道跡。坂を上って、つきあたった所が神社跡。写真手前辺りに鳥居がたっていた。



写真 27. 馬山神社跡。階段は当時のもの。右側植込みの石垣には灯籠の笠がある。

松汀神社跡

光山郡松汀邑(現・光州市)にあった松汀神社。神社跡地は、湖南線(大田-木浦)から光州に向かう慶全西線が分岐する松汀里駅の近傍、地下鉄松汀駅からほど近い松汀公園にある。社務所、拝殿、石灯籠(写真 29)、南無阿弥陀仏と書き換えられた石碑などが残っている。神社の建物は金仙寺として使われている(写真 30)。拝殿へと続く旧参道には顕忠塔(写真 31)が建てられている。この神社の存在と場所は諸葛氏のご教示に依った。

群山神社跡

群山は錦江河口に位置する植民地朝鮮の主要貿易港であった。群山神社は大正 5 (1916) 年に大正天皇即位を記念して、海を望む高台(現・月明公園)に創建された(写真 32)。山頂付近には愛国志士李仁植銅像、義勇不滅と刻まれた群山義勇消防隊の石碑などが建てられている。遺構は残っていない。

鎮海神社跡

鎮海は要港部のある海軍の街だった。それを引き継いだ韓国海軍の軍港が今もある。鎮海神社は、頂上に日本海戦記念塔(今は取り壊され、同じ場所に鎮海塔が建てられている)が建つ兜山(現・帝皇山)の中腹にあった日露記念館の跡地に大正 5 (1916) 年に創建された。神社跡は鎮海南山初等学校となっている(写真 33)。学校の敷地内には立ち入ることができず、遺構が残ってい



写真 31. 松汀神社跡。顕忠塔の向こうに神社跡。右の石塔は日本時代のものか?



写真 32. 群山神社跡。小学校の奥に見える山の腹に神社があった。



写真 33. 鎮海神社跡。鎮海南山初等学校。

るかどうかが確認できなかった。現在の鎮海は 30 万本の桜が咲き乱れる春の軍港祭で有名である。

おわりに

今期の調査では、旧満洲の遼寧省・吉林省・黒龍江省の跡地調査が中心となった。初めての調査となった神社跡地も 10 社程はあったと思う。今後は、まだ手薄な黒龍江省や内蒙古の神社跡地に行く予定としている。

韓国南部の調査は調査済の場所ばかりだが、松島神社のように石碑の建造という歴史的な行為をとらえることができたのは収穫だったのではないだろうか。

そもそも、海外に造られた神社は、名前と当時の住所しか判明していない神社が大変に多い。この調査が、その空白を少しでも埋めることになれば幸いである。

【注】

- (1) 回想・牡丹江神社 <http://accafe.jp/manshu/index.php?%E7%89%A1%E4%B8%B9%E6%B1%9F%E9%96%A2%E9%80%A3%E7%94%BB%E5%83%8F>
- (2) 延吉旧影 008- 延吉神社 http://blog.sina.com.cn/s/blog_48b3cedd0102vey9.html
張鼓峰事件の戦跡を訪ねる ある老母との出会い <http://www.2u.biglobe.ne.jp/~akashids/ryokou/choukohou/dalian20.html>
- (3) 青木富喜子『731』新潮社
- (4) 沈陽發現「日軍神社門框」是日軍為避邪而修 <http://www.nen.com.cn/77972966595362816/20040819/1473703.shtml>
- (5) 家族の第 2 の原風景、満州・文官屯(ブンカントン)を訪ねて② <http://blog.goo.ne.jp/isokawas/e/cb6c26b98e4d9f1e4c22cf9f8e0da2a5>
- (6) 錦州の旅・行ってきました編 <http://www.geocities.co.jp/SilkRoad/8467/zinzou.html>
- (7) 韓国にもあった日本人町(前編) http://www.asahi.com/and_M/interest/gallery/20130416clickdeep/11.html

研究調査報告

戦時下日本の大衆メディア研究
台湾・福岡調査報告安田 常雄
(非文字資料研究センター 研究員)

I 拠点地域を追って

「戦時下日本の大衆メディア研究」班（戦時下メディア班と略称、以下同じ）では、第一年度において、センター所蔵紙芝居 241 点を軸に、植民地も含めた各地域での資料発掘に努め、同時に他の分野の戦時下メディア研究の視点を組み込んで、視点の共有化を進めてきた。具体的には、第一にセンター所蔵紙芝居の解題執筆を進めること、第二に戦時下で紙芝居が上演された地域の現場を調査し、その記録を収集すること、そして第三にはこうした活動を通して、未見の紙芝居作品の発掘に努め、紙芝居アーカイブの現状把握を進めることである。定例の研究会は 2014 年 4 月 30 日、同 8 月 27 日、2015 年 3 月 26 日と計 3 回開催し、ゲストスピーカーを招いて、活発な意見交換を行ってきた。

こうした基本的活動は今年度にも継続されていくが、ここでは昨年度末に実施された台湾・福岡調査を中心に、その活動内容と今後の課題について報告する。

前述のように戦時下紙芝居の研究にとって重要な視点の一つは、それらの作品群がどのような地域を拠点にいかなるメカニズムに従って上演されたかの究明である。この課題は現代史研究の文脈では、同時代の翼賛運動、産業報国運動などの底辺の解明という課題であり、国策紙芝居が戦後の都市や農山漁村などの地域（職場や家庭）にどのような形で浸透し、人びとを内部から戦争に動員したのかという主題である。それは戦時下の大衆意識の構造の問題でもあり、敗戦後の大衆意識との連続と断絶の問題ということもできる。しかし現在のところほとんど研究は存在しない。

こうした地域の実態解明という課題に接近する手がかりの一つが当時刊行されていた雑誌『教育紙芝居』の記事である。戦時下国策紙芝居は、日中戦争開始の翌年、日本教育紙芝居協会という組織が設立され、全国的な組

織活動が展開された。昨年度の第二回研究会において報告された「日本教育紙芝居協会の活動(1938～1942年)」(新垣夢乃、松本和樹)によれば、地域活動にはいくつかの拠点が存在したと思われる。同協会の本部日誌によれば、本部から指導人員が派遣された地域とその頻度は、東京(97)、大阪・京都(27)、秋田(19)、神奈川(18)、福岡(17)などが並び、植民地台湾(21)もかなりの頻度を記録している。そこでは本部からの出張によって、紙芝居の実演や講演会・研究会が行なわれており、研究と実演を両輪とした活動が一般的であった。そうした拠点地域の存在は、その地域に独自の受け皿があったことを意味しており、実演・講演会・研究会などが地元の小学校などを舞台に実施されていることから、受け皿としての教員層の存在が想定される。それではどのような教員層がその担い手であったか、彼らの教育方法や文化運動の特徴はなにか、その接点はどこにあったかなど、今後の調査の課題が浮かび上がってきたのである。

「戦時下メディア」班では、そのなかで連絡の手がかりが判明した台湾と福岡について、まず先行的にその調査を実施することになった。

II 台湾調査

今回の台湾調査は、2015 年 2 月 26 日から 3 月 2 日にかけて行なわれた。その大きなきっかけになったのは、予備調査によって、戦前台南市にあった「本島人(台湾人)」向けの末廣公学校(現・進学国民小学校)が台湾における紙芝居活動の拠点の一つであり、同校の教師、山口正明が指導的位置にいたことが判明したからである。山口は台湾に紙芝居を移入した人物であり、「台湾では四、五年前迄紙芝居といふものを知らなかった」が、国語教育の一環として導入され、日中戦争後の二、三年の間には全島二百余りの学校で紙芝居が活用されるようになったと書いている(山口正明「台湾より」『教育紙

芝居』1938 年 9 月号)。こうして調査の焦点を旧末廣公学校における植民地時代の資料調査と、当時この公学校に通った子どもたちの聞き書きに絞ることになった。また併せて、現在台湾で紙芝居研究と実践を進めている陳晋卿さんの紹介によって、台中と台南で調査を進めることができた。

まず後者の調査によって台湾の紙芝居 12 点、紙芝居脚本 12 本が確認できた。所蔵者は台中在住の収集家、郭双富さんであり、また国立台湾歴史博物館、そして紙芝居脚本については、台湾大学に所蔵されている皇民奉公会製作と思われる脚本である。紙芝居作品については日本国内と同一のものも含まれているが、台湾での刊行によるものには、裏の説明書きが日本語と台湾語の二段併記になっていることが最大の特徴である。たとえば相馬泰三脚色、加太こふじ絵画による「みのる秋」(1943 年 12 月 28 日、台北市皇民奉公会中央本部発行)のラストシーンには次のような併記が見られ、台湾語では「食糧増産の決意」が加えられている。

「作造さんの家にも、いつか、ちゃんとした神棚が設けられ、朝夕、その前に額づいて皇軍の武運長久を祈り、心から職域奉公を誓ふ親子三人の麗しい姿が見られるやうになりました」(日本語)

「作造さんの厝内。発外久、也安置神棚了。早起時與暗時、全家族、恭々敬々、立在神棚の面頭面、祈願皇軍武運長久、立誓職域奉公 對食糧の増産決意ト更加一層打拼」(台湾語)



写真1 台湾調査スナップ(台南市進学国民小学校にて)
中列左 王灼明氏、後列右から二人目 張義成氏
同三人目 李添旺氏

そして現在の進学国民小学校が所蔵する旧末廣公学校関係の資料については、『退職者履歴書』、『昭和拾壹年八月同窓会会員名簿』、『昭和十二年度公文書綴(甲)』、『第

十六回卒業記念写真帳』(1940 年 3 月)などが確認された。現在のところ直接紙芝居に関する記述は確認できていないが、映像教育に関する記述が見られる。こうした文書資料の発掘とともに、同校の校長である李添旺さんの計らいで同校の卒業生の聞き書きを実現できたことが大きな成果であった。それは王灼明、張義成のお二人であり、王さんは 1932 年、張さんは 1933 年生まれの同学年、ともに末廣公学校 21 回生、卒業は 1945 年 3 月である。聞き書きの内容は多岐にわたったが、紙芝居に関しては、学校では 1 年から 4 年まで、教室で行なわれ、歴史の勉強の一環であったと記憶されている。言葉は日本語で行なわれ、内容は「おとぎ話」が多かったといわれており、これは前々日に台北で聞き書きした東俊賢(1930 年生まれ、同校卒)さんの話とも符合する。また王さんの記憶では、中国人が登場する紙芝居もあったが、その中国人は青龍刀をもって描かれ、「逃げ足の早いシナ兵」「戦争できないシナ兵」などの兵士像が描かれていたという。

また紙芝居は、隣組などでも週に二、三回行なわれており、それは日本語の勉強という側面が強く、日本語の話せる高女卒(台湾第一、第二高等女学校など)の女性が演じ、観客は大人も子どもも集まったという。また「防諜」(スパイ)関係の紙芝居もあり、子どもにやたらと話しかけてくる「怪しい人」がいたら、駐在に報告するようにとの指導があったといわれている。



写真2 台湾での紙芝居風景
台南市・郭双富氏所蔵

この聞き書きで印象的であったのは、紙芝居はやはり小学校低学年までのものであり、小学校五、六年になると映画に熱中したと王さんは語っている。特に台南の町で育った王さんには、台南という都市そのものが子どもに

とっての劇場であったようだ。子ども十銭の映画館はいうまでもなく、林百貨店の五階には、金魚すくいや五銭の木馬もあり、五銭でマンガもニュースも週替わりで見られる遊びの空間であったからである。シンガポール陥落のときには、子ども一人に一個ずつゴムボールの特配があったという話も聞いた。

また台湾の紙芝居に関わる証言として貴重であったのは、張義成さんの話であった。張さんによれば日中戦争が始まってから、台南にも街頭紙芝居があったという。場所は神社の境内、紙芝居のおじさんは自転車に乗ってやってきたが、その自転車はペダルを踏むと太鼓になる仕掛けになっていて、またチンドンヤのように太鼓を腹に乗せて、叩いて子どもたちを集めていたと張さんはいう。紙芝居屋さんは何を売っていたかと聞いてみると、ワタ飴、水飴、白飴という答えだった。白飴とは「シンコ細工」のようなものであったようだ。さまざまな種類の飴が売られており、「台湾は砂糖がたくさんあるからね」と張さんは笑った。

私には今回の台湾紙芝居調査のあいだ、いつも頭をかすめていたのは紙芝居「サヨンの鐘」のゆくえであった。当時、「高砂族」とよばれた高山族の一人の少女が「高砂義勇隊」の出征を送るとき、濁流に吞まれて死んだという実話が、長谷川清総督時代のシンボルとして殉死の「愛国美談」となり、記念碑が作られ、歌になり、李香蘭主演で映画化された。もちろん紙芝居も作られ、皇民奉公会はその普及をすすめたのである。今回の調査でも会う人ごとに紙芝居「サヨンの鐘」のことを聞いてみた。しかしみんなの記憶に残り、即座に歌を口ずさむことはできるが、その所在を確かめることはできなかったのである。



写真3 映画「サヨンの鐘」(台湾総督府・満映・松竹共同作品、1943年)の新聞記事
台南市・郭双富氏所蔵

Ⅲ 福岡調査

福岡調査は、2015年3月12日から15日にかけて行なわれた。まず12日には九州大学総合研究博物館を訪問した。ここには近年レコード紙芝居のコレクションが収蔵されたという情報が入り、とりあえずその実態の一端を確認するためであった。同博物館の三島美佐子准教授に案内していただいた。レコード紙芝居なるものがあるとは聞いていたが、全身体験するのは初めてであった。

この資料群は宝珠山小劇場に所蔵されていたSPレコード、60,000点(裏表があるので30,000枚)のコレクションであり、現在地下の倉庫にダンボール詰めに入れ、整理中であった。このコレクションは同時代の流行歌・軍歌・童謡・長唄など多様な内容を含んでいるが、そのなかに数点のレコード紙芝居が混在していた。当日、視聴したレコード紙芝居は、「軍神広瀬中佐」(REGAL)、「軍神荒木大尉」(REGAL)、「愛馬の戦死」(コアレコード)、「軍神古賀連隊長」(太陽)、「日の丸太郎」(TEICHIKU)、「ラッキョウと兵隊」(KING RECORD)の6点であった。形式はほぼ片面3分程度で、リーガル・オーケストラ、キング管弦楽団などの楽団が参加し、語り手は島廻家勝丸、田村家吉丸などの芸人や青空コドモ会、日本児童音楽劇協会などの団体が参加している。全体として放送劇スタイルで、ラッパ・機関銃・列車音・馬のいななきなどの「擬音」が組み合わせられ、「露営の歌」や「敵は幾万ありとて」などの軍歌が臨場感を高めている。こうした複製技術の画一性は同一内容のまま、広域化されていき、それ故に動員効果が期待されていたと思われるが、そこでは紙芝居の本来もつ原初のメディアとしての具体性や偶然性(たとえばアドリブの自由)は喪失されていた。「効果」は果たしてどうであったのか。

次いで福岡調査は、3月13日から15日にかけて、福岡県朝倉市周辺で行なわれた。かつてこの町は駅を降りると、正面に大刀洗の陸軍飛行第四連隊の営門が見える「軍都」であり、甘木には多くの将校が住み、にぎわいを見せていた地域であった。1919(大正8)年朝倉郡三輪村、馬田(まだ)村、三井(みい)郡大刀洗村にまたがる45万坪に、長さ500m、幅200mの滑走路二本をもつ飛行場が完成され、周辺にはさまざまな軍事施設が作られ、総面積115万坪に及ぶ「東洋一」の巨大な航空基地となっていた(『筑前町立大刀洗平和記念館・常設展示案内』増補版、2013年)。

現在の段階では「軍都」と紙芝居の関係について、詳細は不明であるが、この地域に国策紙芝居の一つの拠点である三輪小学校が存在していたのである。当時の資料には次のように記されている。「三輪支部 福岡県朝倉郡三輪小学校は福岡県下の模範校、青年団は全国的な模範になってゐる。県では紙芝居を禁止しようかと云はれてみた位だったが、見事に活用して児童教育の武器として積極的に乗り出し、教育界の注目の的となつてゐる」(「支部結成」『教育紙芝居』第1巻第3号、1938年11月号)。また同小学校の紙芝居教師として平島三悟、石井幸夫、真鍋七郎、真鍋延寿、藤井辰実、橋津ウテナ、倉地善六の名前が記されていた。

3月13日、私たちは大刀洗平和記念館が所蔵する紙芝居4点の調査・撮影を行なった。一点は10枚の断片でタイトルなども不明であるが、三点は以下の通りである。「軍人援護日誌 七日間」(1942年7月15日、日本紙芝居協会、編輯者:佐木秋夫)、「英霊に応ふ」(1943年9月25日、軍人援護画劇、大日本画劇株式会社製作)、「彌作貯水池」(1943年9月25日、恩賜財団軍人援護会・軍事保護院、上里吉曉作、清水幸太郎画)。また翌14日には、福岡県立甘木歴史資料館において、紙芝居19点の調査・撮影を行なった。ここでは詳細は略すが、現在非文字資料研究センター所蔵分との重複もあったが、新たな作品も所蔵されていた。

それではこの地域の拠点と思われる三輪小学校関係の実態はどのようなものであったのだろうか。「三輪小学校」関係の資料が残存しているのは、筑前町のめくば一図書館ではないかという僅かな情報を頼りに、同図書館を訪ねることになった。ところが同図書館主任の藤井美希枝さんの好意によって、三輪小学校の紙芝居教師の中心にいたと思われる「平島三悟」という人物の輪郭がわかる資料を見つけることができたのである。それによると平島三悟は、1912(大正元)年生まれ、31年に朝倉中学校を卒業、33年福岡師範学校を卒業すると、三輪小学校、筑紫国民学校、甘木国民学校で教えていたこと、特に綴り方教師として熱心であり、彼は三輪小学校では『野情』と題する「学級週報」(ガリ版)を発行

していたこと、また戦争末期の44年6月には通信兵として召集され、1945年5月25日沖縄戦で戦死したことなどが判明した。彼は当時の教え子などに慕われていたようで、1993(平成4)年には『野情』(No.1、1940年5月7日～No.14、1941年2月)を採録した同名の記念誌が刊行されていたのである。ここから浮かび上がってくるのは、戦時下紙芝居と「綴り方運動」との関わりであろう。この地域では周辺の市町村史のなかにも「綴り方運動」展開の記述をみることができる(たとえば『浮羽町史』下巻、1988年)。



写真4 福岡県朝倉郡三輪小学校五年混合組「学級週報・野情」
福岡県朝倉郡筑前町・めくば一図書館所蔵

こうした地域の実態を考えると重要なのは、もう一つの拠点としての寺院の存在である。3月15日、私たちが半ば偶然訪ねた、浮羽町光福寺住職(真宗大谷派)の佐藤智水さんやその母親である佐藤照子(1933年生まれ、1941年に小学校2年生)さんからは、1932年頃からお寺の日曜学校で紙芝居をやっていたという話を聞いた。作品としては「麦と兵隊」や「一粒の米」、また「くもの糸」のような法話の紙芝居を記憶しているという。戦時下の日本教育紙芝居協会浮羽郡連盟支部の記録では、故人である佐藤憲雄さんの名前が記録されており、その実態の究明が望まれる。

「戦時下メディア」班では今回の地域の調査、紙芝居の現物調査を一つのステップに国策紙芝居の実態を深めていきたいと思っている。

研究調査報告

上海の在華紡研究のための基礎調査

孫安石 (非文字資料研究センター 研究員)
 内田青蔵 (非文字資料研究センター長)
 須崎文代 (非文字資料研究センター 客員研究員)

上海と三井物産支店長会議議事録について

孫安石

神奈川大学 21 世紀 COE プログラムの租界班の共同研究で実施された 2006 年の上海における在華紡関連社宅の現地調査は、中国側の陳祖恩先生 (東華大学) と張尚武先生 (同済大学) の協力を得られたことで実りのあるものとなった。図面と聞き取りに関する一部の調査報告が「在華紡の居住環境について—上海の事例」(『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究成果報告書、2007 年) に収められている。続いて、在華紡の調査は、鐘紡の公大紡績が 1920 年代には本格的に青島に進出し、中国人経営の紡績会社を買収後に公大紗廠を名乗ったこともあるため、青島でも実施された。その研究成果の一部は「上海・青島における在華紡」(『中国朝鮮における租界の歴史と建築遺産』御茶の水書房、2010 年) として刊行されている。

中国近現代史を専門とする筆者にとって、在華紡と日本の中国進出の関係、そして日本との貿易や労働関係が極めて重要なテーマになることについては勿論分かっていたつもりでいた。1930 年代の上海では「工場法」と「工会法」の実施をめぐる国際労働機関 (ILO) と当時の中華民国政府、そして日本の在華紡の各工場において様々な駆け引き (工場の立ち入り検査など) があったことについて上海の学会で口頭報告するなどしたが、研究対象とするには生半可な気持ちでは臨めないと感じていた。

そのため、可能であれば上海と在華紡を扱う研究テーマには、近づくまいと過ごしてきたのであるが、2006 年当時、租界班に加わっていた建築学科の富井正憲が韓国の漢陽大学に籍を移して韓国における日本の紡績会社の住宅の調査を行っていたこと、また現在は建築史が専門の内田青蔵が新たなメンバーに加わっていることもあり、上海の日本人街を代表する虹口地区と在華紡の

社宅群に対する調査を再度行ってみたいかどうか、という意見が出された。そこで急遽、韓国の富井正憲と上海の陳祖恩先生に連絡をとり、大里浩秋と孫安石、内田青蔵、そして須崎文代を加え、10 年近く前の記憶を辿りながら楊樹浦路の公大紡績の社宅や裕豊紡績の工場、虹口の日本人街の一部、歩き回ったのが今回 (2015 年 3 月) の上海調査の主な目的であった。

この 10 年間で最も大きな変化を遂げていたのは、裕豊紡績 (東洋紡上海工場、新中国以降は上海第十七棉紡績工場に改称) の工場跡地が再開発され、ファッションの先端に行く各種ブティック専門店、レストラン、高級



図 1 戦前の倉庫



図 2 屋根の採光を活かしたスターバックス店舗



図 3 採光のためのこぎり型となっている屋根

クラブなどが立ち並ぶ「上海国際時尚中心 (ファッション・センター)」にさまがわりしていたことであった。この裕豊紡績の工場跡地は、戦前の在華紡時期を経て、新中国の文化大革命時期の混乱を乗り越え、改革開放後の今やスターバックスが入るまで、さまざまな変遷を辿りながらも生き残っているわけであるから、近代上海を代表する産業遺産の一つに数えられていることも理解できる。

横浜に戻ってから今後の上海の在華紡関連の建築調査に向けて資料を見直す必要があり、三井物産 (三井洋行) が東京本部で開催した支店長会議の記録を復刻した『三井物産支店長会議議事録』(丸善、2005 年) を再読する機会を持った。勿論、目当ての資料は、三井物産の歴代上海支店長の紡績に関連する業務報告であったが、比較的早い時期の 1916 年の議事録をみるだけでも幾つかの新たな事実を確認することができた。たとえば、藤村上海支店長の「棉花絲布報告」には、つぎのような記述がみえる。

「上海の棉花部支部としての成績は良好にして取扱高及利益等も前季に比し増加せり、(中略) 同社 (上海紡績会社を指す) の株主は過半数外国人にして近来に至り取締役の過半数亦英国人となり聊か従来に比し同社に対する基礎鞏固を欠くの嫌なきにあらざり。今日に於ては吾々を信頼し一任し居ると雖も一朝日英人間に於て実力を以て競争を開始する場合に遭遇せば形勢如何に変化を来すべきか逆睹すべからず。(中略) 此際当社は同社株主の三分の一若しくは四分の一を買収し、また一面本邦人を懲罰して株主とならしめ以て根本的に吾社の勢力を同社に扶植し置き他日の危険なからしめ飽迄経営の任に当らざるべからず」

この記述からは、三井物産の 1915 年の綿花の取扱いは「内外綿会社」と「上海紡績会社」を主な取引先としていたことにより価格的には安定していたものの、上海紡績会社のより安定した経営のために、イギリス人に牛耳られている経営権を根本的に三井物産が保有すべきである、とする議論がかわされていることが分かる。さらに上海支店長の藤村が、日本の紡績業進出は上海に止まらず、天津やその他の地方に紡績会社を建設経営すべきで、それにより綿花商売の発展を図るべきであることを、1915 年という時期からすでに主張していたことも注目に値する記述である。

急かば回れ。いましばらくの準備段階を経てから、さらに充実した上海の在華紡関連の建築と歴史の調査を継続的に実施していきたい。

中国在華紡研究の可能性

内田青蔵

これまで租界班の研究テーマとして、在華紡の研究が行われ、2007 年には大里・富井両氏による「在華紡の居住環境—上海の事例」が報告されている。今回の上海視察は、新たに租界班のメンバーに加わった内田と須崎の研究専門領域が建築史研究であることから、その専門領域を生かしてこれまで行われてきた研究を新たな視点により発展させるための予備調査といえるものであった。

ところで、大里・富井両氏の研究は、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化における非文字資料の体系化」の景観研究グループのひとつのテーマである「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説」の一環として行われたものである。具体的には、現在でも中国人の住まいとして、在華紡の施設として用意された多数の旧工場や旧社宅群などが活用されていることに注目し、こうした名も無きモノとしての建築物を通して、戦前期の日本企業の中国進出という人間活動の痕跡を解説しようと試みたものであった。そこで読み取ろうとしていた点は、在華紡に勤めていた人々の生活、すなわち管理者としての日本人と、労働者としての中国人の、住まいを中心とした居住環境の計画性であった。例えば、在華紡のひとつである公大紡績楊樹浦路社宅では、多数の社宅とともに敷地内には幼稚園や公園、病院からプールといった娯楽施設まで用意されていたことが報告されている。報告にあたっては、創建時の基礎資料が未発見のため、旧社宅は実測調査をもとに図面化している。分析では、社宅の配置計画に特に注目し、日本人用と中国人用の社宅がそれぞれ分けて配されていること、社宅の形式も日本人のものは畳敷きの和室と椅子座の折衷様式であったのに対し、中国労働者のものは伝統的な「里弄住宅」を想起させる狭い路地を挟んだ長屋建ての集合住宅であるなどそれぞれ異なっていたこと、諸施設が設けられているものの一貫した計画性は見られず、全体の計画性に乏しい傾向が見られることなど、興味深い報告が行われている。

大里・富井両氏の研究は、非文字研究としての社宅研究であるが、建築史分野でも、近年、企業の社宅研究が積極的に展開されている。建築史分野における社宅研究は、郊外住宅地研究から派生した研究といえる。この郊外住宅地研究は、近代特有の現象であり、イギリスのエベネザー・ハウードの提唱した田園都市の提案がよく知

られている。そして、日本の郊外住宅地化の要因のひとつに、この田園都市論の影響が挙げられている。また、ハーワードの田園都市論のルーツのひとつは、博愛主義者で紡績工場主のロバート・オーエンによって提唱された工場村の存在であった。この工場村とは、郊外に移築した近代的工場に働く従業員のために企業側が用意した住宅(社宅)とともに学校や病院、あるいは教会、店舗といった諸施設の整った住宅地のことであり、この在華紡の社宅群も、まさにこの工場村に匹敵するものともいえる。そして、両氏の研究は、建築史分野の研究がどちらかといえば日本国内の企業を対象に行われてきた社宅研究を、中国に進出した日本企業へと広げたものともいえるように思う。そして、こうした海外に視野を広げたことにより、研究テーマ自体が広がりを持つことができるようになったように感じられる。すなわち、同じ日本企業でありながら、国内で手掛けた施設と海外での施設の計画が同じものといえるのか?といった問いに象徴される“比較”という視点が新たに加わったからである。大里・富井両氏の研究により在華紡が工場村を用意し、日本人とともに中国人の生活環境の保護を積極的に進めていたことがうかがえるが、では日本ではどうだったのか、その計画性や建築そのもののデザインなどの質には差異があるのか、など様々な課題が浮かび上がる。当面は、こうした“比較”による研究の深化が求められるように思う。

なお、今回の視察では在華紡の旧社宅群とともに、上海では日本人たちが集中して住んでいた虹口地区を散策した。そこにもかつての日本人の住宅遺構である独立住宅や集合住宅が多数存在していた。詳細は不明だが、当時の建築図面の入手は難しいという。しかし、建築があれば実測で図面化できる。異国の地で日本人たちはどのような生活をめざしたのか、こうした住宅もまた当時の日本国内のものと比較し、研究すべき対象といえる。個人的興味からいえば、こうした住宅調査も非文字研究のひとつとしてぜひ進めたいと思う。

上海在華紡社宅および関連施設予備調査の報告

須崎 文代

今回の調査では、上海在華紡社宅関連施設として、楊樹浦路地区に現存する裕豊紡績・楊樹浦路社宅および裕豊紡績工場と、同じく楊樹浦路地区の公大紡績・楊樹浦路社宅の現地視察を行った。併せて、戦前期の上海における居住環境の事情を確認するため、虹口地区(共同租

界の日本人街)において当時の住宅が多数現存している状況や、この地区付近の里弄住宅群を事例として視察した。この度の調査は、上海在華紡社宅に関する今後の本格的な調査研究を進めるために、租界班メンバーで現況把握と情報共有を行うことを主な目的とし、関連施設の調査中はすべて陳祖恩教授にご同行いただき、現地住民への調査協力依頼に伴う折衝や当時の在上海日本人に関する専門知識の提供を受けた。

租界班における在華紡社宅研究は、まず上海に現存する在華紡社宅について、全体計画や個別の住宅の実態調査ならびに文献調査によって、在華紡社宅とそこで形成された居住環境を明らかにすることを目指している。

上海在華紡社宅に関しては、当研究班の大里、富井他によって既に全体的動向や個別の住宅群に関する概要が把握されている⁽¹⁾。また、日本国内における紡績工場の社宅(街)については、社宅研究会による論考⁽²⁾が知られ、これを中心としていくつかの研究成果がある⁽³⁾。これらの既往研究を基礎としつつ、上海在華紡社宅のより具体的な計画内容とそこで展開された日本人・中国人双方の労働者の居住環境に目を向け、在華紡社宅の特質を明らかにしていきたいと考えている。

1) 裕豊紡績・楊樹浦路社宅

裕豊紡績・楊樹浦路社宅は、東地区黄浦江沿いに建設された裕豊紡績工場の近く、上海市楊浦区楊樹浦路3061弄に位置し、工場との往来に便利な立地条件で計画されている。この社宅は2005年10月、上海市人民政府から優秀歴史建築(Heritage Architecture)として指定をされた。指定では、1930年代に建設された組石造の集合住宅とされている。設計者は平野勇造と考えられており⁽⁴⁾、管理職の比較的大きな住宅のほか、棟割りのテラスハウス型の日本人向け住宅等が現存している(図1・2)。当時は倶楽部、事務所、神社、診療所、浴場などが設けられ、日本人、中国人双方のための福利厚生施設が充実していたという⁽⁵⁾。

2) 公大紡績・楊樹浦路社宅

公大紡績・楊樹浦路社宅は上海市楊浦区許昌路227弄(紡三小区)に位置する。設計者は平野勇造で、建設年代は1920年代～1936年頃と考えられている。

この社宅には正門を入った正面に旧支店長宅が現存している⁽⁶⁾。敷地内には日本人向け住宅と中国人向け住宅が共に現存しており、前者は敷地の南側に、後者は北側



図1 裕豊・楊樹浦路社宅日本人向け住宅の外観



図2 隣接する高層集合住宅屋上より敷地内に現存する住宅群を見下ろす

に配置されている。日本人向け住宅は、棟ごとに1戸あたりの規模が異なる幾つかのプランで計画され、中国人向けの簡素な造りの里弄住宅と比較すると装飾的なデザインである(図3)。敷地内外は図4のような門扉によって仕切られ、当時からセキュリティに対する配慮が払われていた様子が確認できる。現在も日本人向け住宅、中国人向け住宅双方に中国人居住者が住み続けており、今回視察を許された日本人向け住宅1戸の現況から、その都度、住み手の暮らしに応じて内装等が改変されたものと考えられる。

公大紡績は鐘淵紡績・武藤山治の経営理念が反映されていたことで知られるように、建設当初の福利厚生施設は、医院、食堂、茶室、小学校、幼稚園、商店、テニスコート、プール等が計画され、なかでもプールは現役である。これらの施設から日本人と中国人共に、非常に水準の高い居住環境が計画されたことがうかがえる。

総じて、今回の調査では、裕豊、公大ともに、在華紡社宅の現存状況と、計画当初におけるユートピア的思想の存在をうかがい知ることができた。これまでの社宅研究においても、日本国内で試みられた社宅計画が、国外においてどのように実践されたのかという観点からの比



図3 公大・楊樹浦路社宅日本人向け住宅



図4 外堀の門

較分析が期待されている⁽⁷⁾。当研究班としても、社宅計画と労働者の生活環境を明らかにすることを主眼として、具体的な事例調査をもとに、国内の紡績工場等における社宅計画の比較検討を含めて、調査研究を進めたいと考えている。

【注】

- (1) 富井正憲「東アジアにおける紡績工場—鐘紡社宅街を中心に—」年報『非文字資料研究(7)』2011年3月、大里浩秋・富井正憲「在華紡の居住環境について—上海の事例—」『神奈川大学「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』所収、2007年12月
- (2) 社宅研究会(編著)『社宅街—企業が育んだ住宅地』学芸出版社、2009年
- (3) 箕浦永子「近代紡績企業の工場建築と福利施設に関する研究—内外綿株式会社上海支店を中心に—」『九州大学大学院人間環境学研究院紀要』第24号2013年、中野茂夫・平井直樹・藤谷陽悦「倉敷紡績株式会社の寄宿舎・職工社宅の推移と大原孫三郎の住宅施策—近代日本における紡績業の労働者住宅(その1)」『日本建築学会計画系論文集』76(659)、2011年1月、丸山信彦・藤谷陽悦「鐘ヶ淵紡績・兵庫工場の福利厚生に関する一考察」『日本建築学会学術講演梗概集』、2000年9月
- (4) 明確な根拠を示す資料は未発見である。
- (5) 注1に同じ。
- (6) 居住者へのヒアリングから、現在は11世帯に分割して、小規模な住戸として居住されていることが判明した。
- (7) 注2に同じ。

＊ 研究会報告 ＊

漢陽大学校東アジア文化研究所主催国際学術会議

「グローバル時代と東アジアの文化表象」参加記

富澤 達三 (松戸市立博物館 学芸員)

はじめに

2015年2月6日(金)・7日(土)の2日間、韓国の漢陽大学校において、国際シンポジウム「グローバル時代と東アジアの文化表象」が行われた。私にとって初の韓国での発表である。発表内容は、以下の通りであった。

< 2月6日(金) >

①富澤達三(神奈川大学)「絵引研究」について 非文字資料からの歴史研究

討論：金容澈(高麗大学校)

②稲賀繁美(国際日本文化研究センター)「脱皮と変態-生皮を剥がれた《バッタもん》、グローバル時代の商標と複製権-

討論：朴祉建(国民大学校)

③中井真木(早稲田大学)「平安男性貴族の服装への眼差し」

討論：趙慶(高麗大学校)

④睦秀炫(ソウル大学校)「韓国画の誕生」

討論：金京妍(明知大学校)

⑤金昌民(昌原大学校)「沖縄の獅子信仰」

討論：陳泌秀(ソウル大学校)

⑥朴銀正(漢陽大学校)「近代以前の虎の象徴性と表象化過程の考察」

討論：朱榮兒(江原大学校)

全体討論 朴贊勝(漢陽大学校)

< 2月7日(土) >

⑦朴美貞(国際日本文化研究センター)「楽浪の発見とアジア主義」

討論：李松蘭(徳成女子大学校)

⑧全遇容(漢陽大学校)「市場へ出た宮中-韓国近代の遊興の誕生空間、明月館」

討論：李晋源(韓国藝術総合学校)

⑨裴寛紋(翰林大学校)「日本の雅楽としての能の発見」

討論：金炳淑(韓国外語大学校)

⑩李京僖(漢陽大学校)「鹿鳴館の舞踏会-借りてきた「自己表象」」

討論：韓程善(漢陽大学校)

⑪朴奎泰(漢陽大学校)『『仮面の欲望論』による日本表象』

討論：朴種天(高麗大学校)

全体討論 朴贊勝(漢陽大学校)

発表は、韓国語・日本語の同時通訳が付き、内容の濃いシンポジウムであった。2日間でのべ60名の参加者があり、私の発表の際には、22名の方が聴衆として参加されていた。

発表の概要

私の発表では、前半は私が行ってきた近世画像資料研究について、後半では澁澤敬三の「絵引」研究、締めくくりとして神奈川大学が推進する「非文字資料」研究について述べた。

1. 時事を描いた錦絵をさぐる

江戸時代は「文書による支配」が全国津々浦々にまで及び、膨大な数の古文書が残った。一方、画像史料は、幕府の命で作られた国絵図からはじまり、民芸品の錦絵(浮世絵版画)や、絵心のある者が事件や景色を記録や楽しみのために描いた「素人絵」まで、やはり膨大な点数が残っている。

江戸時代の日本を代表する画像史料として、浮世絵が世界的に知られる。浮世絵は、厳密には肉筆画・版画・書籍の挿絵などの種類があるが、一般的には木版多色摺りの錦絵(浮世絵版画)が知られる。錦絵は、美人・役者・名所・花鳥風月などを描いたが、水野忠邦による天保改革の時代(1830～43年頃)、歌川国芳による諷刺

画「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」(天保14年=1843)で「時事もの」のジャンルが当たりした。時事ものは、当初は難しい謎解き絵の「判じもの」作品が主流であったが、のちに歌川国芳は大事件を「戯画的な表象」(現代でいうならばキャラクター的な絵)を使い、連作で発表する手法を定着させる。

安政2年(1855)10月2日の江戸地震直後から、数ヶ月間無検閲で出版された錦絵「鯨絵」は、地震鯨や鹿島神の画像を駆使して地震の守り札となる。地震終息後、鯨絵は戯画的になり、江戸の復興気分を後押しした。鯨絵は、オランダの文化人類学者コルネリウス・アウエハントの構造学的分析で注目され、日本の民俗的画像史料として有名となる。鯨絵以後、江戸と周辺地域の重大事件を、連作でわかりやすく描いた時事ものの錦絵は、一つのジャンルとして完全に定着したのである。

ところで、発表中「韓国のナマズ」について、会場の韓国の研究者の方々に質問を試みた。すると発表後の懇親会で「韓国は地震が発生しないため、地震とナマズが結び付けられることは無い。ナマズは単なる食材である」との情報をいただいた。

2. 澁澤敬三の絵引研究

発表後半では澁澤敬三(1896～1963)の「絵引研究」を紹介した。澁澤が発案した「絵引=Pictpedia」は、『絵巻物による日本常民生活絵引』(1～5巻+総索引)として角川書店を経て、平凡社から新版が出た(B5判モノクロ)。

「絵引」研究メンバーは、澁澤家が所蔵する中世期絵巻の模刻本、所蔵無き作品は写真版から常民的な場面を選択し、画家(戦前は橋浦泰雄、戦後は村田泥牛)に精密な模写を依頼して検討用の画像を作成した。それを青焼きして番号を振り、事物や行為に注釈を付ける作業が行われた(「絵引によせて」前掲『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第一巻、x～xiii)。

検討対象となった絵巻は、場面順ではなく「1 住居」「2 衣服」「3 食事」「4 調度・施設・技術」「5 資糧取得・生業」「6 交通運搬」「7 交易・交易品」「8 容姿・動作・労働」「9 人生・身分・病」「10 死・埋葬」「11 児童生活」「12 娯楽・遊戯・交際」「13 年中行事」「14 神仏・祭・信仰」「15 動物・植物・自然」の15項目を設定し、絵から場面を抜き出し並べていった。したがって短い絵巻物作品では、全項目が絵引できていな

い。巻末索引は、上記15項目を使い、事項(画像)を引くのに便利である。

「絵引」の実際を見ると、各画像を端的に示すタイトルが付けられ、600～1500字程度の文章で画像内容が説明されている。そして画像に事物説明用の算用数字、行為の説明用に○囲み数字が振られている。事物や動作の呼称は、事典類・記録などを調べて決め、不明なものは止むなく一般的な総称とされた(図1)。



図1(『新版 絵巻物による 日本常民生活絵引き』1巻、61頁を一部加工)

澁澤によるユニークな絵引研究の継承は途絶していたが、2003年に神奈川大学の「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が、文部科学省21世紀COEプログラムとして採択され、澁澤の「絵引」研究を受け継ぐ作業が復活する。近世の名所図会、農業図絵、朝鮮中国の風俗画などが候補とされ、第1期の成果として、『日本近世生活絵引 東海道編』(2007年12月)・『日本近世生活絵引 北海道編』(2007年12月)・『日本近世生活絵引 北陸編』(2008年2月)・『東アジア生活絵引 中国江南編』(2008年2月)・『東アジア生活絵引 朝鮮風俗画編』(2008年3月)の5冊が出された。

3. 沖縄の絵引

2014年3月、「琉球交易港図屏風」「八重山蔵元絵師画稿」「琉球寫真景」を使った『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』が刊行される。三作品は19世紀後半から20世紀初頭の制作で、当時の交易・生活・民具などが描かれた図像資料である。前述の通り、近世日本社会が残した「絵」や「図」などの図像史料は、肉筆や木版印刷で複製されたものなど、膨大な数が残る。千葉正樹氏は『江戸名所図会』の挿図を分析し、「絵→図」への変化、さらには「図と絵の融合」で、近世の図像が大きく変化したことを論じた（『江戸名所図会の世界』吉川弘文館、2001年、93頁以下）。千葉氏は、近世の俯瞰図・鳥瞰図の視点は、以下の4つに大別できるとする。

- ①近景…対象から約10m以内の視点。人物の性別・老若・身分・職業・個々の容貌・着物の文様までもが精密に描かれる。
- ②中景…対象から数十m。男女や老若などは簡略化されるが身分の判別などは可能。顔の目鼻立ちは一本の線で描かれて容貌の判別はできない。
- ③遠景…対象から100m以上離れた視点。人物の身分や職業は、武士=刀二本差し、といった類型表現で判断できる。顔は白抜きになる。
- ④超遠景…対象から数百m以上。広く景観を描き、建造物は簡略化され、人物は縦の短い線で描かれる。

管見の限り、濹澤が検討した中世の絵巻物は、「①近景」「②中景」視点の場面に集中している。発表では「琉球交易港図屏風」「八重山蔵元絵師画稿」「琉球寫真景」の三作品は、上記4つの視点に則り、かつ「絵と図の融合」した図像で景観や人々の生活・事物を描いた歴史資料であることを述べ、具体的な場面を数点選んで説明した。続いて、絵引作業は、図像全体の制作意図などを捉え、類似する他の図像資料との比較を行ったうえで、場面からの確に情報を読み取る必要があると指摘した。そして、各種の文献や同時代の史料を調べ、単独の研究者で行うのではなく、多くの専門研究者が共同作業で知識を共有し図像解釈の視野を広げ、独断的解釈を避けることで「絵引」が可能となることを述べた。

絵引研究と非文字資料研究のこれから

しめくりに、濹澤が絵引研究を行った時代には考えられなかった、大型カラーフィルムによる図像資料撮影、高解像度デジタル画像作成、それを拡大閲覧できる高性能パソコンを個人で使うことが容易になり、絵引研究が進めやすくなった現状を指摘した。そして、私(富澤)は、実際の絵引作業のなかで、濹澤が絵引研究に際して設定した15項目を明確に意識していなかったこと、作業のなかで、それらがはからずも盛り込まれる結果となり、あらためて濹澤敬三の図像資料を見る視点の鋭さ・明快さが再確認されたことを述べた。

最後に、画像資料自体を、場面も含めて厳密に解析する絵引研究は、ユニークな方法であり、神奈川大学は今後も作業を継続すると説明した。絵引研究は、神奈川大学が行っている多様な非文字資料を使った歴史・民俗研究の一部であり、かつ「非文字資料そのもの」の研究でもあること、図像資料だけでなく、民具・身体技法・建築物などを使った研究の成果は、出版物・シンポジウム発表以外に、Webで英語・中国語・韓国語など、多言語発信する予定であることをアピールし、発表を終えた。



発表の様子

コラム 招聘研究員レポート

名前	所属	招聘期間
陳 小 法	浙江工商大学 東亜文化研究院 副院長	2014年6月30日 ~ 2014年7月20日
Yola Gloaguen	フランス国立高等研究院 建築史専攻 博士課程	2014年10月9日 ~ 2014年10月29日
楊 陽	華東師範大学 対外漢語学院 文芸民俗学専攻 博士課程	2014年9月28日 ~ 2014年10月18日
昞 曉 藝	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科	2014年12月1日 ~ 2014年12月19日
包 媛 媛	北京師範大学文學院 民俗学与文化人類学研究所 博士課程	2015年2月5日 ~ 2015年2月25日
咸 瓔 恩	漢陽大学校 中語中文学科 博士課程	2015年1月26日 ~ 2015年2月15日

非文字で繋がる文化交流

— 神奈川大学非文字資料研究センターでの研究感想 —



陳 小 法
(浙江工商大学東亜文化研究院)

2008年12月に、弊院(当時浙江工商大学日本文化研究所)は神奈川大学非文字資料研究センターと学術交流の協定を結びました。その後、若手研究員の相互派遣、留学生の受け入れ、印刷物の贈呈など多岐にわたり、学術の交流活動を展開してきました。

そのおかげで、2014年6月30日から7月20日まで、訪問研究員として神奈川大学非文字資料研究センターで、『墨蹟を通しての杭州と日本の交流について』というテーマで研究活動を行うことができました。

墨蹟といえば、中日交流史の研究においては、最も生の資料と言っても過言ではありません。ですが、従来、墨蹟は博物館や美術館で展示されるものに過ぎず、その内容について、何が書かれているか、十分検討されてきたとはいえません。それだけではなく、日本国の重要文化財に指定されたものに、タイトルさえ適切なものとはいえないものもあれば、刊行された史料の中には、文意のよく通じないもの、字が誤読されたものもあります。そういう点から、いかに墨蹟が史料として重要なものであるかを再認識してもらえよう主張したいと考えています。

幸いなことに、日本では墨蹟の研究を中国より先に展開してきました、その代表の一人である西尾賢隆氏は「墨蹟学」まで首唱しました。墨蹟は歴史研究においていかに重要かを垣間見ることができます。

ご存知かもしれませんが、日本の重要文化財と国宝の中にも、杭州僧侶の墨蹟が多数あります。これらの非文字で繋がる文化交流の実態を解明することは、日本文化史・中日文化交流史において、大変意義のある作業であると思います。

主要な蔵品は以下の通りです。

1. 東京国立博物館6件(国宝3件、重要文化財 以下重文3件)
2. 京都国立博物館1件(重文)
3. 山形県致道博物館1件(重文)
4. 東京出光美術館1件(重文)
5. 根津美術館1件(重文)
6. 畠山記念館4件(国宝1件、重文3件)
7. 永青文庫1件(重文)
8. 五島美術館5件(国宝1件、重文4件)
9. 静嘉堂文庫美術館4件(重文)
10. 徳川美術館1件(重文)
11. 常盤山文庫4件(重文)
12. 長野サンリツ服飾美術館1件(重文)
13. 静岡県世界救世教2件(重文)
14. 大徳寺1件(国宝)
15. 龍光院2件(国宝1件、重文1件)
16. 鹿苑寺1件(重文)
17. 相国寺2件(国宝1件、重文1件)
18. 大通院1件(重文)
19. 東福寺5件(国宝1件、重文4件)
20. 長福寺1件(重文)
21. 天龍寺1件(重文)
22. 大和文華館1件(重文)
23. 大阪旧萬野美術館1件(重文)
24. 正木美術館2件(重文)
25. 神戸市立博物館2件(重文)
26. 神戸香雪美術館1件(重文)
27. 個人蔵19件(重文)

総計：72件(国宝10件、重要文化財62件)

以上挙げた作品に対して、これまでも日本の研究者によって多少の先行研究がすでになされていましたが、問題点も少なくなかったようです。それで、今回は田上繁先生のご指導のもとで、神奈川大学図書館をはじめ、早稲田大学図書館、東京博物館、京都博物館、奈良博物館、日文研図書館などで墨跡の関係資料を調査して、もとの墨跡と十分に照合して、多くの基本資料を手に入れました。今後は、これらの資料をもとに、一つ一つ丁寧に照合しながら、文字の解説をはじめ、文意の分析を通して、資料価値を研究しようと思っています。

今回のチャンスを利用して、中島三千男先生、鈴木陽一先生、馬興国先生など先生方との懇談もでき、斬新な研究テーマも続々出てきました。自分の研究の一里塚とも言える研究生活でした。

来日中、彦坂綾さんをはじめ、センターの事務室の方々は何から何まで手配をしていただき、本当に助かりました。どうもありがとうございました。宿舎の白楽寮も研究室ととても近くて、歩いて行けます。

最後に、留学生の姚琮さんにお礼を申し上げます。色々とお助けいただきどうもありがとうございました。

アントニン・レーモンドによる戦前の住宅設計

—東西文化統合の一例

Yola Gloaguen
(フランス国立高等研究所)



2014年10月9日から29日にかけて、神奈川大学の非文字資料研究センターに訪問研究員として滞在した。専門は日本の近代建築なのでホスト研究室は建築学科の内田青蔵研究室であった。その研究室には同じ専門の教員やスタッフ、学生たちが在籍し、さらに本研究にとって重要な資料が揃っていたことから、人間的にも研究に専念する上でも非常に良い滞在となった。

研究テーマ

本研究テーマはアントニン・レーモンドの戦前の住宅設計に関するものである。この研究は博士論文として、本年(2014)末に提出する予定である。

アントニン・レーモンドは1888年にチェコに生まれた建築家で、22歳のときにアメリカに移住し、建築家として活動をはじめ、1916年(28歳のとき)にアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトと出会った。妻ノエミのコネクションで、ライトのアトリエであり住宅でもあったタリアセンで働くことになった。そして彼はライトに師事しながら、主に住宅建築にかかわり、ライトが情熱を傾けた日本美術にも魅了されていた。

1919年の正月、ライトに付き添って初めて来日した。1914年から設計が始まった帝国ホテルの基礎工事が進んでいるときであった。レーモンドは約一年間ライトの下で帝国ホテルの仕事をしていて、ライトとの関係が徐々に悪くなり、独立した。



レーモンドは来日以降、東京ゴルフ倶楽部や東京テニス倶楽部で、エリートが集まるコミュニティと交際を続けていたため、良い施主に巡り会うことができた。多くの

施主と出会った結果、さまざまな建築を設計する機会を得た。例えば、教会、オフィスビル、工場、大使館、住宅などである。本研究は其中で住宅にフォーカスしている。日本で活躍した外国人建築家レーモンドの創作過程における東西の文化の統合を研究する上で、住宅が最も良い素材であると判断したからである。本研究では、その統合の過程をもっともよく表しているのが、1933年の軽井沢の家だと位置づけている。

調査訪問の目的

滞在中の研究計画は以下の三点である。

一点目は博士論文のための資料収集で、レーモンドに依頼した施主に関する調査である。レーモンドは、東西文化の統合過程において建築だけではなく、人間関係が非常に重要な要素であると促していた。その人間関係とは、一つは、事務所にいた日本人スタッフとの関係であり、もう一つは施主との関係である。さらに私的な交流のあった芸術や文化関係の人たち、例えば民藝運動のメンバーや我楽多宗というグループのメンバーとのものである。

二点目と三点目は将来の研究のための準備で、近代の住宅における家相の影響と民藝運動と建築の関係についての調査であった。そ



の二つのテーマはレーモンドの建築に関係のあるテーマであり、近代建築に関する研究を広げるために重要なものでもある。

そして、滞在中にもう一点調査を追加し、レーモンドの住宅作品を掲載した当時の建築雑誌の記事を収集した。『住宅』、『新建築』、『国際建築』という三つの雑誌について、網羅的に記事を収集することができた。建築の雑誌を網羅的に調べた理由は、レーモンドが活躍した戦前の日本で、日本人建築家たちが設計していた住宅建築の流れの中で、レーモンドの位置づけを分析するためである。

調査訪問の成果

一点目については、国立国会図書館の人文総合情報室で必要な情報を見つけることができた。その情報から施主の一覧表を作成して、論文の資料編に組み入れた。二

点目、三点目については、内田先生に参考文献を紹介していただいた。それらの参考文献を次の研究で活用する予定である。

四点目の建築雑誌の記事の収集については、この作業の過程で私にとって、大事な発見があった。軽井沢の家は、コルビュジエのエラズリス邸を一部模倣したものであることが知られている。しかし、これまではレーモンドがどうやってエラズリス邸の図面を手に入れたか、はっきりしていなかった。今回の調査で1931年11月号の『国際建築』誌に、エラズリス邸の図面が掲載されていることを確認することができた。したがって、レーモンドはこの記事によってエラズリス邸の情報を得たのであろうと推測している。これまで軽井沢の家については徹底的に調査をしたつもりであったが、一つだけ研究者として気がかりな点が残っていた。今回、それが解消されて嬉しく思う。

日本における現代の民間叙事の新しい発展

—神奈川県及び周辺のパワースポットを中心として—

楊 陽
(華東師範大学)



近年、都市化が進むその一方で、伝統的な民間叙事(中国語の言い方)の生きる状況は厳しい局面に直面している。世帯を単位とする農村から高層ビルが林立する町に変化し、人々は毎日忙しい生活を送り、たくさんの娯楽施設が出てきた時代に、伝統的な民間叙事は生きるスペースを失い、消失しそうな状態に陥っている。実は、民間叙事は人間生活を直に描写し、歴史を間接的に記録し、人間の自由奔放な想像として、バラエティに富んだ形式で民衆の日常生活の中に根を張り、展開している。民間文学に関する分類は、日本と中国では一致していないが、ここでは研究のため、神話、伝説と民間の故事を含める、広い範囲で民間故事を研究対象にする。

パワースポットは日本で人気が高い観光スポットとして、自然が豊か、霊験あらたかな場所と思われている。これらの場所を訪ねると、自然から体にエネルギーが注がれ、自分の運もよくなると信じられている。パワースポットは大まかに分けて三種類ある。

(1) 自然風景。日本で有名な富士山や琵琶湖など、昔から神話や伝説が伝わってきた大人気の場所である。(2) 神社と寺院。日本には神社が幅広く分布し、仏教が広く伝播されているため、寺院の数も少なくない。歴史感があふれ、由緒がある神社と寺院は観光名所になっている。例えば、鎌倉の江ノ島神社、鶴岡八幡宮などである。(3) 現代の観光スポット。観覧車、スカイツリー、東京タワーのように新しい都市の文化と文明を代表し、都市或いは国のシンボルとなっている。

前二種類のパワースポットは歴史が長く、そもそもそれと関わった神話や伝説もあり、或いは発展しているうちに、自然や人の影響により、変化が起きている。第三類のパワースポットの民間叙事は、ほぼ現代人によって作られ、都市の中から生まれたものである。

筆者は神奈川県周辺の有名なパワースポット——鎌倉市の鶴岡八幡宮、江ノ島神社、東慶寺、銭洗弁財天、葛原岡神社、雷門浅草神社、スカイツリー、東京タワー——を調査して、現代の日本人がパワースポットにメンタル的な要素を求めていることを強く感じた。また、中国、日本、及び世界の国々で、民間の口承の伝統が現代において、どのように変化するかという課題について、新しい視点とフレッシュな資料を手に入れた。

以上のフィールドワークと文献資料により、結論を三点にまとめた。

①新しい叙事の生まれは、伝統の延長のみならず、現代の人々の精神的、物質的な要求と繋がっている。②経済の発展が民間信仰の習俗と関わり、観光産業を促進していると同時に、伝統叙事が伝えられ、新しい発展も起きている。③新しい時代に生まれた民間叙事は内容が現代の生活と密着し、多彩な表現力を備え、より魅力的になり、その生命力が盛んになっている。

最後に、神奈川大学日本常民文化研究所付置非文字資料研究センターから貴重な訪問の機会をいただき、誠にありがとうございました。勝手がわからない国とその民間文化の発展を短時間で理解することは難しかったが、

各調査地に赴き、調査を行い、それにより基本的な知識を身に付けることができた。今回の訪問により、日本の民俗学研究では、新しくできたものを速やかに把握して

いることに感心し、これからの研究生活に活用しようと思う。

日本滞在記

梶 暁 藝

(ブリティッシュコロンビア大学)



ブリティッシュコロンビア大学の大学院で、アジア研究をしている梶暁藝と申します。2014年12月1日から18日まで、交換研究員として神奈川大学非文字資料研究センターに滞在しました。

私は現在、19世紀韓国における国際法の発達に焦点を当てて研究をしています。韓国は、日本が国際法を受容・採用したことに非常に大きな影響を受けたため、日本での国際法の発達を研究することは私にとって欠かせない項目となり、今回の来日に至りました。私は特に、国際法が日韓関係においてどのように適用されたか、に関する資料に興味があります。

日本は国際法を受容と採用という面で、東アジアの中で最も成功した国です。国立国会図書館へ足を運んだことで、国際法の様々な日本語訳版を読み、比較することができました。近代日本社会において国際法がどのように解釈・評価されたのかを知ることができ、それは私の研究にとって最も重要な部分となりました。

一次資料に加え、19世紀日本における国際法の発達についての最新の研究も読むことができました。このテーマに関する韓国語・中国語・英語での二次資料もありますが、そういった研究は依然として限られた範囲内のものでした。このテーマに関しては、日本の研究のほうがより詳しく、発展した内容でした。日本の研究者たちは近年、国際法を思想史の観点から研究することに力を注いでおり、そのことは私の将来の研究にとって非常に大きな刺激となりました。さらに日本での滞在中、森武麿教授が指導教授に付いてくださったこと、そして朝鮮近代史研究において第一線で活躍する二人の研究者にお会いできたことは、非常に光栄でした。お会いした研究者は、東京大学の月脚達彦教授と一橋大学の糟谷憲一教授です。このお三方から、研究についての貴重なアドバイスを頂くことができました。

日本へ来たことは、私にとって最高の宝物になりました。それは、研究における目的を果たせたことばかりでなく、神奈川大学の教授や友人と交流する素晴らしい機会を与えてもらったからです。そのおかげで、日本についてさらに深く理解することができました。

森教授と一緒に研究させていただいたことは、忘れられない経験になりました。森教授は、授業中は聡明な指導者として、そして授業後は仲の良い友人のように接し

てくれました。森教授は私の研究テーマと関係のある様々な研究者を紹介してくださったり、私が日本語を勉強することをいつも励ましてくださいました。森教授と彼の生徒さんたちと横浜を訪れたことを今でも思い出します。森教授の案内のもと、横浜市イギリス館・外交官の家・港の見える丘公園・山手イタリア山庭園など、横浜開港に関するいくつもの史跡を訪れました。横浜散策のあと、森教授は私たちにパワーポイントを使って横浜開港の歴史について講義をしてくださいました。近代の東アジア国際関係を学ぶ一学生として、港町がどのように発展してきたかを知ることは非常に重要なことでした。この横浜散策は、明治政府が日本にいる外国人を統治しようとして行った外交政策について、より深い理解を与えてくれました。

さらに面白かったことは、横浜散策のあとに森教授の主催により開かれた「忘年会」に生徒さんたちと一緒に参加したことです。現代風の日本の忘年会に参加するのは私にとって初めての経験でした。そこでは日本の大学院生にも会うことができ、とても良い機会でした。この忘年会を通してより多くの友人を作ることができ、さらには日本人の「だらしなさ」も垣間見ることができました。

神奈川大学の歴史民俗資料学研究科の大学院生たちとお会いしたことも、印象に強く残っています。キャンパス内を案内してくれたり、図書館での本の借り方、研究室でのスキャナーやコピー機の使い方を教えてくれたのも彼らでした。彼らの研究に対する姿勢には非常に感銘を受けました。みんな表立っては言っていないかもしれませんが、深夜まで勉強をするというのが彼らの暗黙のルールのようなものでした。私は特に、定年後に再度勉強することを選んだ年上の大学院生たちに感銘を受けました。彼らはいつも熱心な研究を促すリーダーのような



存在だったのです。自分を厳しく鍛錬するということは、私が日本の友人から学んだことのひとつです。

日本は親切と笑顔に満ち溢れた国です。学生寮で落ち着けるよう手助けをしてくれた年配の男性スタッフ、空港で荷物を見つけるのを手伝ってくれた案内所の方、帰国するときに電車の乗り継ぎを教えてくれた日本人の若い女性など、今でも記憶に残っています。日本は外国人を歓迎してくれる国だと度々耳にしますが、今では私もこの意見に大いに賛成です。

(路平さんにも心から感謝の意を表したいです。彼女の通訳や手助けがなければ、私は研究目標をこんなにも

スムーズに達成することはできなかったでしょう。)



日本における口承文芸のデータベース化に関する調査の旅

包 媛 媛

(北京師範大学文学院)



民俗学の研究分野においては、各国ともに自国の口承文芸資料の収集、整理及び保存のために、大量の資金と人力を注ぎ込んでいる。今回、私は幸運なことに神奈川大学非文字資料研究センターへ訪問する機会を得ることとなり、「日本における口承文芸のデータベース化の実践」というテーマを設定した。調査を通じ、日本の口承文芸データベース化作業の近況と研究成果について全面的に理解し、それを踏まえた上で実践においてデータベースのシステムがどのような方法を用いて構築されたのかを明らかにしたい。

本格的な調査に入る前に、まずは小熊誠先生のご指導のもとでインターネットに公開されたデータベースを調べ、日本口承文芸はどのように公開され、どのように運用されているのかを考察した。主に調査したのは、「民俗語彙データベース」、「日本民話データベース」、「東アジア民話データベース」、「日本昔話資料データベース」(稲田浩二による収集)、「秋田昔話データベース」である。これらから以下のことがわかる。資料の収集であれ、話型の分類であれ、収集地の概況及び語り手に関わるライフストーリーであれ、専門的な民俗学者の主導のもと、日本の口承文芸のデータベース化の成果には、専門化の特徴が強く見られつつも、全体において忠実な記録をなすという原則が一貫して実施されていること、である。

2月12日に、私は譚静さんの協力を得て本格的に調査に入った。まず、国立歴史民俗博物館の小池淳一教授を訪ね、データベースの作成作業とその運用状況について聞き取り調査を行った。さらに民衆の生活と文化に関する展示物を見学した。日本の民俗文化に感銘を受けると同時に、博物館における口承文芸のデータベース化の成果が実体のある資料として結実し、展示が行われていることが見てとれた。翌日、「東アジア民話データベース」を担当する樋口淳先生を訪ねた。樋口先生は2時間ほど

休みなくご紹介くださり、私は日本の口承文芸のデータベース化の実践の歴史と具体的なデータベース操作について全面的に把握することができた。樋口先生が長年にわたって粘り強く基礎を守りながら口承文芸の資料を収集し保存されてきたことに対して心から敬意を表したい。日本民話データベース委員である常光徹先生との交流もまた、収穫に富むものだった。先生は「日本における口承文芸のデータベース化実践の発生は、近代化過程における伝承の場の消失と大きく関わっている」と詳しく解説してくださいました。

小熊先生と彦坂綾さんのおかげで、私はついに、口承文芸研究分野において著名な学者である小澤俊夫先生を訪ねることができた。2月19日に、私は小熊先生のご案内のもと、「小澤昔ばなし研究所」を訪問した。小澤先生は85歳のご高齢だが、思考力も記憶力も非常に高いため、インタビューをしていると、思わず先生がどんどん若く見えていくのだった。話型の分類は口承文芸のデータベース化において最も基礎的な作業であるが、キーポイントとなる作業でもある。小澤先生は私に日本



前列左から小熊誠先生、小澤俊夫先生

の話型分類に関わる研究成果について詳しく説明して下さり、その上、関敬吾の話型に基づいて改訂した『日本昔話の型』という著書を下された。交流の時間は短かったが、私の学術研究は啓発を受け、先生の研究に対する姿勢から多くを学ぶことができた。

三週間の時間はまたたく間に過ぎ去った。味わい足りない気分だったが、「さよなら」を言わなければならない時が来た。訪問中、私の心の琴線に触れたことが数多くあった。小熊先生はご多忙中にもかかわらず、伝統的な日本料理を食べに連れて行ってくださった。彦坂さ

んは事細かに調査のスケジュールを立ててくださった。面談の度に譚静さんには流暢な通訳をしていただいた。そして、非文字資料研究センターの先生方と学生たちはいつも暖かく接してくださった。楽しく収穫に満ちた今回の研究訪問の旅は、私にとって一生忘れられない貴重な経験である。

訪問最後の日の夜明け、私は名残惜しい気持ちと共に宿泊先の国際寮、神奈川大学、白楽駅、横浜港を後にした。またこの美しい国との再会を期待している。

思い出の21日間

咸 瓊 恩
(漢陽大学校)



神奈川大学非文字資料研究センターの支援のおかげで、幸いにも私は神奈川大学が提供する学術交流の機会を得、漢陽大学からの交換研究員として、2015年1月26日から2月15日まで21日間の訪問研究を行った。

21日間という短い間だったが、東京大学、早稲田大学、東洋文庫、神奈川大学など、東京を中心に、日本で古典籍が所蔵されている重要な機関を訪れ、文献一冊一冊に目を通した。

日本の学者たちは、子弟書について詳しい論述を展開しているのみならず、大量の文献の発掘に努め、さらには、多くの子弟書に関する資料を出版している。民間に新しい文体が現れた時代に、西洋の文学観を取り入れた日本の学者たちは、西洋の観念を以て東洋文学を捉えることで、一般民衆の間で流行した戯曲や小説、ロマンス、弾詞(※)などを人文学研究において欠かせないものであると考えた。日本で所蔵されている中国伝来の子弟書の刊行は、比較研究において大変価値のあるものだ。長澤規矩也(1902-1980)と倉石武二郎(1897-1975)の旧蔵は、現在東京大学に収められ、「双紅堂文庫」及び「倉石文庫」となっている。東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫所蔵の戯曲の鈔本と曲本の一部は復刻出版され、読者の要望を満たしてくれている。その中には多くの子弟書が含まれており、波多野太郎(1912-2003)によって『子弟書集』に収められ、復刻出版されている。

長澤規矩也は、1932年から1972年の間に6回にわたって中国を訪問し、北京の書店にて各種曲本を大量に購入している。長澤個人が所蔵していた数千冊の戯曲小説は、1950年代に東京大学東洋文化研究所に買い取られ、「双紅堂文庫」が設けられた。さらには、「双紅堂文庫分類目録」が編まれている。

倉石武二郎は、1920年代末、京都帝国大学助教授時代に北京に留学、中国古典籍を大量に購入した。さらに、馬廉らとの親密な交流から俗曲文献の収集にも関心を寄

せた。倉石が亡くなった後、子弟書を含む彼の蔵書は全て東京大学東洋文化研究所に移管され、「倉石文庫」となった。

澤田瑞穂(1913-2003)の旧蔵は、現在早稲田大学図書館の「風陵文庫」に所蔵されているが、ここにも子弟書のテキストが含まれている。澤田は風陵書屋主人の号を称し、風俗文学の研究者として『宝巻の研究』等の著書を残している。早稲田大学図書館所蔵の子弟書は、主に澤田の旧蔵である「風陵文庫」のものである。

子弟書のテキストが現在まで保存されてきたのは、多くの風俗文学研究者や愛好者のおかげである。彼らの旧蔵は今日ではほとんどが公私立の図書館に移管され、中には散逸してしまったものもあるが、我々は彼らの貢献を決して忘れてはならない。

この21日間は、私にとって、慌ただしくも充実し、収穫のある日々であった。

横浜は美しい景色に囲まれ、神奈川の人々は人情味に溢れていた。

※弾詞 中国明代・清代以降現代まで江蘇・浙江を中心に行われる語り物の一種



コラム 若手研究者レポート

名前	派遣先	派遣期間
張 子平	浙江工商大学 日本文化研究所	2014年11月20日 ~ 2014年12月10日
小泉 優莉菜	フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センター	2014年12月22日 ~ 2015年1月11日
鍋田 尚子	中山大学 中国非物質文化遺産研究中心	2014年10月20日 ~ 2014年11月9日
松下 里織	サンパウロ大学 日本文化研究所	2014年9月24日 ~ 2014年10月13日
程 亮	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科	2014年10月17日 ~ 2014年11月3日
胡 穎	北京師範大学文學院 民俗学与文化人類学研究所	2014年12月23日 ~ 2015年1月7日
新垣 夢乃	漢陽大学校 東アジア文化研究所	2015年1月13日 ~ 2015年1月26日

浙江工商大学東亜文化研究院訪問研究後記

張 子 平
(歴史民俗資料学研究所 博士後期課程)



2014年11月15日からの25日間、私は神奈川大学非文字資料研究センターの若手研究者として、中国の浙江工商大学東亜研究院を訪問し、浙江省図書館に収められている、文禄の役に明国の援軍を率い、朝鮮を救援した経略宋応昌の関連史料を調査・収集しながら、杭州市内の宋応昌に関する史跡を探した。

まず、11月15日から17日にかけて、上海復旦大学文史研究院の主催する第二回「周縁から見る中国」国際シンポジウム「朝鮮通信使文献を中心に」に参加し、日・中・韓三国の15人の研究者の発表を聞いた。尚且つ、関周一・黄修志両先生と意見交換を行った。

11月20日に、杭州に在る浙江工商大学東亜研究院に到着し、正式に今回の訪問研究を始めた。此度の訪問先の浙江工商大学東亜研究院は中国に在る有数の日本歴史文化研究の重鎮である。王勇氏や陳小法氏を代表とする研究者達は、東亜研究院で長い間中国の日本歴史文化研究と日中文化交流の事業を進めている。今回、副院長陳小法先生の協力を頂き、自分の調査活動が順調に展開した。

11月21日以降、私は毎日浙江省図書館に行き、当館の地方文献室に収蔵されている、杭州に関わる地方志類の史料を調べ、宋応昌に関する記録を探っていった。

結果、歴代の浙江省志の中で宋応昌についての一番早い記事が、1735年に完成された雍正『浙江通志』に存在することを確認した。その他に、清末の代表的な杭州蔵書家と地方文人丁丙の撰する杭州の街市沿革史『武林坊巷志』の中で宋応昌の旧居についての記事を探り出した。

その間の11月26日に、陳先生と共に、杭州「北高峰」の山麓に在る金魚井村で宋応昌の墓所の調査を行っていた。残念なのは、ここ数十年来の開発のため、現地の明清時代の墓所が殆ど消え、既に地元村民達の墓園となっていたことである。調査はこの一日に留まらず、11月27日には、自ら伝宋応昌故居の所在地の「孩児巷」(がいじこう、現在杭州市下城区孩児巷)を調査し、彼の功績を謳って建てられた「経略華夷」牌坊(ばいぼう)の遺跡を調べた。結果、26日の調査と同じように、1950





代以来重なる改造によって、もう跡形なく消えてしまった。また、12月1日に、杭州拱墅区に在る明代古橋拱宸橋並びに近所の運河博物館と刀・剣・剪博物館を見学した。
今回の訪問研究においては、多く有益な史料を入手し

ただけではなく、陳小法先生や聶友軍先生など浙江工商大学東亜研究院の研究者達との交流もうまくいき、生活の面においても、薛曉梅先生にいろいろお世話していただいた。ここに、東亜文化研究院の皆様のご厚意に心よりお礼を申し上げたい。

フランス国立高等研究院での 絵画研究

小泉 優莉菜
(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



現在私は長崎県下における「かくれキリシタン信仰」の調査・研究を進めている。今回、フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センターへの派遣を希望した理由は2つある。1つは当研究センターが図像学や宗教学に関する様々な研究実績を確立していることであり、もう1つは当研究センターのヨセフ・キブルツ先生の指導を仰ぎたいという希望があったからである。

長崎県生月島のかくれキリシタン信仰においては「御前様」と呼ばれる女人の描かれた掛け軸が祀られている。しかし、彼らに聞き取りをおこなっても、これらが「何の姿を描いたものなのか」ははっきりとは分からない、という。江戸の弾圧期を聖職者のいない中で伝承を続けていくうちに「自分たちが何を祀っているのか」が分からなくなってしまったのである。そして今回、図像学の手法を専門的に学ぶことによって明らかにしていきたいと考えた絵画は生月島山田地区のものである。山田地区の御前様も誰が描かれているのかについて信者たちは分

からないという。
今後、かくれキリシタン信仰に関する研究を続けていく中で、このように「何を描いたのかが分からない。」という事例に数多く出会うであろうことが予想される。そのため、キリスト教の宗教芸術に関する図像学の知識を深める必要があると考え、今回派遣を希望した。

日本におけるキリスト教カトリックの歴史と、フランス・パリの関係は深い。元々、日本へのキリスト教の布教をおこなったのは、スペインのイエズス会士である、フランシスコ・デ・ザビエルらの一派が最初であるとされている。しかしその後の弾圧や禁教政策により、その当時のキリシタン文化はほぼ失われてしまった。今ではそれらを、かくれキリシタン信者たちのキリシタン文化の中に、片鱗をうかがうことだけしかできない。

しかし、その後、明治以降に日本国内でパリ・ミッション教会が精力的に布教活動をする中で、かくれキリシタン信仰にも少なからず影響を与えていた、ということが今回の調査で分かった。1873年に日本でのキリスト教禁教令が解かれた後、真っ先に再布教に乗り出した会派こそが、パリ・ミッション教会である。そして、こ



図1 使徒ヨハネの立像
(中世美術館にて撮影)



図2 エッフェル塔



図3 サクレ・クール寺院内部

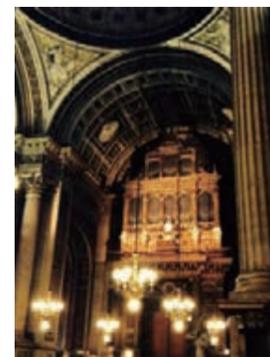


図4 マドレーヌ寺院内部の
パイプオルガン



図5 シャンゼリゼ大通りからの
夜景



図6 使徒ヨハネとイエス
(最後の晩餐の一部)



図7 生月島吉部地区の
御前様



図8 生月島山田地区の御前様

のパリ・ミッション教会によって設立された教会が長崎県の大浦天主堂であり、その後、日本キリスト教史における重要な出来事である「信徒発見」がおこなわれたのもこの大浦天主堂である。

パリ・ミッション教会は再布教活動を大変熱心におこなっていたといわれている。今回、パリ・ミッション教会の本部での資料調査をおこなう機会もあった。そこには明治期に日本に派遣された宣教師たちの記録が残されており、今後の追跡調査の良い資料を得ることができた。本派遣の研究対象であった、生月島山田地区の「御前様」は、調査の結果、「再布教時にこの島にもたらされたものである。」ということ考察しうる、という結果になった。しかし、どの会派がもたらしたものであるのか、何に基づく絵なのか、ということは結論付けることができなかった。今後、調査を進めることで、かくれキリシタン信仰と、パリ・ミッション教会との関係性も明らかにできるのではないかと考えている。

今回、フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センターへは、12月22日～1月11日という期間の中で

広東省広州市中山大学への派遣調査

鍋田 尚子
(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



2014年10月20日から11月9日まで中国の広州にある中山大学に3週間滞在し、灶神の調査をおこなった。私の研究対象は、ベトナムの灶神である。灶神はベトナムではオンタオと呼ばれる。なぜ広州の灶神を調査するかというと、ベトナムには広州・潮州からの移民が多く会館も建てられており、南部ホーチミンにあるチョロン(中国人街)には多くの広東人が暮らしていることから、広州周辺の灶神を調査することでベトナムのオンタオにどのような影響を与えたかを研究することができると考えたからである。

とはいえ、広州は初めて。土地勘もなく言葉もほとんど話せない。どのような調査ができるのかと出発前はとても不安だった。しかし、この3週間は自分でも驚くほ

ど充実した内容の濃い時間となった。広州に着いたときから最後まで多くの人々に助けられ続けた。空港に到着すると、チューターの劉成澄さんが待っていてくれた。ホテルのチェックインを済ませ、大学に行き指導教員へのあいさつを終え、事前に連絡をもらっていた劉先生の研究室に行く。劉先生はすぐにどんな調査がしたいかを私に尋ね、色々と考えてくれた。そして距離が遠いからとあきらめていた潮州調査が最初に決まった。それも「明後日から潮州に行きなさい」と劉先生から私のチューターに連絡が入り、私たちは急いで列車を予約し現地向かった。私が調査できたのも楽しく充実して過ごせたのもチューター劉成澄さんのおかげである。彼女は公務員試験日前の大変なときにもかかわらず、急遽1泊調査



写真1 潮州 祭灶神
農曆閏9月1日
(2014年10月24日)



写真2 佛山市南海区 灶神 字牌
「定福灶君」



写真3 中山大学図書館



写真4 潮州 牌坊街

に同行することになり、その後も色々私を助けてくれた。

潮州では劉先生の友人である李先生とそこご友人がずっと一緒にいて世話をしてくれた。急に潮州調査が決まった理由は、農曆閏9月1日の祭灶神を李先生が私に見せてくれるためであった。本来は閏月のため行わないものを、わざわざ私のために見せてくれたのである。豪華な供物を用意して。潮州は人も食べ物も芸術も非常に素晴らしい。私は潮州がとても気に入ってしまった。いつか機会があったらもっと時間をかけて調査してみたい。

次は、佛山市南海区の伊洛村で調査を行った。広州にある(農)村の人々の灶神を見たいという私の話を受けて、劉先生が博士課程の程さんの出身地を紹介してくれた。程さんの案内で程さんの実家や近所の家の灶神を見せてもらった。お昼は程さんの家でご両親と一緒においしい昼ご飯をいただいた。潮州でも伊洛村でもカメラメーカー(食べる食べる)攻撃であった。お腹いっぱいと言っても食べなさいと勧めるのは、ベトナムも沖縄も広州・潮州も同じであった。私はいつもと同じく断れず最後までひとりで食べ続けていた。伊洛村の調査は灶神だけでなく、中国の村を知るためにも非常に学ぶことが多かった。祠堂や土地神、屋敷神、ベトナムの研究をするためには中国の村や家を知ることは重要なのだと痛感した。

また、帰国の2日前には、佛山市龍江鎮の文化局の張

先生に話を聞く機会を得た。ここは、私が図書館で地方誌資料を整理して行きたいと思った場所である。ここもまた劉先生が連絡をとってくれた。残念ながら私の知りたかったことは得られなかったが、張先生からは貴重なお話を聞くことができた。私が現地調査できたのは全て劉先生のおかげだった。劉先生と会ったのはわずか2回、それも短い時間だった。にもかかわらず、いつも劉先生はチューターや先生の学部生たちを通して私の調査を色々気にかけてくれていた。

調査でないときは博物館を巡り、それ以外はほとんど中山大学の図書館で過ごした。食事もほぼ学食。中山大学にいただけで充実していた。なにより図書館が素晴らしく私のお気に入りの場所だった。窓側の緑の見える場所にいつも座っていた。この図書館も最初は利用カードを作るのに半日以上を費やしてしまった。チューターと2人がかりで手続きを済ませやっと利用できるようになった。学食用のカード作りには2日ほど労力を使ったが、結局断念してチューターの学生証を借りることにし、毎日学食を利用していた。

あつという間の3週間であった。色んな人にも出会えた。出発前に小熊先生や同じ博士課程の程さんが紹介してくれた方たちにも会うことができ、とても親切にしてもらい本当に楽しい時間を過ごした。中山大学で出会った言語研究者の日本人からも色々な話を聞かせてもらった。改めて出会った方々に感謝をしたい。この縁を大切にこれからの自分の研究に活かしていきたい。

行く機会をいただき、2014年9月24日から3週間ほどサンパウロ調査を行った。

サンパウロ滞在中、私は毎日泣いてばかりであった。それは言葉が分からない国に来てしまったという不安などから来るものではなかった。ただただ、感激と感動で

サンパウロの熱と日系社会の温もりを感じたブラジル調査

松下 里織
(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



海外移住資料館で展示ガイドをしている私にとってブラジルは憧れの国であり、また日本人移民の歴史の語り部として必ず一度はこの目で見なければならぬ場所だと思っていた。そのブラジル(サンパウロ大学日本文化研究所)へ非文字資料研究センターの若手研究者として

涙が出ない日がなかったのだ。ブラジル在住の奄美大島出身者への聞き取りを目的としていた本調査は、予定していた語り手が高齢のため体調が優れないとの事で、もしかしたら調査が出来ないかも知れないという状況からスタートした。また、自国開催のW杯がようやく終了し、10月には4年に一度の大統領選挙を控えたブラジルの国内情勢は未だ不安定で治安が悪く、私の恐怖心も日々増していた。言葉の問題、治安の問題そして調査が思うように出来ないのではないかという不安を抱えて着いたサンパウロは、春を迎えあちこちで花々が咲き始めた美しい街だった。

到着してすぐに私を苦しめたのは、やはり言葉の問題だった。ポルトガル語で表記された洗濯機をどう扱って良いのか分からず、辞書を片手に洗濯機と格闘していたところ、ブラジル人の少女がどこからか現れた。彼女は身振り手振りで洗濯機の使い方を教えてくれ、洗濯が終わるまで私たちは一緒に筆談をも加えながら互いについて紹介しあった。彼女だけではない、スーパーの店員もタクシーの運転手も出会ったブラジル人は皆彼女のように人懐っこく親切だった。ブラジル人だけではない、ブラジルで出会った日系人たちもまた、とても親切だった。

調査3日目、奄美大島出身のH氏との偶然の出会いが本調査に驚くような展開をもたらす。出会ったばかりのH氏に突然の聞き取り調査をお願いして話を伺っていた。突然のことで十分な聞き取りができず、後日改めて再調査をお願いしたところ、これまたそばにたまたま居合わせたSさんがサンパウロから50キロ程遠方にあるH氏のご自宅まで連れて行ってくれると申し出てくれた。その有り難い申し出に甘えて、翌日Sさんの車でH氏のご自宅へ向かった。途中Sさんのご自宅にも立ち寄らせていただき、ブラジルで一、二位を争う規模

というSさんの蘭栽培場を見学することができた。その後H氏のご自宅に到着し、H氏の営む仕出し工場を見学後、H氏のご家族と会食、そのままご自宅に宿泊させていただいた。H氏は仕出し料理会社の他に花卉栽培も営んでおり、翌日は中央卸売市場のH氏の店舗で花卉販売の手伝いをさせてもらった。それだけではない、H氏には多くの奄美大島出身者を紹介していただき、予定していた以上の聞き取り調査を行うことができた。さらに私の歓迎会として奄美大島出身者とその家族たちをご自宅に呼んで盛大な食事会を開いてくださった。H氏やその友人たちのおかげで調査だけでなくサンパウロ滞在の素晴らしい思い出もできた。

また、当初聞き取りを予定していた奄美大島出身者にもお会いすることができた。こちらもT氏という奄美大島宇検村出身の方が、彼の一族と宇検村出身の人々を集めて食事会を開催してくれたおかげで、調査を行うことができた。

このような温かいもてなしは奄美大島出身者だけではなく、サンパウロで出会った全ての人々から受けた。毎日、毎日、ブラジルの人々の優しさにふれて、感動で涙が出ない日はなかった。人から人への温かい優しさの繋がりのおかげで、調査を無事に終えることができた。わずかな経験だがこれまでも各地で聞き取り調査を行ってきた。しかしここまで多くの人々の協力を得られた調査は初めてだった。まさに奇跡の連続としか形容しようのないブラジル調査であった。サンパウロでの日々を思い出すと今でも涙が出る。この人々の優しさに支えられて出来た調査の成果を必ずブラジルの人々にお返ししなければ、と思う。ブラジルで出会った全ての人に、言葉では言い表せないほど感謝している。Eu agradeço. Muito obrigada por tudo!

セントラル・ユピックの狐仮面と狐伝承について

—UBC 図書館と人類学博物館の調査報告
程 亮
(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



2014年10月17日から11月3日まで、非文字資料研究センターの若手研究者として、カナダバンクーバーのプリティッシュ・コロンビア大学(The University of British Columbia, 略称UBC) アジア学科を訪問し、欧米学者による東アジアの狐伝承に関わる文献を調査、また各地域社会の狐伝承の実態を明らかにすることを目的として、UBC 人類学博物館(UBC Museum of Anthropology, 略称MOA)で北米先住民の狐の仮面及び仮面踊りに関して調査を行った。

まず、バンクーバー公共図書館(Vancouver Public Library, 略称VPL)とUBC図書館で狐伝承に関わる文

献調査を行った。VPLはバンクーバーにあるカナダ第三の規模を誇る市立公共図書館で、130万点以上の蔵書を所蔵している。UBC図書館はカナダで第二の規模を誇る研究図書館で、中央図書館と分館合わせて23号館の中に合計で590万冊以上の蔵書などを所蔵している。今回は、VPL、UBCバンクーバーキャンパスにあるWalter C. Koerner Library、Irving K. Barber Learning Centre、Asian Libraryの4館を中心に調査した。日本の狐伝承に関わる主な研究に、Kiyoshi Nozaki (1961) 『KITSUNÉ: Japan's Fox Mystery, Romance & Humor』、Karen A. Smyers (1999) 『The Fox and the Jewel』

Shared and Private Meanings in Contemporary Japanese Inari Worship』、Michael Bathgate (2004) 『The Fox's Craft in Japanese Religion and Folklore : Shapeshifters, Transformations, and Duplicities』などが挙げられるが、中国の狐伝承に関わる主な研究に、Xiaofei Kang (1999) 『The Fox [hu 狐] and the Barbarian [hu 胡]: Unraveling Representations of the Other in Late Tang Tales』、Xiaofei Kang (2000) 『Power on the Margins : The Cult of the Fox in Late Imperial China』、Xiaofei Kang (2006) 『The Cult of the Fox : Power, Gender, and Popular Religion in Late Imperial and Modern China』、Rania Huntington (2000) 『Foxes and Sex in Late Imperial Chinese Narrative』、Alien Kind (2003) 『Foxes and Late Imperial Chinese Narrative』、Thomas David Dubois (2005) 『The Sacred Village : Social Change and Religious Life in Rural North China』などがある。また、東アジア以外の狐伝承に関わる研究に Kenneth Varty (1999) 『Reynard, Renart, Reinaert and Other Foxes in Medieval England : the Iconographic Evidence』、Martin Wallen (2006) 『Fox』が挙げられる。

次に、UBC 人類学博物館 (MOA) で北米先住民の動物仮面及び仮面踊りに関して調査を行った。MOA は、UBC の敷地内にあり、ハイダ族⁽¹⁾などのファースト・ネーション (北米先住民) の生活文化に焦点を



写真1 UBCの中央図書館
Walter C. Koerner
Library

当てた博物館で、先住民によって造られた彫像やトーテムポールなどの展示があり、そのコレクション数は50万点以上にもものぼり、世界でも有数の仮面を有する博物館である。北米先住民にはエスキモーとインディアンがあるが、今回は、エスキモーに属するセントラル・ユピックを中心に、その動物仮面と仮面踊りを調査した。

北米先住民の間で生成された仮面の文化が20世紀になってから消失していったが、1960年代以降、民族文化の復興運動が起り、それぞれの民族で独自の仮面が作られ、自分達の民族の祭りで使用するようになってきている。20世紀後半に入ると、仮面の制作とその儀礼での使用は急速に姿を消して、現在では土産用としての制作が中心に



写真2 UBC人類学博物館 (MOA)

なっている。

アラスカ西部ヌニバク島のユピックの木製仮面は、周囲に輪や小さな動物像を配し、想像力豊かな表現でよく知られている。MOAには、アラスカのヌニバク島やアラスカ半島で収集された合計7点のセントラル・ユピックの動物仮面が所蔵されているが、その中に、狐の仮面と半人半狐の仮面が2点あった。



写真3 セントラル・ユピックの狐の仮面 (MOA所蔵)

北米北西海岸のユピックの世界では、全てに霊、つまりおのおののエネルギーの源となるものがあり、その霊によりおのおのものに潜在的に行動力と性質が与えられていると考えられている。狐は重要な毛皮獣として認識される一方、霊の宿る存在としても見なされる。ユピックは、狐や狼やアザラシなどの仮面をつけて踊った。祭りにも、ひまつぶしにも、あるいは周囲の人を楽しませるためにも踊ったし、本人が好きだからといって即興的に踊ることもあった。

今回の調査において、自分の研究課題に関わる大量の文字・非文字資料を得ることができた。このような調査の機会を与えてくださったブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科 Nam-Lin Hur 先生、Xiaoyi さん、神奈川大学非文字資料研究センターの内田青蔵先生、事務の彦坂綾さんをはじめお世話になった皆様にご心よりお礼申し上げます。

【注】

(1) ハイダ族 (Haida) は主にカナダ・ブリティッシュコロンビア州に居住する先住民 (ファーストネーション)。一部はアメリカ合衆国アラスカ州にも居住区がある。その芸術に、トーテムポールが有名である。

【参考文献】

1. ジャン・ルイ・ベドゥアン 『仮面の民俗学』、白水社、1963年
2. アーネスト・S・バーチ Jr 『図説エスキモーの民族誌—極北に生きる人びとの歴史・生活・文化』、原書房、1991年
3. 佐々木重洋 『仮面パフォーマンスの人類学—アフリカ、豹の森の仮面文化と近代』、世界思想社、2000年
4. 吉田憲司 『世界の仮面 (みんぱく発見6)』、千里文化財団、2001年
5. 佐原真、勝又洋子 『仮面そのパワーとメッセージ』、里文出版、2002年

清末の陸軍貴胄学堂と八旗学堂に関する調査報告

胡 穎
(外国語学研究所 博士課程)



報告者は清末における留日学生の実態に関心を持っており、最近では、清朝統治者の子孫或いは八旗 (八旗は清朝における旗と呼ばれる社会・軍事集団からなり、すべての満州族は8個の旗のいずれかに配属された) 子弟の留日生活は一般の留学生の状況とどこが違うのか、ということに興味を広げている。2014年12月23日から2015年1月7日の16日間、非文字資料研究センターの若手研究者として、中国の北京師範大学の民俗学と文化人類学研究所を訪問するチャンスを頂いた。今回の訪問機会を利用して、留日学生の中で特別な存在であった貴胄 (王公大臣の子弟) 留学生及び八旗子弟の留学生を送り出した陸軍貴胄学堂と八旗学堂の旧跡及び関連史料について調査してきた。

清末の貴胄留学と八旗子弟の留学は一般の留學生に混じり、最も早い段階から実施されている。例えば、清朝政府に大きな影響力を持っていた張之洞は1899年に孫の張厚琨を学習院に送っており、その後も統治者は子孫の教育を重視して海外留学に派遣している。1902年の外務部の文書では、海外の留學生派遣を貴胄学生、官派学生、遊学学生の3種類に分け、「貴胄留学」をその一種として提起していることからその重視ぶりが分かる⁽¹⁾。その後、1904年に光緒帝は「宗室子弟」の海外留学を促す上諭を出した。1907年になると、外務部、学部などは、貴胄留学に関する「請派貴胄出洋游学折」を上奏するとともに、「貴胄游学章程」を定めた⁽²⁾。こうして、貴胄留学は清政府に重視され、それ以降も続いているのである。

次にその「貴胄游学章程」の中のいくつかの内容を見ると、貴胄留学の学生は、すべて王公大臣の子弟及び貴胄学堂の優秀者から選抜していることがわかる。派遣先は英米独三国で、勉強科目は法政、軍事で、留学期間は三年となっている。また、一人の留學生に支給する金額について、旅費は七百銀両、毎月の経費は三百銀両、衣服などの準備代は五百銀両である。召使いをつけるならば一人に限る。そのほか、通訳と漢文教習は一人ずつ付ける。このような条件から見ると、かなり優遇されたことが分かる。しかも、清朝政府はこの「章程」を定めて



写真1



写真2

からまもなくの1907年12月に宗室貴胄20名を留学させ⁽³⁾、その他の貴胄留学としては1909年に陸軍貴胄学堂から陳昌毅、成全など20名を選び留学させた⁽⁴⁾。

1906年に陸軍貴胄学堂が設立され、最初の校地に現在の煤渣胡同が選ばれたが、そこは狭くて軍隊訓練には不便なため、現在の張自忠路3号を新しい校地とした。張自忠路3号は当時、鉄獅子胡同と呼ばれていた。この鉄獅子胡同という所に新しい校舎が建てられ、西側は陸軍部に隣接し、南側に校舎、北側には附属の建物が造られていた。陸軍貴胄学堂は陸軍部と同じ正門を利用したのである。陸軍貴胄学堂の旧跡に近づくため、現在の北京市東城区張自忠路3号 (以前は段祺瑞執政政府旧址と呼ばれていたが、2009年に清陸軍部和海軍部旧址と改称された) を訪ねた。持っていったカメラではその建物全体を撮れなかったため、ほかの資料を利用して当時の建物の様子との様子を対比すると下の図のようになる。写真1は、清末の陸軍部が軍事視察を行っている状況に見えるが、写真2は、現在の様子である⁽⁵⁾。

写真1・2に写されている建物の東側が当時の陸軍貴胄学堂の所在地となった場所である。また、1909年に当該学堂が作った『陸軍貴胄学堂同学録』には、陸軍学生と教官などの集合写真、学堂監督、学生写真などを載せている。貴重な資料と思われるこの『同学録』は、浙江档案網 (档案データベース) に入っており、そのうちの一部の写真がネット上で公開されている。写真3は、第二期生と教官などの集合写真だといわれており、写真4は、『同学録』の表紙である。



写真3

留學生を送り出したもう一つの学堂は八旗高等学堂である。この学堂は清朝を創った満州族の子孫を教育する宗室官学から発展してできた学校であり、1949年には現在の「北京一中」となっている。古い歴史を持つこの学堂は、1908年に学生を15名選んで早稲田大学清国留學生部の予科に入学させたことが分かっている。辛亥革命



写真4

以後、満州族の子弟が多くを占めているこれらの留学生はどうなったのかという情報については、今回北京市档案馆で見つけた、教育部から京師第一中学校（1912年に八旗高等学堂から名称を変更）宛ての文書から、これらの留学生が派遣元に生活支援を求め、官費を続けて支給してほしい旨の内容が読み取れる。

報告者が北京市東城区宝釵胡同にある北京一中を訪問した日は授業中だったが、幸いそのまま中に入ることができた（写真5）。北京一中の正門から入って、すぐ左側に下記の写真のような碑亭が建てられている（写真6）。碑亭の上に「北京一中碑亭記」という横書きの看板が掲げられ

ている。この「碑亭記」の文字によって北京一中の沿革が簡単ながら分かる（写真7）。碑亭の真ん中に立ててある石碑に刻まれた当時の文字をじっくり見れば、光緒20（1894）年に八旗官学から八旗書院に変更した経緯についての説明であることが判別できる（写真8）。

今回の調査期間は16日間で、元旦から3日間の休みや公共施設の休館日を除くと、実際に調査できる時間をもっと短くなったが、このように限られた日程を効率よく利用して、陸軍貴胄学堂の旧跡、八旗学堂の旧跡、北



写真5



写真6



写真7

京市档案馆、中国第一歴史档案馆、中国国家図書館、北京師範大学図書館などを回って、写真を撮り、関連史料をいくつか入手するなど、有意義な研究調査ができたと思う。そして、北京滞在中に、北京師範大学の万建中先生に温かく歓迎され、わたくしの研究内容と滞在予定の説明を丁寧に聞いていただき、適切なアドバイスをいただいたことは、非常にありがたいことであった。今後は、貴胄留学生と八旗留学生の子孫を対象に聞き取り調査を行い、当時の留学生らの生活状況を検討するために、より豊富な資料を活用したい。



写真8



写真9

【注】

- (1) 外務部「奏陳尊議出洋学生章程折」、陳学恂・田正平編『中国近代教育史資料匯編・留学教育』、上海教育出版社、1991年、16頁。
- (2) 前掲書、32頁。
- (3) 董守義『清代留学運動史』、遼寧人民出版社、1985年、370頁。
- (4) 「貴胄學員之留學額」、『大公報』、1909年7月20日。
- (5) 写真1は、『北京近代建築史』（張復合著、清華大學出版社、2004年）に見られる。ここで使っている写真1・2は、「百年回望之八十四陸軍貴胄学堂」という文章（http://blog.sina.com.cn/s/blog_56577d8f0100vavz.html）中の写真を利用した。

「献上された」海と「奪われた」海

—韓国蔚山広域市北区江東洞板只のワカメ漁場に関する歴史と語りから—

新垣 夢乃

（歴史民俗資料学研究所 博士後期課程）



「おばあさんは、『奪われた』というように話をする」。これは、韓国蔚山広域市北区江東洞に属する板只（판지, 판지）という村落でワカメ漁場の歴史についてお話を伺った際に出てきた言葉である。この板只の人々が利用してきたワカメ漁場には、複雑な歴史的経緯がある。本小稿では、板只のワカメ漁場を巡る歴史的経緯を紹介し、その歴史が現在どのように認識されているのかを紹介してみたいと思う。

板只のワカメ

板只は、2015年1月時点で58人の人口を有し、そ

のうち15人が板只漁村契に所属し漁業を営んでいる。板只ではアワビ、ウニ、サザエ、ナマコ、ワカメなどを対象とした漁が行われている。これらの漁は、海女（ヘニョ, 해녀）が行う。そのうちワカメは、高麗王朝時代から王に献上されていたとされ、現在でも質の高いものであるとして地元では語られている。

ワカメ漁場の「歴史」

板只のワカメ漁場には、その権利を巡って複雑な歴史的経緯が存在する。板只に建てられたワカメ漁場に関する碑文によると、板只のワカメ漁場は、高麗王朝建国

（1918年）の際に功績のあった朴允雄（蔚山朴氏の祖）という人物にあてられたという。それが、李氏朝鮮時代の1751年には、漁場が当時の王族に支給され、国有の漁場となった。だが、国有化後、ワカメが3年連続で不漁になり、



当時の板只の漁民たちは不漁の原因がワカメ漁場を取り上げられた歴代の蔚山朴氏の怒りにありとし、漁場を蔚山朴氏に還すようにと行政側に訴えた。それが認められ漁場は蔚山朴氏に返還された。そのため、板只のワカメ漁場は「両班岩（양반마위 貴族の岩の意）」と呼ばれるようになった。そのような経緯から、毎年行われる蔚山朴氏の祖先を祭る行事の際には、板只からワカメを蔚山朴氏宗中に献納してきた。

この慣行は、日本植民地期にも存在した。だが1950年に実施された農地改革法に伴い、板只のワカメ漁場は、蔚山朴氏の私有から国有となった。そして、1961年「5.16革命」後の漁業法改正により、板只のワカメ漁場は、板只の漁村契に帰属する漁場となる。

しかし、蔚山朴氏から当時の朴正熙大統領に対して漁場の返還を求める動きがあり、1965年には朴正熙が漁場を蔚山朴氏へ返還するようとの命令があったという。

そのような経緯から、蔚山朴氏は、1970年8月に板只の海岸に土地を購入し、そこに板只のワカメ漁場の歴史的経緯を記した碑を建立した。そして、2001年12月20日には、板只のワカメ漁場とその歴史が蔚山広域市の文化財第38号として指定された。そして現在でも、板只から蔚山朴氏へワカメを献納しているという。

板只のワカメ漁場には、上述のような歴史的経緯が存在した。それは碑に記され、蔚山広域市の文化財ともなっている。それは、いわば板只のワカメ漁場についての公式の「歴史」となっているといえる。



「奪われた」海という歴史

だが、現在の板只の人々は、上述のいわば『献上された』海とでもいうような内容とは異なるニュアンスのワカメ漁場に関する歴史的経緯を、母親や祖母の世代から聞いて育ったという。それが冒頭で述べた言葉である。それは、板只の人々がワカメ漁場を両班（ヤンバン）の人々へ還して欲しいと自ら願っていたというのではなく、漁場は「奪われた」というニュアンスで語られてきたという。

だが、一方で板只の人々は、板只のワカメ漁場で採れるワカメがかつて王に認められた品質である事を誇らしく語る。そこでも、ワカメ漁場に関する歴史が利用されるのである。

「献上された」海という状況がどのような状況であったのかを実感を持って理解する事は難しい。しかし、この権力者間での漁場の帰属を巡る経緯は前近代の話ではなく、現代まで続いて行われてきたというのである。もちろん、この蔚山朴氏と蔚山広域市によって記されたいわば板只のワカメ漁場に関する公式の「歴史」は、きちんと資料などによって実証する必要がある。それによって、公式の「歴史」と板只で語られてきた歴史とのズレを検証していくことができるようになるだろう。だが、それだけではなく、板只の人々がワカメ漁場に関する「歴史」と自らのなかで語られてきた歴史とのズレをどう解釈し、そこでどのような実践がなされてきたのかを知る事は、より重要な課題であると考えている。それを知る事から板只の人々の海を自らの生活場としていく手法、つまり板只の人々の海を自らのものとしていく際の生きられた感覚のあり方を知ることにつながるのではないかと考えさせられた。



謝意

小稿は、2015年1月13日から26日の間に、韓国で板只漁業契および漢陽大学校東アジア文化研究所の方々のご助力により見聞きできたことをまとめたものです。皆さまのお力添えのおかげで、大変貴重な経験ができました。文末ながら、皆さまに謝意を示したいと思います。ありがとうございました。



首里城明け渡しと御嶽

後田多 敦（非文字資料研究センター 研究員）

今年度から非文字資料研究センターの研究員に加えていただきました。「海外神社跡地のその後」チームに参加します。これを機会に「非文字資料」を自分の研究方法と自覚的に結びつけたいと考えています。よろしくお願ひ致します。

私は近代日本の成立過程やその特質を、周縁の琉球・沖縄から捉え直すことを研究テーマの一つにしています。現在も日本の「国境」はざわついています。日本の近現代の歩みは「境」の拡大と縮小、または「境」をめぐる歴史ということもできます。そのシンボリックな存在の一つが琉球・沖縄です。琉球・沖縄は、日本の「外」と「内」の間で揺れてきました。日本と琉球・沖縄の関係は、日本とアジアや太平洋の地域や国々との関係を理解する指標でもあります。このような視点から、琉球の祭祀と東アジアの冊封体制の揺らぎと解体過程を軸に取り組んでいます。

*

琉球・沖縄の歴史や文化を理解しようとするときに、その背景にある要素として見落とすことのできないものが「風」と「水」、「風水」です。日本の「風土」との対比で考えれば、理解しやすいと思います。

小さな島々で成立していた琉球国では、水は特に貴重なもので、それゆえに信仰の対象ともなりました。川のない小さな島に残る湧き水を発見した動物の物語や、水源の発見にまつわる伝承などは、島における水の貴重さの証でもあります。

琉球国の王都だった首里地区に、弁が嶽という祭祀空間でもあった小高い丘があります。琉球の祭祀は国家祭祀として、国王の長寿や国家の安泰、五穀豊穰や航海安全などを祈願しました。その祭祀を行う公的空間の一つが御嶽（うたぎ）です。弁が嶽は国王が親祭するなど、御嶽の中でも特別な位置にありました。弁が嶽は首里城の東方にあり、首里地区でもっとも標高の高い地点です。域内に信仰の対象ともなってきた湧き水があり、弁が嶽に始まる水流は安里川、真嘉比川など首里城を囲むよう

に流れています。本来の御嶽は一般人の入れない、保護された場所です。水源だから御嶽にしたのか、御嶽に適した場所がたまたま水源だったのか。いずれにしても、弁が嶽の場合は重要な御嶽であることで、水源としての機能を維持することにもなりました。ちなみに第2次世界大戦中は日本軍の施設も造られていました。現在は、かつて首里城内にあった沖縄神社（「神社」というよりも、沖縄の拝所のようになっています）もあります。

首里地区で2番目に標高の高い場所が、首里城です。首里城内には湧水口が2か所あり、その水が円覚寺放生池や弁財天堂のある円鑑池、そして龍潭へと注ぎ、さらに首里から那覇へと流れていきます。この水の涵養地が首里城内にある京の内と呼ばれる場所で、そこにもまた御嶽がありました。首里城内には10か所の御嶽がありましたが、その多くは京の内です。琉球国の王都の水源は、王城の御嶽と国王が親祭する重要な祭祀空間に守られていました。

琉球の祭祀の対象として重要なのは、前述の御嶽の神ともう一つが火ヌ神（ひぬかん）です。火ヌ神の説明は難しいのですが、火に由来し琉球の民族宗教の根幹をなすものと簡単に説明しておきます。火ヌ神は家庭から国家レベルまで存在します。首里城内には首里城の「御タウグラ火神（台所の火ヌ神）」と「御火鉢之御前（うばちぬうめー、琉球国の火ヌ神）」がありました。「御タウグラ火神」は一般家庭の台所の火ヌ神と同じと考えていいのですが、「御火鉢之御前」はまさに琉球国の火ヌ神でした。

*

さて、ここから本題です。琉球国の王城であった首里城は国王の生活の拠点で、中央政府の役所、そして琉球国の火ヌ神「御火鉢之御前」を祭り、御嶽など祭祀や儀礼の空間も抱える場所でした。明治政府は1879（明治12）年、国王尚泰を追い出し、その首里城を接収します。「琉球処分」と呼ばれる琉球国併合、琉球国滅亡の瞬間です。軍隊を率いて処分を担

当した松田道之は首里城の門を閉鎖し、持ち出しを制限しました。その時、「御火鉢之御前」を城外に持ち出したという話があります。持ち出した先は、国王が仮寓した中城御殿（なかぐすくうどうん、世子の屋敷）です。さて、10か所あった御嶽（の神）はどうなったのでしょうか。

国家滅亡と王城の引越しという混乱で、その状況を伝える琉球側の文字資料は多く残されていません。行政資料や外交文書など、琉球国の国家資料は、基本的に明治政府に接収されました。国王側が持ち出すことのできた資料やモノは、明治政府にとって重要ではなかったと理解していいでしょう。中城御殿など持ち出したそれらのモノも、沖縄戦でほとんどが消失しました。中城御殿自体が沖縄戦で破壊されたからです。また、明治政府が接収した資料の多くは、関東大震災で消失したとされています。

首里城が接収された際、「御火鉢之御前」は中城御殿へ移されました。そして、結論からいえば、御嶽（の神）も移された（空間そのものは移動できないので、城内の御嶽に相当するものを新設した）と考えています。つまり、琉球側の祭祀対象はすべて城外へ移されたということです。しかし、そのことを具体的に伝え、裏付ける資料は確認できません。

そんなことを考えているとき、1枚の写真に出会いました。戦前の中城御殿内の屋敷内の写真、写っていたのは木々が生い茂った「御嶽」です。写真説明には「拝所」とありました。別の写真では「御嶽」と説明されていました。琉球国の滅亡以後、かつて国の公的祭祀空間だった御嶽は場所が分からなくなったり、変質し「拝所」と説明されたりする事例もあります。中城御殿の「拝所」は「御嶽」で間違いないでしょう。

戦前の中城御殿にはかつての首里城と同じように、御嶽があったこととなります。これは極めて重要なことです。御嶽は公的施設ですので、基本的には個人の屋敷にはありません。最後の中城御殿は琉球国滅亡直前の1873（明治6）年に新築移転されたものです。しかも、御嶽のあったエリアは、当初からの敷地ではなく、1883（明治16）年以降に拡大されたと考えられます。だとすれば、その御嶽は首里城明け渡し後、つまり琉球国滅亡後に作られたこととなります。琉球国の国家祭祀のための空間が、琉球国滅亡後に創設されたということです。

首里城が明治政府に接収された後、中城御殿では増改築が行われ、さらには施設の用途変更なども行われました。幾つかの状況から、屋敷の向き修正もあったと考



えています。琉球国の火ヌ神「御火鉢之御前」も移されてきました。だとすれば、中城御殿に新設された御嶽は、首里城内の御嶽の代替施設ではないか、そんな推測が可能です。つまり、中城御殿は、接収された首里城（王城）の代替施設（いわば王城）と位置づけられていたということです。

国王が去り、琉球祭祀の対象が不在となった首里城（跡）やその地下には、やがて日本の祭祀空間「沖縄神社」や日本軍の司令部壕がつくられました。それはその空間の支配者と利用目的が変わったことを象徴的に示しています。

首里城を立ち退いた王家は、中城御殿を首里城の代替として使いました。しかし、積極的に王城として位置づけ、利用したとする直接的な資料はありません。それでも、そのことは証言や写真、空間の配置、行事や部分的な関連資料などから推測できます。国家祭祀空間の創設ということ自体も、その証拠の一つになると考えます。

敗者が抵抗を文字資料として残すことは困難ですが、何らかの「痕跡」は残ります。琉球国の滅亡過程を調べるなかで、残された「痕跡」を資料として活用する工夫の必要性を感じてきました。その点でも、そこは「非文字資料」の現場の一つになると考えています。

*

【参考】 後田多敦「琉球国滅亡後の国家祭祀と中城御殿」（『南島文化』35号、沖縄国際大学南島文化研究所、2013年）

【写真】 中城御殿跡地にある御嶽の跡。中城御殿は発掘調査などが行われており、将来的には中城御殿を復元する計画がある。（撮影は筆者、2011年）

戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

— 「用語編」 その2

原田 広 (非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

前号『ニューズレター No.33』に引き続き、本センター所蔵戦意高揚紙芝居の脚本データに基づいて、本コレクションの戦時下の特性の解明作業を試みることにしたい。今回の「用語編」その2では、終戦時に約719万人が兵力として動員されていた日本の軍隊（大原社研『日本労働年鑑特集版：太平洋戦争下の労働者状態』）が、国策紙芝居のなかでどのように描かれていたかを中心とする。

脚本から採録した用語の分類は、[日本軍：06／皇軍物語一般]、[07／軍隊・軍務]、[08／兵器、軍備]、[09／階級、兵科・兵種・各部]、[10／教育]、[11／徴兵、出征、帰還]、[12／戦死傷、慰問、勲章・功労]の6区分とした。軍隊関連用語は、[国内社会：16／政治・外交]と不可分な関係にあるだけでなく、この日本軍6区分中でも相互に関連するところからくる分類上のブレや無理があることを自覚しているが、本稿は、あくまで脚本中での使われ方に比重を置き、創作上の効果・目的を同じくする用語を同一分類のもとに採録したものであることをお断りする。

明治憲法において、日本の軍隊は天皇の統帥権に服するものとされ、ある時期から「皇軍」と呼ばれた。しかし、1945年11月30日を以て陸海軍省を廃止（復員省へ改組）し、陸海空軍その他の戦力放棄を掲げた戦後憲法下の日本社会では軍隊関連用語そのものが“タブー視”され、用語としての市民権のみならず、時代的・意味的な連続性もほぼ失われているであろう。ついては、用語使用例の紹介・分析に入る前に、日本軍の性格を規定した明治憲法との関係について簡単に述べ、戦後社会では消失してしまった特異性をもつ軍隊関連用語へのアプローチとしたい。

1947年5月2日まで存続した明治憲法は、第一章天皇において、日本は万世一系の天皇が統治する天皇主権の国であり（第一条）、天皇は統治権を総攬する元首であるとし（第四条）、続く各条で、国務、軍隊、皇室に係る天皇の大権を定めている。しかも、こうした天

皇の地位と権限は皇祖皇宗の遺訓を成文化したものの「皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ成立シ條章ヲ昭示シ」（大日本帝国憲法「告文」）であり、その統治は神勅に基づくもの「此レ皆皇祖皇宗ノ後裔ニ胎シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラス」（同）とされていた。このような天皇が有する神権的歴史の継承者（祭祀王）と世俗政治権力の総覧者（君主）としての二面性は、憲法の解釈運用について、天皇主権を重んじる君権学派と、議会制を中心とした立憲主義を重んじる立憲学派の二大学派を生み、昭和初期には天皇機関説排撃を叫ぶ国体明徴運動を生起させることにつながった。

一方、近代日本の軍隊は、維新初期の各藩勢力を統制するとともに、対外的にも国民軍の創設を必要としていた明治新政府のもとで、1871（明治4）年の廃藩置県による中央集権体制への転換、1872（明治5）年の徴兵告諭・翌年の徴兵令による国民皆兵制度の導入、1874（明治7）年陸軍士官学校・1876（明治9）年海軍兵学校など軍人養成機関の整備を通して、建軍の基礎が形成された。その後伊藤博文の欧州での調査をもとに憲法草案の作成が進められ、1889（明治22）年2月11日に「大日本帝国憲法」が公布、近代立憲主義国家としての枠組が整えられるわけだが、そのもとで、天皇の軍隊に対する統帥権「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」（第十一条）、および軍隊の編成権「天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム」（第十二条）が規定された。

天皇の統帥権とは、天皇の命令以外では軍隊を動かさないことを意味しており、戦時には、軍令機関（陸軍参謀本部・海軍軍令部）で構成する天皇直属の最高統帥機関「大本営」が設置され、その機能を担うものとされた。軍隊における作戦指揮を担当する「軍令」と軍の行政事務を担当する「軍政」は、1878（明治11）年に参謀本部の独立によって分離されており、天皇は軍令機関である陸軍参謀総長・海軍軍令部長の輔弼（助言）を受けて陸海軍を統帥した（統帥権の独立）。かくして、内閣・議会を構成する国務大臣（総理大臣、陸海軍大臣）は戦争上の作戦に口を出せず、陸海軍・軍人は政治に関与し

ないという「軍令」と「軍政」の二重構造を、その本質とした日本軍隊が生まれることとなった。この二重構造は、その後の現実政治場面において、軍備に係る内閣の権限と天皇の条約批准大権の解釈を遠因とした海軍軍人のクーデター（1932年5.15事件）、政治の腐敗は元老・重臣・軍閥・官僚にあるとして彼ら君側の奸（平たく言えば君主を操る悪い家臣）を除こうとする陸軍青年将校の反乱（1936年2.26事件）を生起させ、さらに対外的には、満州事変、ノモンハン事件などの軍部の暴走を生むことにつながった。

06／日本軍：皇軍物語一般

ある時期から〈皇軍〉と呼ばれた帝国陸海軍—その語源は、犬養内閣（1931年12月13日～1932年5月26日）の陸軍大臣を経て、第一次近衛内閣（1937年6月4日～1939年1月5日）・平沼内閣（1939年1月5日～同年8月30日）の文部大臣として、皇道教育の強化を掲げ、国民精神総動員の委員長をも務めた荒木貞夫とされている（高橋正衛『昭和の軍閥』講談社学術文庫2003.5.10、p243）。国立国会図書館憲政資料室『荒木貞夫関係文書目録』にも、「10. 陸軍大臣：資料番号296『皇軍について』昭和7年5月18日」の目録情報が見えることなどからも、皇道派青年将校による軍事クーデターが頻発した昭和初期に定着した用語であることは確かであろうと思われる。戦時下紙芝居において日本軍を描く作品を「皇軍物語」と括ることも一般的になされている。

紙芝居における日本軍隊の姿は、①天皇の軍隊としての精神的特質を形容した用語と、②皇軍兵士の極限的な軍隊行動を表現する用語で限取られている。ここに[皇軍物語一般]として採録した用語は、総称としての〈皇軍〉—登場回数28回—を含む下記34件である。政治・外交とも密接に関連する〈大本営〉と、出征兵士を送るときに家族・地域によって祈られた〈武運長久〉をここに入れたのは、前者は天皇直属の軍令機関としての描かれ方を見るためであり、後者は戦いの極限的姿《玉砕》との対比的関係への関心からである。

① 皇軍の精神的形容

宣戦（布告）（詔勅）（大詔）12、聖戦（貫徹、完遂、の本義）8、大本営（発表、報道部）7、純忠（無比）2、聖断2、忠勇無双2、忠烈（無比）2、おほみいくさ1、皇軍翼賛1、忠魂1、忠誠勇武1、勅語1

② 皇軍兵士の戦闘的形容

武運長久9、軍神6、決死隊6、志願（兵）6、帝国軍人6、

肉弾（突撃）6、山本五十六3、長期戦4、玉砕2、散華2、戦陣訓2、特別攻撃隊（特攻）2、軍神部隊1、見敵必殺1、死地1、持久防御1、神兵1、挺身隊1、日本武人1、武人1、無敵1

① 皇軍の精神的形容

これらの用語を総括的に一文とすれば、「大元帥たる天皇の《聖断》、《宣戦》布告にもとづき、《聖戦》の本義を貫徹・完遂するために、無比無双の《純忠》《忠勇》《忠烈》の精神で《おほみいくさ》を戦う《皇軍》の姿が、《大本営》発表をとおして国民に伝えられた」となるろうか。紙芝居自身に語りしめよう。（以下の文中、「カギカッコ」内の脚本はイタリック体で、現代仮名遣いに改めた。また脚本内の用語を太字とし、出現回数の引用符〈3回以上〉《3回未満》は省略した）。

《聖断》《聖戦》および《宣戦》（布告）（詔勅）（大詔）：「一億国民の堪忍袋が今にも破裂しそうになったとき、**厳かなる聖断は下された**」（『大建設』1942.03）。「暴戻なる蒋介石政権を懲る**聖戦**はここに始まった」（『小村壽太郎』1943.09）。これは「（*自存自衛の戦いであるとともに*）大東亜十億の民を米英の侵略の魔手から解放する正義のための**聖戦**」（『我は何をなすべきか』1944.10）である。すでに「**聖戦五年**」（『産業報國』1941.10）を経るが、「*神州不滅。皇軍の必勝を信じ*銃後国民の**聖戦**を勝ち抜く力を信じ」（『忠霊陣地』1944.06）、「*兵隊さんたちは海に山に聖戦をつづけておられる*」（『菊水號と兵隊物語』1944.07）。銃後国民は、「**聖戦の本義をつかみ撃ちてし止まむ**」（『撃ちてし止まむ』1943.03）の覚悟で、「**聖戦を見事に勝ち抜くために必要な航空機の増産**」（『神機いたる』1944.11）に励み、「*切符制だつて何だつて聖戦貫徹に邁進しなくちゃいけない*」（『ほがらか部隊記』1941.08）と表現される。〈宣戦（布告）（詔勅）（大詔）〉についても同種の表現が多いが、「*対米英宣戦！米英東亜侵略の歴史はここにその幕を閉じた*」（『宣戦』1942.12）、「*あの有難い宣戦の大詔は、重苦しい空気に閉ざされていた私たちの窓を開けて、キレイなキレイな神々しい空気をサッと入れてくださったのです*」（『敵だ！倒すぞ米英を』1942.12）の2作が最も象徴的である。

大東亜戦争開戦の詔勅（それに続く緒戦の勝利）が、宣戦布告なき日中戦争の長期化、ABCD包囲網（『ニューズレター』前稿 p42）の締め付けによる息苦しさを打ち破ってくれたという受け止め方が、知識人を含め広く国民的なものであったことはよく知られている。詩



図1 紙芝居「宣戦」から



図2 紙芝居「敵だ！倒すぞ米英」から

人・高村光太郎はまさに「十二月八日」と題する詩で、「記憶せよ、十二月八日。／この日世界の歴史あらたまる。／アングロサクソンの主権、／この日東亜の陸と海とに否定さる。／否定するものは彼等のジャパン、／眇たる東海の国にして、／また神の国なる日本なり。」と詠んでいる（吉本隆明『高村光太郎』増補決定版、春秋社1970.8.15、p109）。また著名な社会学者・清水幾太郎は、自身の伝記で、「（開戦前の長い期間の息苦しさから）十二月八日の開戦を知った時、飛んでもないことになったと思うと同時に、軽率で下品な比喩を許して戴けるなら、やっと便通があったという感じがした。この感じは、恐らく、日本中にあったであろう。」と日米開戦時の心境を記している（『わが人生の断片（清水幾太郎著作集14）』講談社1993.4.20、p16）。

《純忠無比》《忠勇無双》《忠烈勇武》：

上に示した戦時下紙芝居の脚本群は、大東亜を解放するための皇軍の《聖戦》が天皇の《聖断》《宣戦》によって開始されたことを歓迎する国民心理を鮮やかに描き出している。世界の大国・米英との開戦の報に接して「飛んでもないことになった」という警戒心は、言論統制下の表層報道の底辺に封じ込められた。そして、この《聖戦》を戦う皇軍兵士に求められ、その特質として賞賛されたのは、“他と比べようのない純粋な忠義と戦闘的精神性”であった。“いかに日本人らしく戦うか”が重視され、勝敗を、そして生死を度外視して戦ってこそ皇軍兵士と

しての忠誠度が高いというタイトな価値観である。

「天に代わりて不義を討つ**忠勇無双**の我が兵は」（『銃後の力』1940.12、軍歌「日本陸軍」1出征の歌詞）、「**純忠無比**なる楠公の大精神」（『一億楠公』1944.10）で、「陸に海に空に皇軍の**忠烈無比**壮烈果敢な戦闘を続け」（『總意の進軍』1942）、「皇祖皇宗の神靈上に在り朕は汝有衆の**忠誠勇武**に信倚」（『宣戦』1942.12、宣戦の詔書）された銃後の国民は「**忠勇無双**の帝国軍人を出した名誉の家を守る」（『炭焼く妻』1942.01）とされるのである。

《大本営》：

天皇の奉勅を発令する最高司令部《大本営》が発表した陸海軍の戦況情報は、戦後、虚偽報道の代名詞として暴かれることになる。しかし、少し意外なことに、紙芝居作品では、12月8日午前6時に大平秀雄陸海軍報道部長がああ甲高い声で発表した大本営発表第一号、あるいはNHK館野守男アナウンサーによって読み上げられた午前7時の臨時ニュース（井上ひさし編『社史に見る太平洋戦争』新潮社1995.8、p7）が4つの作品に殆どそのまま再現されるのみである。その4つは、『進め一億、火の玉父さん』1942.02、『總意の進軍』1942.03、『少年工と母』1942.08、『真珠湾餘聞』1943.01である。



図3 紙芝居「進め一億、火の玉父さん」から

このほかに、支那服のまま日清戦争の《大本営》に参上する場面を描く『鐘崎三郎』1941.12、昭和19年3月6日《大本営》発表の真珠湾九軍神の物語『軍神岩佐中佐』1943.6、大本営海軍報道部長の講演の副題を有する『我は何をなすべきか』1944.10があるものの、支那事変の勃発にともない新たに戦時以外でも設置可能にした「大本営令」により大東亜戦争に移行した《大本営》が、その最高司令部の役割で紙芝居作品に登場することはない。しかし（直接的登場はないとはいえ）、作品中の戦況・戦闘の描き方（文体）が、ラジオ放送やニュース映画を通して終戦までに合計846回流された（前坂俊之『太平洋戦争と新聞』講談社学術文庫

2007.5.10、p396）《大本営》報道的トーンの影響下にあることは否定できない。むしろ、大日本言論報国会などによって脚色された《大本営》報道をそれ以上に脚色することの禁止意識、その忠実なる再現こそが戦時下メディアとしての共通の特徴となっていると言わなければならない。

② 皇軍兵士の戦闘的形容

ここでも用語再現を兼ねて総括的一文とすれば、「家族や地域の《武運長久》の祈りと《無敵》の《帝国軍人》《日本武人》としての誉れを担い、《戦陣訓》の覚悟をもって出征・《志願》してきた兵士たちは、やがて《長期戦》《持久防御》の戦局で《死地》に直面し、《見敵必殺》の《神兵》《決死隊》《軍神部隊》《挺身隊》として《特別攻撃隊（特攻）》《肉弾（突撃）》に駆り出されて《散華》《玉砕》し、国家はその一部の兵士を《軍神》として奉り国民に宣揚した」となるか。しかし、①と同様、紙芝居に如何に描かれているかを明らかにすることが、本稿の目的である。順に主な用語の使用例を参照したい。

《武運長久》：

武家階級の《武運長久》祈願は、村落共同体の五穀豊穰、家族の無病息災とともに、中世期からの神社信仰を引き継ぐものであるが、太平洋戦争期には、出征兵士を送る幟や日の丸の寄せ書きに、家族の「生きて帰ってきてほしい」との精一杯の願いを込めて描かれた言葉であった。「流石に息子の**武運長久**が思い出されるのでしょうか」（『貯金爺さん』1939.12）、「氏神様に日参し我が子の**武運長久**を祈るお婆さん」（『戦士の母』1941.06）、「毎朝神棚に皇軍の**武運長久**を祈り」（『みのる秋』1941.11）、「掃除が済んで神前に額づいて皇軍の**武運長久**を祈願」（『踏切番と子供達』1942.10）などに一それが個人に対してであれ皇軍に対してであれ、一般的といえる使用例が見られる。また、『山本五十六元帥』1943.12に「**武運長久**を祈るぞ」と部下へ言葉を発する場面があることは、これが上級軍人の言葉でもあったことを証する。

その一方で、「（子供）僕も早く**武運長久**を祈られるような身になりたいなあ」（『父』1942.08）、「夫大義に立つ朝、母は心清らかに**武運長久**を祈り、妻は心静かに勝利を祈る。愛児征き夫出で立つも茲に銃後日本の姿」（『宣戦』1942.12）になると、民間信仰的な原義を逸脱したある種の過剰さが侵入していると言わざるを得ない。早く出征兵士になりたいと背伸びをする子供の描写、母は武運長久を祈ることができても、妻は勝利を祈るしかないという役割差のなかに潜む残忍さ（そのイノセンス）

は、果たして平均的な感覚であったといえるだろうか。

《帝国軍人》《日本武人》：

《帝国軍人》は、近代日本のひとつのエリート像であるとともに、出身階級・階層の平準化作用をもった軍隊組織内の武勲は庶民の「成功」の証でもあった。「出でては鬼を挫ぐ**日本武人**の真面目」（『空の軍神加藤少将』1943.11）、「昭和18年5月23日偉大なる**武人**の英霊は東京駅頭に迎えられた」（『山本五十六元帥』1943.12）は前者の、「**帝国軍人**の亀鑑として永久に仰がれる」（『忠魂の歌』1942.05）は後者の一般的使用例である。「立派な**帝国軍人**の父親があったと云って子どもを育てたい」（『親心子心』1941.09）の父親像や、「私は教壇長として皆様方の御子弟をお預かりして立派な**帝国海軍軍人**たるよう教育いたします」（『海の母』1943.07）の教師像も同じエトスを共有している。

しかし、《帝国軍人》に込められた思いは必ずしも平面的ではない。『産業報國』1941.10の「僕も**帝国軍人**だ、人におくれぬ働きをしてみせよう」、「炭焼く妻」1942.01の「（妻に）明日からの俺はただの家庭の一人ではない。大君の御楯たる**帝国軍人**として戦線に立つ身となるのだ」の2作からは、出征の悲壯的覚悟を、「人におくれぬ働き」をする「ただの家庭人ではない」帝国軍人として代償しようとした庶民兵士の心理的反映が読み取れよう。『軍神岩佐中佐』1943.06において「（昭和16年秋帰省の折）立派に成人してくれた我が子、親も子も口には出さないうが**帝国軍人**として大君の御楯として潔い働きをせよ、しますと固く信頼しあう此の親此の子、今生の暇乞いに来た我が子の心の中を知るや知らずや」と描かれる沈黙の別れ（この後真珠湾攻撃に出撃）の場面は、本用語に限っての感想ではあるが、戦時下紙芝居の脚本表現として深さの限界を見せているといえるかもしれない。

《戦陣訓》《軍神》《志願（兵）》：

かたや、1941年1月東条英機陸相が示達した《戦陣訓》については、「横田老人の朗読する**戦陣訓**の一説が潮々と響き渡ってくる。万死に一生を得て帰還の大命に浴することあらば……」（『胸の中の歌』1941.08）、「（隊長朗読）死生を貫くものは崇高なる献身奉公の精神なり……」（『忠霊陣地』1944.06）と、その一節が引用されるのみである。兵士への浸透の薄さが紙芝居脚本からもうかがわれる。その国体観・死生観については井上哲次郎・山田孝雄・和辻哲郎・紀平正美らが、文体については島崎藤村・佐藤惣之助・土井晩翠らが校閲に参画したとされ（松本健一『日本の失敗』岩波現代文庫2006.6.16、p303）、「生きて虜囚の辱を受けず」の一節（本訓その二第八、名を

惜しむ) によって、多くの軍人・民間人が餓死や玉砕・自決に追いやられたといわれる文献である。『俘虜記』の大岡昇平が、1971年11月芸術院会員の辞退談話で、帝国陸軍軍人でありながら捕虜になるという汚点をもった自分が国家的榮譽を受けるわけにはゆかないと語ったことが筆者の記憶にも残っている。しかし、軍記作家・伊藤桂一は「辛酸と出血を重ねてきた兵隊への正しい評価も同情も片末もない」「いうも愚かな督戦文書」(『兵隊たちの陸軍史』新潮文庫2008.8.1、p356)であると言い、戸部良一によれば戦陣訓は軍紀弛緩の改善にほとんど影響を及ぼさなかった(『逆説の軍隊』中公文庫2012.7.25、p344)。送り手と受け手の間で、そしてまた世代や置かれた立場の相違が、このような極限文書の受け止め方を大きく分ける。

〈軍神〉を描く6作品も、「**軍神**橋総隊長、偉大な軍神の死そのままに」(『あゝあの赤い夕陽』1941.12)、「**特別攻撃隊九軍神**の中にその名を連なれる上田兵曹長」(『軍神の母』1942.06)、「**昭和19年3月6日、九軍神の大本営発表**」(『軍神岩佐中佐』1943.06)、「**軍神**(山本元帥)に続け、遺烈をつげ」(『空飛ぶ御盾』1943.08)、「かかる**軍神**を育て上げた偉大なる母」(『小楠公の母』1943.03)、『空の軍神加藤少将』1943.11では「タイトルのまま」のように、国民的称揚を集める神格の対象であったにしては、紙芝居作品中の用例としては、戦時下の言論帯域に依拠しただけの平凡な形象化にとどまる。〈軍神〉ものの出版が1943年秋以降に姿を消していくことには、太平洋諸地域での相次ぐ敗北や国民の厭戦心理の蔓延といった社会的な創作背景を見るべきだろう。特殊戦役に赴いた個人の称揚という類型的な物語が、戦争の苛烈化のなかで、どこまで消耗(国民的物語の鑑賞)に耐えられたかが問われる作品群である。

〈志願(兵)〉については、20歳以上の徴兵検査義務[11/徴兵、出征、帰還]との関係でも分析する必要があるところだが、ここに採録したものは、すべて海軍を志願する少年の物語である。「(母に)海軍を志願しようと思う」(『海の母』1943.07)と言う戦死した兄をもつ少年は、



図4 紙芝居「軍神岩佐中佐」から

海軍水兵となり昭和16年12月8日に撃出する。「(こっそり少年飛行兵の規則書をもつ子供に)志願して採用になったらしっかりやるんだよ」(『闘ふ母』1943.07)と声をかける母を描くこの作品の少年は海軍飛行予科練習生(予科練)を希望している。『神兵と母』1944.09は、「(清一は)予科練志願の年齢を過ぎていたが、やがて適齢となって入営」し、1947年2月14日マレー半島パレンバンに向かう落下傘部隊(挺進飛行戦隊)の物語である。「お兄さんと同じような飛行士になりたい、僕はどうしても志願したい」(『空飛ぶ御盾』1943.08)、「(兄に)徴兵検査まであと七年それまで待つてられない。14歳になったら海軍を志願しようと決心している」(『我は海の子』1945.01)のように兵種不明の作品もある。母親に向かって、先に出征した兄に続く徴兵を待たず〈志願〉の決意を表すこれら少年の物語には脚本構成も緊密なものがあり、また少年兵を送り出す「家=社会」への想像力を孕む文体の粘着性は直線的な戦意高揚ものと決定的に異なっている。その意味では、用語を対象とした横串的分析よりもむしろ個々の作品の解題に適しているといえることができる。

〈長期戦〉〈死地〉〈特別攻撃隊(特攻)〉〈肉弾〉〈散華〉〈玉砕〉:

中国戦線の長期化、石油や鉄鋼などの資源確保を目指した南方侵攻、アメリカによる経済封鎖・日米交渉の決裂によって宣戦布告に至った太平洋戦争の開戦時には、「大本営は必勝とは行かぬまでも不敗の算ありと信じ…初期作戦は約五カ月で南方要城の占領を終わり作戦は一段落を画するものとの見通しをもって」、「(戦争終末促進に関する腹案は)米国の継戦意志の喪失に求めようとした」(森松俊夫『大本営』教育社歴史新書1980.3.20、p225)。しかし「戦略は、長期持久戦に対する勝算も戦争終結の目標もないまま、現実に起こる長期持久戦と成立しない短期決戦の間をさまよって混乱した」(黒野耐『日本を滅ぼした国防方針』文春新書2002.5.20、p235)。開戦時に支那事変から「聖戦五年」(既出『産業報国』1941.10)と描かれた戦争は、満州事変から起算すると既に10年が経過していた。「しばしば精神力を強調する短期決戦」(戸部『前掲書』、p236)の見通しは薄くなり、「開戦初期に攻勢をとって短期決戦を目指すそれが戦争が終わらない場合は長期持久戦に移行して総力戦を戦い抜く」(同)という第一次大戦末期の国防方針が、南方戦線での相次ぐ敗北とともに、皮肉にも様相を変えて現実となっていく。

日米開戦2年前の『貯金爺さん』1939.12に早くも「これから幾年続くかも分からぬ**長期戦**」の用語が現れ、「戦

争は始まったばかり、戦いはこれから、今度の戦争は**長期戦**です」(『總意の進軍』1942.03)、「今日のような**長期戦**になるといつどんな悪宣伝があるかわからない」(『防諜戦士』1942.06)のように、初期の戦果への警戒心を求める作品もあるが、これらは敗戦への序曲ですらあり得なかっただろう。

この一年有余の後に、厳しい戦闘地は**《死地》**に変じ、〈武運長久〉の祈りで送り出された兵士の戦争死を**《散華》**と呼ぶ作品が現れる。戦地での〈肉弾〉攻撃を描く作品が増え、志願の形で始まった**《特別攻撃隊(特攻)》**〈玉砕〉は最後には全軍規模に拡大していった。1943年5月14日の大本営発表がアッツ島守備部隊の全員玉砕を報じて以来、日本軍が**《玉砕》**した戦いは12回であった(平櫛孝『大本営報道部』光人社NF文庫2006.3.9、p216)。ラジオ放送で『海ゆかば』の前奏曲と“玉砕”ということばが重なるにつれて、国民の間には不安と焦慮が深まっていった(井上『前掲書』、p24)。「特攻は戦術ではない。指揮官の無能、墮落を示す“統率の外道”である」(神坂次郎『今日われ生きてあり』新潮文庫1993.7.25、p191)といわれる**《特攻》**は、海軍神風特別攻撃隊のレイテ沖撃1944年10月21日を初とし、一カ月後陸軍もこれに続いた。紙芝居作品としては、特別潜航艇による真珠湾攻撃の九軍神を描く作品(『軍神の母』1942.06、『軍神岩佐中佐』1943.06)において、敢えて**《特別攻撃隊》**の用語が当局の指導によって使われていること、レイテ沖海戦から沖繩戦において全面化した陸海軍の**《特攻》**が同時代的に作品化されることはなかったことを付記し、以下、コメント抜きで脚本を引用する。

「(恩賜の酒の味)それは、今こそ**死地**に赴く五人の胸に爽やかな覚悟を染み渡らせていく。誰も語らぬ。誰も動かぬ」(『中澤挺身隊』1943.10)。「(彫刻家の中山さん)もう一息という時、**無念や敵弾に散華**してしまった」(『銅像物語』1943.08)。「**山本司令長官、南海において散華**さる」(『空飛ぶ御盾』1943.08)。

「魚雷は飛行機や軍艦、潜水艦などから打出され、敵に**肉弾**攻撃をやって壮烈な自爆を遂げるものです」(『風呂屋の大ちゃん』1943.01)。「**肉弾**をもってしても夜襲をもってしても敵の空爆は防ぎようがなかった」(『爪文字』1943.12)。「**肉弾!肉弾!**反撃してくる敵装甲車目がけて勇士らは火の玉となって」(『天降る神兵』1944.01)。「(マーシャル諸島)我が守備部隊は寡兵をもって壮烈なる**肉弾**攻撃を遂行」(『我は何をなすべきか』1944.10)。「(ガダルカナル、アッツ島、マーシャル)

敵の膨大な物の量には**肉弾**を叩きつけるよりほかなかったのだ」(『海の男』1944.09)。「(旅順)皇軍独特の**肉弾**また**肉弾**、幾度か突撃は強行」(『一億楠公』1944.10)。

「護国の華と散った**特別攻撃隊**の偉業に関し、謹んで発表」(『軍神岩佐中佐』1943.06)。「相次ぐ**特攻**出撃の緊張から、終戦後の興奮と混乱、すべてがまるで夢のようである」(『新生』19--;戦後の出版と推定)。

「これ以上生き延びることは徒に敵の餌になることだ。明日明け方を期して全員突撃をして**玉砕**することにす」(『爪文字』1943.12)。「重傷者続出、弾薬は全く尽き今は弾丸一つ残っていない。土木中隊長は全員**玉砕**を決意した」(『忠霊陣地』1944.06)。



図5 紙芝居「忠霊陣地」から

③ 皇軍はどう描かれたか

以上、〈皇軍〉を限取る①精神的特質を形容した用語と、②その極限的軍隊行動を表現する用語の使用例を集中的に見ることにより、「皇軍物語」への俯瞰性のある程度は得ることができたと思われる。そのことを踏まえ、あらためて天皇の軍隊はいかなる目的で紙芝居に描かれたのか、総称としての〈皇軍〉の代表的使用例を示しながらまとめよう。

一つには、海の向こうの過酷な環境で戦う我が〈皇軍〉への想像力を喚起することにより、銃後国民の精神的祈念と物質的支援を動員しようとするのであっただろう。

「海の彼方の大陸には我皇軍の兵士が決死の覚悟で奮闘」(『貯金爺さん』1939.12)

「昼は猛烈に暑く夜になるととても寒い、皇軍兵士の辛労は想像以上」(『朝日ニュース紙芝居;昭和15年第5輯』1940.05)

「あの白雲のずっと彼方に忠勇なる皇軍の兵士はお国のために身命を捧げ戦っている」(『踏切番と子供達』1942.10)

「ご飯を食べる前に皇軍将士とお百姓さんに黙祷を捧げ」(『神様の配給』1943.03)



図6 紙芝居「英東洋艦隊全滅す」から



「一針一針は(略)皇軍の勇士達への銃後の力強い後押し」(『妻』1943.07)など。

二番目は、〈皇軍〉の戦果を意識的に描くことにより、戦争への積極的・攻撃的関心を煽ろうとすることにあったと考えられる。

「刻々に知らされる皇軍快捷の報」(『英東洋艦隊全滅す』1942.01)

「陸に海に空に皇軍の忠烈無比壮烈果敢な戦闘は続けられ」(『總意の進軍』1942.03)

「軍靴が響き銃剣のきらめくところ皇軍の精鋭いよいよ冠たり」「おほみいくさの西太平洋に動くより早く」(『宣戦』1942.12)

「世界の横綱であった米英を向うにまわし(略)わが皇軍を組織せる日本男子の偉大さ」(『小楠公の母』1943.03)

「神州は不滅なり、皇軍は必ず勝つ、前線に続く銃後の人々を信ず」(『忠霊陣地』1944.06)

「この秋我々は皇軍の至妙なる作戦に絶対の信頼を寄せ」(『神機いたる』1944.11)など。

先に細かい関連用語の引用を見てきた後に、このようなまとめとするのはやや単純に過ぎるとの批判を免れない危惧もあるが、海の彼方の兵士に係累の安否を重ね、〈皇軍〉の戦果に日清戦争以来の臥薪嘗胆を跳ね返す自国への信を寄託するという国民心理を、これらの作品に接した戦時下の観客から引き出す演劇的な効果が備わっていたことは否定できない。

日中戦争から多用される〈聖戦〉は、太平洋戦争開戦後、共存共栄の東洋新秩序を建設することを目的とした

自存自衛の戦いであるという戦争理念として描かれ、またそれは、正義のための神聖なる戦争という宗教色をも帯びてくる。天皇の〈宣戦の大詔〉は、あたかも「米英東亜侵略の歴史の幕を閉ざし」(『宣戦』1942.12)、「重苦しい空気に閉ざされていた窓を開けキレイな神々しい空気を入れ」(『敵だ!倒すぞ米英を』1942.12)てくれるものとして歓迎されたのであった。

無比無双の《純忠》《忠勇》《忠烈》の精神を謳う〈皇軍〉について、家永三郎は、攻撃精神、必勝の信念、忠君愛国、至誠といった日本軍の精神主義が、科学兵器の発達により軍人の勇敢さだけに依存できなくなった総力戦の時代にまで持ちこまれたことが、いたずらに無用の犠牲を続出させる原因となったと指摘する(『太平洋戦争』岩波現代文庫、2002.7.16、p76)。さらに、陸軍刑法「司令官其ノ尽クスベキ所ヲ尽クサズシテ敵ニ降り又ハ要塞ヲ敵ニ委シタルトキハ死刑ニ処ス」、戦陣訓「生きて虜囚の辱を受けず」を挙げ、それが生命を無意味に断たねばならぬ悲劇に追い込み、戦死者よりもはるかに多数の兵士が餓死・病死したのも捕虜となることを許さない日本軍の心理的重圧から生じた惨劇であったという(同p77)。しかし同時に、言論界が「聖戦」「八紘一字」「大東亜建設」等々を鼓吹し、新聞には「無敵皇軍」の「大戦果」のみが報道された客観的状況のなかで、国民大衆が熱心に戦争協力に傾いたことは不可避であった(同p197)とも書かれるのである。

そのような戦時下紙芝居の脚本用語から描き出される〈皇軍〉の姿を、重ねて簡略に引用すれば、「天皇の〈宣戦〉布告にもとづき、〈聖戦〉の本義を完遂するために、〈忠烈〉の精神で戦う〈皇軍〉」であり、「〈武運長久〉の祈りと〈帝国軍人〉としての誉れを担って出征してきた兵士たちの、やがて〈長期戦〉《持久防御》の戦局で《死地》に直面し、《特攻》〈肉弾〉戦に駆り出され《散華》《玉砕》した物語であった。私達は(そして間違いなく当時の人達も)、戦記文学の代表作といわれる火野葦平『麦と兵隊』などを通して、延々と続く行軍、塹壕での眠りと飲食の食り、そして排泄という戦争の日常が、軍隊生活において大きな位置を占めていたことを知っている(戦死者の大半は病死・餓死であった)。国策紙芝居にも、『チョコレートと兵隊』『戦地の風』のように、戦地の日常風景を描いたものがないわけではない。しかし、大本営が発表する必敗・虚飾の戦地、武運長久の祈りで送り出された父や息子の無機質な戦争死、その国民的体験の受容を聖戦意識の接

線方向で媒介したもの—これが国策紙芝居における「皇軍物語」の等身大の姿に近いのではないかと、今は本項を仮説的に閉じることにしたい。

国策紙芝居のもっとも先鋭的なジャンルである[06／皇軍物語]に予定外の字数を費やしたため、これ以外の項目については、脚本からの個別的紹介を行う紙幅がなく、以下、採録用語一覧(数字は登場回数)を示すだけとなる。

[07／軍隊・軍務] 53件

戦地(戦場) 22、戦友 16、敵機(襲来) 12、輸送船(団) 11、海軍(省) 9、太平洋艦隊 7、訓練 6、帝国海軍 6、敵前上陸 6、連合艦隊 6、軍旗 4、軍服(飛行服、防寒服) 4、敵陣 4、夜襲 4、友軍 4、行軍 3、守備隊 3、陸海軍 3、Z信号旗 2、軍務 2、索敵(機) 2、斥候 2、駐屯地 2、敵艦隊 2、敵弾 2、敵兵 2、内地 2、密林(戦、ジャングル) 2、喇叭(ラッパ)(突撃〜) 2、ゲリラ戦 1、海軍記念日 1、空軍 1、軍楽 1、軍艦行進曲 1、軍靴 1、航空日(9月20日) 1、信号命令 1、炊事当番 1、占領地 1、掃討戦 1、敵舟 1、敵戦闘機 1、敵前渡河 1、敵都 1、討伐行 1、日本艦隊 1、米兵 1、捕虜 1、補給 1、奉公袋 1、夜間爆撃 1、野戦郵便局 1、露営 1

[08／兵器・軍備] 35件

飛行機 12、荒鷲 11、軍艦 8、潜水艦 7、駆逐艦 4、焼夷弾 4、海鷲 3、魚雷 3、軍刀 3、手榴弾 3、落下傘 3、機関銃 2、戦艦 2、戦車 2、大砲 2、弾丸 2、タンク 2、爆弾 2、竹槍 2、火薬 1、機雷 1、航空母艦 1、巡洋艦 1、軍費 1、軍備制限 1、軍用軽気球 1、軍用犬 1、軍用鳩 1、原子爆弾 1、主力艦 1、首長機 1、信書管 1、造兵廠 1、地雷 1、陸鷲 1

[09／階級、兵科・兵種・各部] 41件

航空隊、航空部隊、航空兵、飛行兵 10、上等兵 10、部隊長 10、将兵 9、一等兵 7、兵曹(長) 7、軍医 6、伍長 6、少年飛行兵 6、中尉 6、軍曹 5、大將 5、中佐 5、少尉 4、大尉 4、中将 4、水兵 3、大佐 3、騎兵(上等兵) 2、軍属 2、工兵(隊) 2、初年兵 2、少佐 2、少将 2、少年戦車兵 2、中隊長 2、伝令(兵) 2、分隊長 2、衛生兵 1、海員 1、機動部隊 1、憲兵 1、元帥 1、准尉 1、二等兵 1、歩兵 1、砲兵 1、輸送戦士 1、陸軍飛行部隊 1、連隊長 1、輜重兵 1

[10／教育] 12件

少国民 7、兵学校 2、海軍水雷学校 1、海軍潜水学校 1、海兵团 1、戸山学校 1、士官学校 1、普通海員養成所 1、予科練 1、幼年学校 1、養鋭学校(福岡) 1、陸軍大学 1

[11／徴兵、出征、帰還] 16件

出征(兵士、軍人)、征途 24、招集令状(赤紙) 9、帰還(兵士、勇士)、帰国兵 6、出征家族(遺族) 5、内地送還(帰還) 4、応召 3、国民皆兵(令) 3、在郷軍人会 3、除隊 2、徴用 2、入營 2、帰順兵 1、徴兵(令) 1、徴兵検査 1、復員軍人 1、兵隊検査 1

[12／戦死傷、慰問、勲章・功勞] 30件

戦死(者) 25、慰問(品、袋、文) 14、英霊(英魂)、忠霊 12、護国の神(華、鬼、英霊) 12、遺骨、遺品、遺影、遺言 10、傷痍軍人(傷兵、傷病兵) 8、名誉の戦死 8、陸軍病院 5、看護婦 4、軍事扶助法(軍人援護) 4、武勲 3、野戦病院 3、マリアア 2、感状 2、軍事病院 2、二階級 2、病院船 2、名誉の家 2、遺言状 1、恩賜 1、海軍葬 1、儀仗隊 1、犠牲者 1、勲章 1、国葬 1、失明戦士 1、殉国 1、殉難碑 1、赤十字章 1、大勲位 1

戦前の日本軍の姿を構成するために必須の付随的用語が並ぶが、本稿第1回目の冒頭に記したとおり、脚本からの網羅的採録を基準に蒐集した用語であるので、特殊「皇軍物語」的な潤色性は薄く、用語の通覧によって分類項目ごとにある程度のイメージを作ることは可能かと思われる。今後の連載のなかで、関連する用語を取り上げることも考慮したい。

最後に、今後の課題ともなる二、三の覚書を付記しておきたい。

冒頭に記した陸海軍の統帥権と政治への不関与の二重構造が生み出した皇軍兵士のクーデターは、戦時下になると歴史の暗部として伏せられ、紙芝居にもまったく登場することはない。また明治憲法の発布に先立つこと7年、明治天皇が陸海軍の軍人に下賜した『軍人勅諭』(「我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある」と書き出される)も直接的には登場してこない。にも関わらず70余年後の戦後憲法下に生きる我々は、ここに記された「忠節・禮儀・武勇・信義・質素」の軍人徳目が日本軍隊の基本的精神として継承され、『勅諭』の創作者たち(元老)が既に去った時代に、「世論に惑はず政治に拘らず」「死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよ」と続く「忠節」の急進化が生み出した事態を、紙芝居作品群から観照的にあるいは批判的に読み取ることができる。また、紙芝居作品に現れる精神的形容と極限的軍隊行動を表現する用語から〈皇軍〉の姿を描き出すことも(ある程度は)可能であった。しかし、皇道派青年将校の鎮圧に自ら乗り出そうとした、また、わが国の軍隊は代々天皇の統率したまう所にあると勅諭したその「主体」は、紙芝居には不在である。先に仮説として述べた「国策紙芝居の等身大の姿」をさらに描き出すには、創作者意識において御簾の向こう(善悪の彼岸)にある存在が如何なるものであったのか、またこれらの作品が戦時下社会にどのように流通・受容されていたのか、稿を改めて解明していく必要がある。

(続)

研究班紹介

9. 日本近世生活絵引・南九州編

小熊 誠 (非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表)

『日本近世絵引』は、非文字資料研究センターの中心的研究の一つとして、21世紀COEプログラムの共同研究以来継続して研究が行われてきた。『日本近世絵引』の北海道編、東海道編、北陸編が、第1期の共同研究報告書として刊行されている。第2期として奄美・沖縄編の研究が行われ、ここでは、「琉球交易港図屏風」と「八重山蔵元絵師画稿」のほか、「南島雑話」以前の近世奄美の習俗を描いた絵巻「琉球寫真景」を取り上げた。

奄美の習俗を見ると、琉球・薩摩双方の影響が確認できた。その関連で、薩摩を中心とした南九州地域にお

ける風俗絵巻を研究する必要があると判断し、第3期ではその絵引きを作成することとした。

絵引の資料としては、「薩藩勝景百図」や「倭文麻環」などを取り扱う予定である。「薩藩勝景百図」は、薩摩の百景が描かれているが、風景だけでなく神社や人びとの様子も描きこまれており、そこから近世薩摩の人びとの生活をうかがい知ることができる。「倭文麻環」は、薩摩にまつわる故事や怪談、偉人などが絵によって書き表されており、前者同様に人びとの生活を表す絵引を作成することができると思われる。

2015年度 センター研究員・研究協力者

センター研究員

名前	所属部局	職名	研究班
内田 青蔵 (センター長)	工学研究科建築学専攻	教授	3
孫 安石 (副センター長・運営委員・研究会担当)	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	3
小熊 誠 (運営委員<国際交流担当>)	歴史民俗資料学研究所	教授	4, 9
鳥越 輝昭 (運営委員<国際交流担当>)	外国語学研究科欧米言語文化専攻	教授	2
熊谷 謙介 (事務局長 / 運営委員<事務総括・編集担当>)	外国語学部国際文化交流学科	准教授	2
大串 潤児	信州大学 人文学部	准教授	8
大里 浩秋	外国語学研究科中国言語文化専攻	名誉教授	3
川島 秀一	東北大学 災害科学国際研究所	教授	5
木下 宏揚	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	7
金 容範	非文字資料研究センター	客員研究員	3
クリスチャン・ラットクリフ	外国語学部国際交流文化学科	准教授	1
小松原 由理	外国語学部国際文化交流学科	准教授	2
駒走 昭二	外国語学部国際文化交流学科	准教授	9
昆 政明	外国語学部国際文化交流学科	特任教授	6
佐野 賢治	歴史民俗資料学研究所	教授	7
後田多 敦	外国語学部国際文化交流学科	准教授	4
ジョン・ボチャラリ	明治大学文学部 歴史民俗資料学研究所	客員教授 非常勤講師	1
菅 浩二	國學院大學神道文化学部	准教授	4
須崎 文代	非文字資料研究センター	客員研究員	3
鈴木 陽一	外国語学部中国語学科	教授	1
ステファン・ブッヘンベルゲル	外国語学部国際文化交流学科	准教授	2
田上 繁	歴史民俗資料学研究所	教授	6
津田 良樹	工学部建築学科	助教	4
中島 三千男	歴史民俗資料学研究所	名誉教授	4
能登 正人	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	7
前田 孝和	株式会社 神社新報社	取締役総務部長	4
宮田 純子	芝浦工業大学	助教	7
村井 寛志	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	3
森 武麿	歴史民俗資料学研究所	教授	6, 8
森山 優	静岡県立大学国際関係学部 大学院国際関係学研究所	准教授	8
安田 常雄	歴史民俗資料学研究所	特任教授	6, 8
安室 知	歴史民俗資料学研究所	教授	5
渡辺 美季	東京大学大学院総合文化研究科	准教授	9

研究協力者

名前	所属部局	職名	研究班
新垣 夢乃	狛江市教育部社会教育課	嘱託職員 (学芸員)	8
稲宮 康人	写真家		4
上原 兼善	岡山大学	名誉教授	9
金山 浩	非文字資料研究センター		4
金子 展也	株式会社アンカーネットワークサービス		4
何 彬	首都大学東京 東京都市教養学部	教授	1
菊池 敏夫	日本大学通信教育部	非常勤講師	3
吉川 良和	外国語学部中国語学科	非常勤講師	3
君 康道	東京大学大学院総合文化研究科	講師	1
栗原 純	東京女子大学現代教養学部	教授	3
小島 摩文	鹿児島純心女子大学 国際人間学部	教授	9
小松 大介	豊島区立郷土資料館	資料整理員	7
小山 亮	広島市の平和ミュージアム	研究員	8
齋藤多喜夫	横浜外国人居留地研究会	会長	3
辻子 実	(元) 日本キリスト教協議会靖国神社問題委員会	(元) 委員長	4
鈴木 一史	小田原城天守閣	学芸員	8
鈴木 一弘	高知大学自然科学学系理学部門	助教	7
徐 東千	東京大学大学院工学系研究科	準博士研究員	1
田島 奈都子	青梅市立美術館	主査 学芸員	3
陳 雲蓮	非文字資料研究センター		3
常光 徹	国立歴史民俗博物館	名誉教授	5
得能 壽美	法政大学沖縄文化研究所	兼任所員	9
雷井 正憲	漢陽大学校建築大学	教授	3
中井 真木	早稲田大学 国際教養学部	助手	1
橋口 亘	南さつま市教育委員会(坊津歴史資料センター 輝津館) 主任		9
原田 広	(元) 非文字資料研究センター		8
本田 佳奈	一般財団法人 鹿島市民生涯学習・文化振興財団 鹿島市民図書館		4
松田 陸彦	国立歴史民俗博物館	准教授	5
松本 和樹	歴史民俗資料学研究所	博士後期課程	8
水町 史郎	東芝メディカルシステムズ		4
山本 志乃	旅の文化研究所	主任研究員	5
李 利	元歴史民俗資料学研究所 博士後期課程 (満期退学)		1
若宮 幸一	旧古河鉱業若松ビル	館長	6
渡邊 奈津子	公益財団法人 大学基準協会	調査員	4

- 研究班：1. 「マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引」 編纂共同研究
 2. 19世紀前期ヨーロッパ生活絵引研究
 3. 中国・朝鮮の旧日本租界
 4. 海外神社跡地のその後
 5. 汽水の生活環境史
 6. 船上生活者の実態とその変容に関する研究
 7. インターネット・エコミュージアムのためのデータマイニングとユーザーインターフェース等の基盤技術に関する研究
 8. 戦時下日本の大衆メディア研究
 9. 日本近世生活絵引・南九州編

2015年度 奨励研究者決定

研究課題	氏名 (所属)
「震災記念堂の設計競技応募図案に見る建築デザインの傾向」	姜 明采 (工学研究科建築学専攻博士後期課程)
「オンタオ (竜神) からみたベトナム社会-北部地域を中心に-」	鍋田 尚子 (歴史民俗資料学研究所博士後期課程)
「台湾の民暦と通書」	游 舒 婷 (歴史民俗資料学研究所博士後期課程)
「チベット仏教におけるバリン儀礼とチャムの関連」	根敦阿斯尔 (歴史民俗資料学研究所博士後期課程)
「狐話の生成と狐仙信仰-湖北省伍家溝村を事例に-」	程 亮 (歴史民俗資料学研究所博士後期課程)



年報『非文字資料研究』への寄稿について

人類文化の研究は、人間それ自身と人間が織り成す社会を研究することを目的とするが、その研究は文字で表現された資料を主な対象として行われてきた。しかし、人間の活動とその結果生み出されるものは、文字で記録されたものに止まらない。絵画・写真・映画・建築・民具・音声などの形で記録されたり、地形や景観あるいは人間の身体それ自身に刻み込まれたりもする。さらに、匂い・しぐさ・味覚・感触など「記録化」することが難しいものも、人類文化を構成する大事な要素である。

非文字資料研究センターは、そのような文字以外の記録及び文字では表現されにくい人間の諸活動を「非文字資料」として体系化し、それを研究する新しい方法を開発し、より包括的な人間と文化の理解にいたることを目指している。21世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」(2003 - 2007 年度)以来、わたしどもは、その目的を達成するために「図像」<身体技法> <環境・景観>のなかから研究課題を絞り込み、共同研究を展開してきた。この共同研究は、歴史学・民俗学はもとより、文化人類学、比較文化論、美術史、建築史、災害史、情報科学などを専門とする内外の研究者によって支えられてきた。

このように多様な学問的広がりを持つ非文字資料は、世界各国の地域文化の諸相を具体的かつ可視的に示す絶好の資料であるとともに、資料自体が多層的な時代・地域において蓄積されてきた背景をもっているため、研究方法としても比較歴史的な視点を求めるものであり、ひいては、人類文化研究の総合的・学際的な発展の可能性を有している。

しかし、研究資料の分析指標の設定、意味の解釈という困難な作業には、研究概念と成果の普遍性が求められる。また世界共通の標準的・普遍的な研究資料の資料化・体系化を行うには、世界各地の関連学問分野の研究者による相互検証が不可欠である。本センターの研究活動においても、関係研究者との共同作業を必要としている。

年報『非文字資料研究』は、世界の各地域において活躍されている非文字資料研究者からの寄稿を歓迎し、本誌が多分野にわたる研究者相互の学問的遭遇の場として発展するとともに、人類文化の豊かな研究に寄与することを期待する。

年報への寄稿をご希望の方は、当センターのホームページをご参照いただき、執筆要項等の詳細をご確認ください。

エントリー募集期間：毎年7月～9月

原稿締め切り：毎年11月末（その後、査読があります）

エントリー用紙：当センターのホームページよりダウンロードしてください。

年報執筆要項：当センターのホームページよりご確認ください。

エントリーシートの提出・年報に関する問い合わせ先：

非文字資料研究センター (E-mail: himoji-nempo@kanagawa-u.ac.jp)

ホームページ: <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

主な研究活動

運営委員会

2014年度		
第8回	1月28日	2014年度予算残額の扱いについて、2015年度奨励研究募集要項 改正(案)について、海外提携機関派遣若手研究者募集要項 改正(案)について、他
第9回	2月27日	2015年度研究担当者人事について、2014年度事業報告書(案)について、他
2015年度		
第1回	4月22日	2014年度決算報告について、2015年度予算(配分)について、他
第2回	5月27日	2014年度奨励研究審査について、セインズベリー日本藝術研究所との協定締結について
第3回	6月24日	2015年度海外提携機関からの招聘研究員について、他

研究員会議

2014年度		
第5回	2月28日	2015年度研究担当者人事について、他
2015年		
第1回	4月22日	2014年度決算報告について、2015年度予算(配分)について、他

研究会

研究班

2014年度		
汽水の生活環境史	12月12日、3月10日	
海外神社跡地のその後	3月8日	
中国・朝鮮の旧日本租界 - 現況調査と現地で発行された出版物の分析 -	12月16日	
戦時下日本の大衆メディア研究	3月26日	
2015年度		
南九州生活絵引	4月11日	
中国・朝鮮の旧日本租界 - 現況調査と現地で発行された出版物の分析 -	4月28日、6月26日	
戦時下日本の大衆メディア研究	4月23日	

現地調査

調査テーマ	日程	場所	調査メンバー
戦時下日本の大衆メディア研究	1/16 - 1/18	京都	森山 優
戦時下日本の大衆メディア研究	2/26 - 3/2	台湾	安田常雄・森 武磨・松本和樹・新垣夢乃
戦時下日本の大衆メディア研究	3/12 - 3/15	北九州	安田常雄・森山 優・松本和樹・富澤先生・新垣夢乃・小山 亮
船上生活者の実態とその変容に関する研究	3/17 - 3/22	長崎	田上 繁・松本和樹・若宮幸一
汽水の生活環境史	3/5 - 3/7	福岡・柳川	安室 知
汽水の生活環境史	2/10 - 2/12	三重	山本志乃
汽水の生活環境史	3/21 - 3/22	宮崎	山本志乃
汽水の生活環境史	3/19 - 3/24	高知	常光 徹
汽水の生活環境史	3/20 - 3/23	三重	川島 秀一
汽水の生活環境史	3/23 - 3/25	佐賀	松田睦彦
汽水の生活環境史	2/26 - 3/28	山口・萩	安室 知
中国・朝鮮の旧日本租界	3/12 - 3/16	上海	大里浩秋・孫 安石・内田青蔵・須崎文代・富井正憲

編集後記

今号も、2015年3月に開かれた「奄美・沖縄絵引」公開研究会の報告を皮切りに、香港、ハワイ、中国、韓国にわたる海外神社の現地調査報告など、充実した研究成果をお伝えしています。前者については、南九州編へと今年度から展開していくことになりました。また招聘・派遣研究者レポートでは、日本そして世界各地で、非文字研究のフィールドワークが行われ、研究者の交流が生まれていることが実感されると思います。このニューズレターがそれを示す交差点であり続けることを願ってやみません。(K.K)

表紙紹介

今やスマートフォンが最先端の花形産業であるが、1920、30年代の中国では紡績産業が最も注目を浴びる産業の一つであった。日本から中国に進出した紡績業(総称として「在華紡」といった)の主力となったのが内外綿株式会社であった。内外綿は、上海と青島のほか、関東州の金州にも支店となる工場を展開した。上海では、初期の1910年代に「水月」(20番手)という商標名を掲げたが、1920年代からは「彩球」(40番手)という商標名で中国、インド、南洋、アフリカまで海外大市場を風靡した(写真は、元木光之編『内外綿株式会社五十年史』、1937年より)。

第19回常民文化研究講座 シンポジウム「漁場図」を読む

日 時：2015年12月5日(土)13:00～18:00
会 場：神奈川大学 横浜キャンパス 3号館305教室
内 容

「なぜ『漁場図』は残ったかー常民研資料からー」 窪田涼子・越智信也
「松江藩・島根県の『漁場図』情報を読み解くー歴史学からのアプローチー」 伊藤康宏
「近世・明治期の漁場図、沿岸絵図にみる景観表現ー歴史地理学からのアプローチー」 橋村 修
「漁場図の活用と可能性ー地理学からのアプローチー」 横山貴史
「ヤマアテと漁場図ー民俗学からのアプローチー」 安室 知

総合討論
「漁場図研究のこれから」 パネリスト全員(司会：安室 知)

主 催：神奈川大学日本常民文化研究所

お問い合わせは、日本常民文化研究所
TEL045-481-5661 内線4358

国際常民文化研究機構 国際研究フォーラム2015 “ホモ・マテリアル” —人と民具と暮らしの国際比較—

日 時：2016年2月20日(土)10:00～17:50
会 場：神奈川大学横浜キャンパス 24号館105教室

趣 旨：“暮らし”の中で作られ、使われてきたモノ、民具の基本的な形態や機能を手がかりにする方法論を確立することで、生活文化の基本的なありかたの国際的な比較ができる。このフォーラムで、民具を通して“人”の個性と普遍性を探る国際常民文化研究の可能性の一例を提示したい。

内 容：講師に、佐野賢治の他、神野善治、J・キブルツ、山田昌久、真島俊一、他中国・韓国の研究者を招いて、“mingu”を総合的に検証する。

非文字資料研究センター 研究成果報告書

北九州市若松洞海湾における 船上生活者の歴史の変容

— オーラルヒストリーからのアプローチ —

●2014年3月20日刊行

●内 容：

論文編

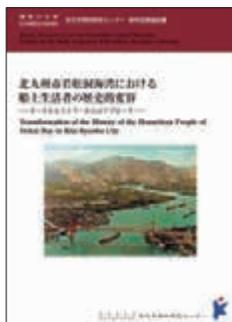
- 第1章 洞海湾の変遷と港湾輸送(田上繁)
- 第2章 洞海湾若松港における船舶輸送(森武磨)
- 第3章 洞海湾若松港における港湾荷役業(松本和樹)
- 第4章 船上生活者の暮らし(安田常雄)
- 第5章 船上生活と子供たち(藤川美代子、田上繁)

資料編

オーラルヒストリー

- ・船上生活者のオーラルヒストリー
- ・若松児童ホーム関係者のオーラルヒストリー
- ・荷役会社経営者のオーラルヒストリー
- ・港運会社経営者のオーラルヒストリー
- ・造船会社経営者のオーラルヒストリー
- ・船食会社経営者のオーラルヒストリー

写真資料



海外神社とは？ 史料と写真が語るもの

●津田良樹・渡邊奈津子(編集・執筆)

●2015年3月31日発行

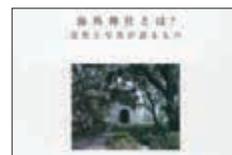
●発 行：非文字資料研究センター

●内 容：

2014年3月に行われた展示会

『海外神社とは？資料と写真が語るもの』の展示図録

- ・東南アジア
- ・台湾
- ・満州～中国東北部～
- ・中華民国～中国～
- ・南洋群島～北マリアナ諸島・パラオ共和国等～
- ・朝鮮～韓国・朝鮮～
- ・関東州～中国東北部～
- ・樺太～サハリン～



非文字研究者の新刊紹介

※内容につきましては、目次より抜粋して紹介しました。

安さんのカツオ漁

川島秀一(著)

●2015年1月15日発行

●発 行：富士房インターナショナル

●価 格：1,800円(税別)

●内 容：はじめに —三陸から土佐へ

- I 久礼への旅
- II 絵馬に描かれたカツオ漁
- III 安さんのカツオ漁 —昭和のカツオ漁民俗誌
- IV 「鮭買日記」に描かれたカツオ漁 —鮭買の旅を追う
- V 震災年のカツオ漁
- VI カツオ漁の風土と災害
- VII カツオ漁の旅



非文字資料研究 No.34

発 行 日 2015年9月30日発行

編 集 ・ 発 行 神 奈 川 大 学 非文字資料研究センター
日本常民文化研究所

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

